【祈祷会奨励】「論じ合おうではないか」イザヤ書１章 ウ信仰告白15:4 (10/11)

第五福音書とも呼ばれるイザヤ書を、今日から皆さんと一緒に読んでいきます。

「アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて見た幻」(1)。アモツがどのような人物であったのかは分かりません。しかし一般的にはユダの王アマツヤの兄弟であったと伝えられています。ある程度裕福な生活をして、神殿や宮殿にも出入りすることが許されていたのではないでしょうか。

「これはユダの王、ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの治世のことである」(1)。つまりイザヤはBC740～690年頃の約50年間に活躍したと言われています。この間に北イスラエルはアッシリアに滅ぼされ(BC720)、南ユダがバビロンに滅ぼされるのはBC585年です。イザヤの預言はイスラエルの滅び(1～39章)、捕囚からの解放(40～55章)、祝福(56～66章)にわたります。バビロンから解放する者として、主が油を注がれたキュロス(45:1)と具体的な名を記して預言することから、後世の時代の人が預言したとして、第二イザヤ・第三イザヤがいたと主張されます。このことは改めて議論することとなるかと思いますが、誰が預言したにせよ、主なる神がイスラエルに対して預言された言葉として、預言書から読んでいかなければなりません。

主はイスラエル（北イスラエル王国だけではなく南ユダ王国も含む）に対して呼びかけ、イスラエルの罪を指摘されます(2)。

しかし主は、ただイスラエルに罪を指摘し、裁きを行うことを警告するのではありません。主は、イスラエルを滅ぼし尽くすことなく、娘シオンを、残されたことをここで宣告されます(8)。主の憐れみがなければ、ソドムやゴモラのように滅ぼし尽くされていたのだと語られます(9)。

イスラエルは主を信じ、主を礼拝し、主に献げ物を献げます(11)。しかし主は残りの民とされたイスラエルの姿を見ておられます。主の恵みを忘れ、形だけの神礼拝、生け贄を、主は喜ばれることはありません。主は形ではなく心を見ておられます。

そして「論じ合おうではないか」と主は言われます(18)。論じ合うとは、目と目を合わせて立つことです。リモートではできないことです。これは、私たちが主を礼拝するということです。

私たちは、礼拝に出席していれば良いのではありません。説教を聞き、理解していれば良いのではありません。献金を献げ、一生懸命に奉仕を行っていれば良いのではありません。あなたの行い・言葉・心の中をすべて知っておられる主なる神の御前に立つことです。そして主の御前に立つ自らの姿を顧みることです。

あなたが罪を犯していたとしても、主の御前に立ち、自らの姿を明らかにし、罪を受け入れるならば、主が無罪と宣言し、神の子として救いに入れてくださることを宣言してくださいます(18)。

しかしイスラエルの民はどうでしょうか？　主はイスラエルを遊女だ・人殺しだと語ります(21)。雅歌を読み進んできた私たちにとって、主が「イスラエルのことを遊女だ」と語るのは、心に響きます。

そして「災いだ
　わたしは逆らう者を必ず罰し
　敵対する者に報復する。……
　不純なものをことごとく取り去る」と語ります(24-25)。主の御前に立ち、主と論じ合い、自らの罪を悔い改める者には、罪の赦しを宣言してくださいますが、主の御前に立つことなく、主から目を背け続ける者に対して、主は裁きを宣告されます。

そして「背く者と罪人は共に打ち砕かれ
主を捨てる者は断たれる」(28)。

「論じ合おうではないか」(18)とお語りになった主は、「シオンは裁きをとおして贖われ　悔い改める者は恵みの御業によって贖われる」(27)ともお語りくださいます。

主による完全なる裁きが宣言され、「恐ろしい神」であると思う人たちがいます。しかし、本来の私たち人間は、自らの罪の故に滅び行く者として生まれ、死と裁きを免れることができなかった者でした。滅び行く私たちに対して、主は、論じ合い、主の御前に立つことを求めておられます。自らの姿を顧みることを求めておられます。

そして主の御前に立ち、自らの姿が明らかにされ、主への信仰を告白するとき、主は罪の赦しをお与えくださいます。そのために神の御子が人となられ、十字架にお架かりくださいました。主の愛と恵みに、感謝と喜びをもって、日々歩み続けたいと思います。

1章において、イスラエルに罪を示された主なる神は、「論じ合おうではないか」(1:18)と語られました。自らの罪を受け入れ、主の御前に立つことが求められています。

そして主なる神は、イスラエルの民に、神による救いに与ることによって与えられる終わりの日について語り始めます。

「終わりの日に／主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち／どの峰よりも高くそびえる」(2)。具体的にはエルサレムにあるシオンの丘を示しています。終末的な出来事であるキリストの十字架の御業は、エルサレムにあるゴルゴタの丘において成し遂げられ、ここにすべての人の目が集中します。

「主の教えはシオンから
　御言葉はエルサレムから出る」(3)。

神の預言は、キリストによって与えられ、シオンであるエルサレムから、使徒たちにより全世界に広められます。

つまり主が預言で語る「終わりの日」は、メシアである主イエスの来臨と十字架の御業により、すでに始まっています。ですから私たちは、新約の現在のことを「終末の時代」と語ります。

そして有名な４節の御言葉に続きます。「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない」。実際にキリストが再臨して、終わりの日に最後の審判が行われるとき、サタンは滅び、サタン・罪によって人にもたらされていた争いや武器は不要となり、主の恵みを祝福する歩みが始まります。このときすべての者は、主の光の中を歩み、神の国に招かれ、主を礼拝し、主を誉め称えるのです。

イザヤ書において「終わりの日」と言う言葉は、2:2にしか出てきません。そして「主の日」も2:12と共に13章6,9節と３回しか出てきません。その代わりに、イザヤを始め預言者は、「その日」と繰り返し語ります。終わりの日は、神を信じる者にとっては祝福が完成する日ですが、イスラエルの民に対しては、罪に対する裁きがもたらされる日として示されるからです。

「あなたは御自分の民、ヤコブの家を捨てられた」(6)と宣言します。主は、ヤコブの家であるイスラエルの民は、神の国に入ることができないことを宣言されます。彼らは、カナンの原住民と混血し、異邦人の代表であるペリシテ人のように、占いに頼り、経済中心となり、武器の力を誇り、主なる神から離れて偶像崇拝を行います。主なる神は、このようなイスラエルの民をお赦しになることはありません(9)。

そして、主はそのような人間を卑しめられ、だれも低くされます(9)。ただ低くされるのではなく、主の裁きが完全に・徹底的に行われます。

この裁きが行われる「その日」である「終わりの日」が来るため、それまでに自らの罪を顧み・悔い改め、主の御前に信仰を言い表すように語られます。

そして、主なる神の御声に聞き従い、主を信じて歩む民に対して、「隠れよ」・「避けよ」と繰り返し語られます(10・21)。

終末の時代における主の裁きがヨハネの黙示録において語られています（８・９章)。天使がラッパをふくことにより、全体の三分の一が裁かれていきます。何が起こっているのか理解した上で、裁きから逃されるために、「隠れよ」と語っています。

そしてさらに、「主の恐るべき御顔・威光の輝きとを避けよ」と語られます(10・21)。旧約の民、モーセも燃える柴（出エジプト３章）において、主の顕現に対して、直接、主の御顔を見ることを恐れて顔を覆いました(3:6)。旧約の時代に語られた預言と、新約の時代に生きる私たちとは、ここで違いが生じます。キリストが十字架に架かられ、死を遂げられたとき、神の聖所を分けていた幕屋は裂け、神が聖霊により臨在される時代を迎えました。そのため、私たちキリスト者は、礼拝毎に主の御前に立ち、主による救いの宣言を御言葉により受けることが求められています。

主は、預言者イザヤをとおして、メシヤによる救いとともに、終わりの日であるキリストの再臨と神の国の完成の時を預言しています。キリストの来臨と十字架の御業は成し遂げられましたが、終わりの日は、私たちにとっても、まだ実現していない、約束された出来事です。だからこそ私たちは、自らの姿を顧み罪を悔い改め、主への信仰を言い表すことが求められています。

イザヤ書２章では、「終わりの日」(2)に現れる神の御国の完成する天国の姿が語られた後、「その日」(2:11,17,20)に起こる裁きについて語られてきました。３章でも、終末におこる出来事が語られていきます。

主なる万軍の神は、民の指導者を奪い、パンや水を断ち、人々が生活できなくすると語ります(1)。そして主が取り去る「頼みとなる者」が列挙されていきます(2-3)。国の安全を守る「勇士と戦士」、国を治める「裁きを行う者」、主なる神に仕える「預言者」と「長老」、さらに「占い師」偶像に仕える者も含みます。軍事・政治・主なる神に仕える者・偶像に仕える者のすべてが取り去られます。

そして主なる神は「若者を支配者にし」ます(4)。若くとも有能な人はいますが、ここでは人の上に立つ訓練も行わず、何を行えば良いのか理解していない若者が支配者として立てられます。それも、主なる神の支配において行われます(参照：12)。

このとき国や社会には混乱が生じます。分裂を引き起こし、虐げ合います。支配者は自己追求を行い、時代間の溝が深まり、不適格者が上に立つこととなります(5)。

そのため指導者・為政者は、人々から尊敬されることはなく、公共性は失われ、秩序は乱れ、彼らは自らの責任を果たさないばかりか、責任を取ろうともしません。

社会崩壊の何よりの原因は、主なる神と敵対し、主の御言葉に誰も聞き従わなかったためです(8-9)。裁きの対象者は、宗教的指導者である預言者や長老も含まれます。

日本は「異教徒が政治を司っているから仕方がない」ではすまされません。社会が腐敗した中、なおもキリスト者が、自らの罪の悔い改め、主への信仰をもって主に仕えているかが問われています(10)。つまり、イザヤは「その日」の裁きを延々と語りますが、主の狙いは、こうした世の中にあって、主により救いに入れられたキリスト者が、主の御言葉に聞き従い、自らの罪を悔い改め、社会の罪に対して警告を発し、神の民として生きることを求めています。

つまり預言書を読むとき、「その日」の裁きについて語り続けますが、そうした中にある、主から与えられる恵み・光をキャッチし、読み解くことが求められます。

主はすべての者に語りかけます。主の御声に聞き従おうとしない者に対する裁きも必ず成し遂げられます。「主に逆らう悪人は災いだ。彼らはその手の業に応じて報いを受ける」(11：ウェストミンスター信仰告白33:2)。

人々が主なる神と敵対した結果、社会の混乱がもたらされました。そのため、主なる神が民を裁きます。教会の指導者である長老、そして国の為政者としての支配者たちも主に裁きを受けます(14-15)。

15節までは、イスラエルの男社会に対する裁きが語られてきましたが、女に罪がないのではありません。主の裁きは、女性にも及びます。16・17節で「シオンの娘たち」(16・17)という言葉で語られます。「高慢」さ。続く「首を伸ばして歩く」は、高慢で高ぶった様子を語っているのでしょう。「流し目を使い」、「気取って小股で歩き」、「足首の飾りを鳴らしている」とは、性的な誘惑に満ちた行動です。

女性が適度に着飾ることは許されるでしょうが、過度な、あるいは性的な誘惑をするような服装などは禁じられています。

「主はシオンの娘らの頭をかさぶたで覆い彼女らの額をあらわにされるであろう」(17)。

「かさぶた」は、皮膚病のことを表し、「額をあらわにされる」とは、はっきりとしませんが、「プライベートな部分を露わにする」意味が込められています。

そして、「その日には、主は飾られた美しさを奪われる」と語ります(18)。足首の飾り、額の飾りに始まり、ターバン、ストールなどの女性が着飾るもののすべてが主によって奪われます(18～24)。

そして、主の裁きが男性にも女性にも及ぶことが語られていきます(25・26)。主なる神は、男性・女性に関係なく、権威を持っている者もそうでない者も、キリスト者にも、まだ信仰をもっていない者にも、主はすべての者に対して、「終わりの日」について語りかけておられます。

すでにキリスト者とされた私たちは、改めて自らの姿を主の御前に顧み、罪を悔い改め、信仰を告白し、主の御言葉に聞き従うことが求められています。そして、主がイザヤをエルサレムとユダに遣わされたように、私たちキリスト者は、今の時代、世に遣わされています。

「その日」である終わりの日には、サタンとの最終的な戦いのため、１／３が滅ぼされます（黙示録8章参照）。こうした争いのとき、女性や子どもたちにも犠牲者が出ますが、兵士として戦いに出る男たちの方が遙かに犠牲者は多いのです。4:1は、こうした状況を語っています。3:18～において、女性が罪の懲らしめとして、醜い姿となることが語られていきますが、女性の多くは、なおも生き残ることが語られています。

イザヤ書を含む預言書には、終末を象徴する言葉が語られています。「終わりの日」のことを「その日」と繰り返します。そして４章において「残りの者」が出てきます。

「残りの者」は、預言書において語られていますが、聖書全体において、神による救い・恵みの契約で貫かれています。

エジプトの指導者となっていたヨセフに、ヤコブの他の息子たちの前で正体を明かす場面において、イスラエルが神の民として「残りの者」とされたことを語ります(創世記45:7)。

イザヤ10:20-23では滅びる者と残りの民、つまり救われる者があることを語ります（参照：ウェストミンスター信仰告白3:1)。この御言葉がローマ9:27で引用されます。主なる神は、アブラハムを祝福し、海辺の砂のように多くすることを約束されましたが、主に従い、主を信じて歩まなければ、神の救いに与ることはできません。そうした中にあって、主は真に霊的な神の民をお立てくださいます。彼らは一握りの人間なのかもしれません。しかし、この残りの者の内に入れられたキリスト者は、主による救いに与ることが許されます。

そのため、現在、教会に来る人が少なくなり、弱体化していますが、私たちは悲嘆する必要はありません。私たちにとって大切なことは、残りの民である真のキリスト者が教会に集い、一人ひとりが主の御言葉に固く聞き従うことです。そしてどのような試練にあってもそれを乗り越える信仰の養いに与ることです。

「生き残った者にとって、主の若枝は麗しさとなり、栄光となる」(2)。「主の若枝」とは、メシアとしてのイエス・キリストを指し示しており、生き残った民はキリストにより救いに入れられます。

さらに、「彼らはすべて、エルサレムで命を得る者として書き記されている」(3)と語られています。黙示録で、救われる民に、神の刻印が押されていることが語られますが、その数が144,000人です(黙示録7章)。ここでは「彼らはすべて」とあります。主が救いへと導いてくださる者は、皆が救われ、永遠の生命を得ることができるのです。ですから、信仰を告白し、洗礼を授かった者は、救いから漏れることはなく、神の恵みの契約の中に入れられ、安らぎをもって信仰生活を送ることが許されるのです。

3:16以降「シオンの娘ら」について言及されてきました。彼女たちも罪の故に神の裁きに遭いますが、神の国が完成することにより、汚れが洗い清められます(4)。罪を犯したため主により懲らしめられ、もう救われないということはありません。むしろ私たちも皆、罪を犯し、主の裁き・懲らしめを受けなければならない存在です。それでもなお、主は、キリストの十字架の御業をもって、私たちの罪を赦し、そして救い、清めてくださいます。

そして５・６節では、出エジプトの荒野における主の御業を彷彿させる言葉が語られます（参照：出エジプト13:21-22)。

主は、私たちキリスト者が生き残り、天国に入るまで、導いてくださいます。ここでは天蓋であり、仮庵となっていますが、旧約の幕屋・神殿であって、新約に生きる私たちの教会です。地上の教会は、天国における教会を目指す途上にある教会です。しかし教会のおいて御言葉が語られ、信仰が養われ、祈りをもって主と共に歩むとき、私たちは様々な試練や艱難を乗り越えることが許されます。「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」（Ⅰコリント10:13)。

そして主による救いに与るキリスト者は、天国における栄光に満ちた教会へと凱旋することが許されています。主は私たちキリスト者を、残りの者としてお覚えくださり、天国に凱旋させてくださいます。感謝と喜びをもって、主に従っていきたいものです。

預言者の働きは、イスラエルの民に、悔い改めを迫り、主への信仰に立ち戻ることを語ることです。しかし、イザヤ書５章では主による裁きしか、語られていません。

さて４章では、「その日」である「終わりの日」に与えられる神の民の救いが語られていました。主なる神は、イスラエルの民が罪を悔い改めて、主による救いに与ることを願っていました。

そうしたことを、５章では、ぶどう畑でぶどうを育てる主人に例えて語り始めます。主なる神は、ぶどう畑を丁寧に整備し、多くの立派なぶどうがなるように準備します(2)。アブラハムに始まり、イスラエルを神の恵みへと導き、出エジプトの結果、約束の地カナンに素晴らしい土地をお与えくださいました。

しかし現実には、「実ったのは酸っぱいぶどうでありました」(2)。主が求めておられたのは「良いぶどう」であり、自らの罪を悔い改めて主に従い、主の恵みに生きることでした。しかし彼らは、主なる神を忘れ、偶像を崇拝し、放縦な生活を送っています。主は、イザヤが預言者として遣わされる今のイスラエルの姿を示されます。その結果、主は「わたしはこれを見捨てる」と、主は裁きを宣告されます(6)。

そしてこのように語ります。

「主は裁きを待っておられたのに
見よ、流血。
正義を待っておられたのに
見よ、叫喚(きょうかん)」(7)。

「裁き」と訳され、この部分が理解できなくなっていますが、他の聖書では「公正」と訳されています。「裁き」と訳したのは、正しい裁きをもって、神の民が救われることを主が願っていたことを語ろうとされています。公正・正義とはかけ離れた流血や叫びのある殺し合いが行われていたのです。

続けて、「災いだ」と６回繰り返され、イスラエルの罪が指摘されます(8-24)。

①「お前たちは余地を残さぬまでに
この土地を独り占めにしている」(8)。
第八戒「盗んではならない」の違反であり、ウ大教理問142では「不正な土地囲い込みと住民追い立て」の罪であると指摘しています。その結果、主の裁きとして収穫がまったくとれなくなります。
10ツェメド（25,000㎡≒160m×155m）のぶどう畑に、１バト(23ℓ)しかぶどうが採れません。1ホメル(230ℓ)の種から、1エフェ（23ℓ）しかぶどうが採れません。

②彼らは酒に溺れ、主の御業、主の栄光を顧みることがありません(11-17)。
「それゆえ、陰府は喉を広げ
その口をどこまでも開く」(14)。
と語られ、主なる神の高さが語られる一方(16)、イスラエルの落とされる罪の深さを語られています。

③④３番目(18-19)と４番目(20)は対をなします。罪・咎に生き、主なる神がそれを正当化することを求めます。

⑤自らを知者・賢者とうぬぼれ、自分の立ち位置を見失った状態を語ります(21)。

⑥賄賂を取って悪人を弁護する、明かな第九戒「偽証してはならない」違反です(22)。

こうしたイスラエルの現状に対して、主は裁きを行い、焼き尽くすと語ります。これらの裁きは、主の教えを拒み、侮った結果です(24)。

主なる神の裁きは、完全に行われます。第一に主が御支配になる自然（地震(25)・災害(30)）をもって裁きを行われます。

また、主なる神は異邦人を用いて、イスラエルを裁きます(26-29)。具体的には、北イスラエルを裁くアッシリアであり、南ユダを裁くバビロンであり、さらに捕囚から解放するために立てられるペルシャ（キュロス）のことを語っています。

北イスラエル、南ユダが滅びるのは、異国の軍隊をもって滅ぼされるのですが、それらは主なる神が摂理をもって働き、異邦人を用いて、イスラエルの民を裁かれます。

イザヤ書では、１～４章において「終わりの日」に行われる主の裁きと救いの完成を語りつつ、この５章において、現状においてはイスラエルは完全に主の裁きに遭う存在であることを語ります。特に４章において、主による救いの祝福が示されつつも、現状においてはイスラエルの民は主に背反している状況です。

それを受けて、主はイスラエルの民に預言者イザヤを遣わし、イザヤを通して主の御言葉に耳を傾けるように語りかけようとされています。

【祈祷会奨励】「心を頑なにするために語れ！」イザヤ書６章 ウ信仰告白5:6 (11/22)

エレミヤ書・エゼキエル書などの預言書では書簡の冒頭に、預言者の召しが語られます。しかしイザヤ書では６章で、イザヤの召命について語ります。このことは、イザヤが他の預言者とは異なった召命を受けたことと関係しています。

イザヤ書は、１～５章でイスラエルの民に、罪を指摘し、悔い改めて信仰を告白することを求めていますが、しかしイスラエルの民は、主に背き続け、その結果として滅びを避けることができません(5章)。

そうした状況の中、イザヤは主からの召しを受けます。ユダの王ウジヤが死去し、ヨタムが王になるBC742年です(1)。720年に北イスラエルがアッシリアに滅ぼされ、585年に南ユダがバビロンに滅ぼされ、捕囚の民とされます。北イスラエルが滅びる20年以上前に、イザヤは最初の召命を受けたこととなります。

イザヤの召しは、イザヤが天の御座を見ることから始まります(1)。これがどのような状態でイザヤが天の御座を見ることができたのか、ここでははっきりしません。御座にはセラフィムがいます。セラフィムとは、天使のような存在で、神の臨在を守護するものと考えられます。そして天では主を誉め称える讃美がなされています(3)。

栄光に満ちた主に出会ったイザヤは、戸惑い、滅びを覚悟します(5)。そして主の御前に自らの罪が示され、悔い改めに導かれます。主は、このイザヤの言葉を罪の悔い改めと信仰の告白として受け入れてくださいます。そしてセラフィムにより、罪の赦しが宣言されます(7)。「セラフィム」とは、「燃える」という意味の言葉であり、主からイザヤの罪の赦しと召命を行う働きが、主から与えられたことを示しています。

主からの招きがあったとき、イザヤは「わたしを遣わしてください」と答えます(8)。

主による信仰の呼びかけ・召命が行われたとき、その人は、自らの罪を悔い改め、信仰を告白し、主への奉仕を行う者へと、押し出されます。つまり私たちは、奴隷のごとく神を信じ・奉仕を行うことが命令され、それに嫌々聞き従うのではありません。

100％主なる神の御業ですが、同時に100％私たち自身が自らの意思で行動します。神の御計画・摂理は、私たちの側では神からの働きを感じつつも、同時に操り人形や奴隷のように、強いられて行うことではなく、主から与えられた恵みとして受け入れ、信仰を告白し、奉仕を行うのです。

しかしイザヤは、他の預言者とは違いがありました。通常の預言者は、イスラエルに罪を指摘し、悔い改めを迫り、信仰を告白して、主に従うように語ります。現在の牧師・説教者も同様です。しかしイザヤはかたくななイスラエルに対して、耳を鈍くし、目を暗くするように語るのです(9-10)。

牧師でも同じですが、悔い改め信仰を告白する者が、一人でも二人でも出るからこそ、その働きを継続することができます。しかしそれがないのは、非常に苦しいです。

しかし主なる神は、罪の故に滅び行くすべての者を救われるのではありません。結果として、その中に入らない人もいます。彼らは、自らの罪の故、罪の刑罰として、死に滅ぼされていきます。

そのことを、ウェストミンスター信仰告白5:6においても語っていますが、彼らは、自らが滅んでいくことに対して、知らずに滅んでいくのではなく、主なる神から罪の悔い改めと信仰を求められながらも、それを拒否し、滅んでいくのです。

イザヤは、そうした働きに導かれたのです。現在、教会に来る人は少ない、減少傾向です。それでもなお、私たちは福音を語り続けることが求められています。

主は、北イスラエルをアッシリアの手に渡し、南ユダをバビロンの手に渡されます。イザヤは南ユダが滅ぼされる直前まで、50年以上にわたって、預言し続けることが求められます(11)。非常につらく、空しさも感じる働きです。しかし、主は裁きに対して慎重です。すべての者たちに悔い改めを迫り、その上で、裁きに臨まれます。

主の裁きは非常に厳しく、これがバビロン捕囚の現実です(13)。残りの民とされるイスラエルですが、ほとんどの人々が主による裁きにより、焼き尽くされます。

罪の故にイスラエルの民は焼き尽くされますが、残される民が起こされます。このれがダビデの子の系図であり、イエス・キリストが約束されています(参照：7:14)。そしてキリストの十字架の贖いにより、神の民の救いが約束されています。

南ユダ王国アハズの治世（BC735-715）に、アラムの王レツィン、北イスラエルの王でありレマルヤの子ペカが、ユダを攻撃しようとしています（BC733、アラム－エフライム戦争：参照・列王下16:1-5)。戦争が始まるにあたり、アラムとエフライム（＝北イスラエル）が同盟したという知らせが、アハズに伝えられ、アハズは動揺します(2)。

イザヤは息子を連れてアハズの所に行くように主に命じられます。息子の名は、シェル・ヤシュブ「残りの者が帰って来る」と言う意味です(3)。聖書において名前は大切であり、イザヤが息子の名に、主のメッセージが込められています。

またイザヤがアハズと会うのは、「布さらしの野に至る大通りに沿う、上貯水池からの水路の外れ」です(3)。「布さらしの野」とは、現在のユダの置かれた状況です。貯水池からの水路があり、命の水が絶え間なく流れています。まさに主なる神からの恵みが与えられることを物語っています。

アラム王とイスラエルの王の力が大きくても、彼らの野望は実現しないと、主はアハズに語り(4-7)、目の前にある恐怖を恐れるのではなく、主の約束を信じるように語ります。そして「エフライム（北イスラエル王国）は消滅」します。実際、BC720年に北イスラエルはアッシリアに滅ぼされます。

そして主のしるしである御言葉に聞くように語ります(11)。主は陰府に落とすことも、天に上げることもできるお方です(11)。

しかしアハズは「わたしは求めない。主を試すようなことはしない」と答えます(12)。一見すると正しいようですが、アハズは、自分を主人とし、主を試しています（13、参照：ウェストミンスター大教理113)。主が「しるしを求めよ」(11)と語られているのは、「主を信じ、信頼せよ」ということです。

そして語られるのがインマヌエル預言です(14)。主はメシアを約束してくださいます。主イエスが誕生されたときに、この預言が成就しました（マタイ1:23)。

この預言が直接的に何を預言していたのか、いろんな解釈があります。その一つにアハズにヒゼキヤが与えられる預言であると言われています。ヒゼキヤはアハズの次の王となり、主に従う素晴らしい王とされています。「おとめ」と訳されている言葉も「若い女性」と訳されている言葉であり、「男の子を産む」も完了形であることからこのように読み取ることができます。

しかしイザヤは、この後アッシリアによりアラムも北イスラエルも滅びることを語ります(16-17　BC720年に実現)。

そして18節以降、「その日」を４度繰り返します。「その日」とは、終末的にはキリストの再臨と最後の審判の時ですが、ここでは、北イスラエルがアッシリアに滅ぼされることを語っています。この裁きはアッシリアによって行われますが、主の御業であり､イスラエルに対する懲らしめです。

インマヌエル預言は、イザヤの息子「シェアル・ヤシュブ（残りの者は帰ってくる)」と共に語られました。災いが過ぎ去り、残りの者に幸いが訪れ、バビロン捕囚からの解放を語っていると理解することができます。そしてその先に御子の御降誕を指し示していると、新約に生きる私たちは理解することができます。

ここでの問題はアハズ王の不信仰です。主の御言葉に聞くことなく、自らの判断で生きようとするとき、主は、主ご自身の御力を示され、裁きを下されます。しかし同時に、「二人の王の領土は必ず捨てられ」(16)、アハズが恐れていたアラムとエフライムは共に滅ぼされます。人間の目に絶対的な力であり誰もが服従するしかない権力者でも、主の御力の前に逆らうことはできず、主に勝利することはできません。

そして主は、メシアをお与えくださいます。そしてこのお方こそ、「インマヌエル」（神は我々と共におられる）です。

今、世界では、ウクライナやパレスチナにおいて戦闘が続いています。独裁者が世界を支配しているように見えます。そのため、国は軍事力を増強しようとします。

しかし、全世界を創造され、私たちに罪の赦しと永遠の生命を与える力を持っておられるお方が、私たちの主なる神です。私たちは主を全面的に信頼し、主に助けを求めなければなりません。主の御力が、為政者たちに対しても働いてくださいます。

周囲を見渡して､力に屈するのではなく、御言葉によって語りかけてくださる主を信じ、問題の解決を主に委ねて祈り続けることが求められています。

主なる神はイザヤに、大きな羊皮紙を取り、その上に分かりやすい書き方で預言を記すように命じます(1)。このときイザヤは信頼しうる証人を立てることからしても、これは重要な命令でした(2)。

その命令は「マヘル・シャラル・ハシュ・バズ（分捕りは早く、略奪は速やかに来る）」です。イスラエルに対する罪の裁きが即座に来るために悔い改めよとのメッセージです。

そしてイザヤは、女預言者に近づき、彼女は身ごもります。このとき主はイザヤに「この子にマヘル・シャラル・ハシュ・バズという名を付けなさい」と命じます(3)。まさに１・２年の内に北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされるとの宣告です。

主による裁きの理由は、「この民はゆるやかに流れるシロアの水を拒んだ」からです(6)。シロアとはエルサレムに流れる用水路です。主が生ける水である福音をイスラエルの民に語りかけたのに、彼らはそれを拒んだからです。「レツィンとレマルヤの子のゆえに」(6)とは、アラムの王とイスラエルの王のことです(7:1)。

その結果イスラエルは、アッシリアという激流に流されていきます(7)。そして、この主の裁きは、アラムや北イスラエルだけではなく、南ユダにも及びます(8)。

主なる神は、主の御声に聞くことなく、力に対抗して、国々が同盟・連合をしたとしても、おののけと語ります(9-10)。

そして、人間的な決定を行ったとしても、実現することはなく、勝利を得ることはないことを、主は断言されます。

つまり７章において、主はイザヤに対して、息子シャアル・ヤシュブ（「残りの者は帰ってくる」の意味）と共にユダの王アハズに語ったように、主は我らと共におられる（インマヌエル）からこそ主の御声に聞き従うようにと、南ユダの人々に語るように、主は命じられます(11-15)。

命令は２つです。第一に、人間的な策略により同盟を結んではならないこと(12)。つまり、力を恐れ、自分たちも力で対抗することをしてはならないことです。第二に、

「万軍の主をのみ、聖なる方とせよ。
あなたたちが畏るべき方は主。
御前におののくべき方は主」。

つまり主なる神は、人間の持つ力を恐れるのではなく、主なる神の存在、主の御力を畏れ敬うことです(13)。

イスラエルの民は、聖所（神殿）があり、神殿で礼拝を献げているから大丈夫だとの思いがあります。しかし彼らにとってそれが「つまずきの石」・「妨げの岩」です(14)。神殿で礼拝するという形が大切なのではなく、主なる神をどのような方として礼拝を献げているのか理解することが大切です。そして主が語られる御言葉に聞き従うことが求められます。ですから、聖所がある・神殿があるからと言って、安心していることこそが、つまずきの石であると語ります。そして、ユダもまた滅ぼされ、バビロンに捕囚の民として連れて行かれます(15)。

主なる神はイスラエルに、「証しの書を守り、教えを封じておこう」(16)・「主がわたしにゆだねられた子らは、シオンの山に住まわれる万軍の主が与えられたイスラエルのしるしと奇跡である」と語ります(18)。しかし彼らは「教えと証しの書についてはなおのこと、「このような言葉にまじないの力はない」と言うであろう」(21)と語ります。これこそが彼らが裁かれる理由です。

滅び行く人々には封じられた教えと証しは、人間的な力に臆することなく、主なる神の御力を信じ、主の御言葉に聞き従う者に与えられる祝福です(8:23b-9:6)。闇の中に与えられる大いなる光であり(9:1)。深い喜びと大きな楽しみが与えられます(2)。これこそがダビデの子として与えられる約束のメシア、イエス・キリストです(5)。この主の預言は、目の前の現実・人間的な力に頼っていれば、信じることができません。

イスラエルの民に「マヘル・シャラル・ハシュ・バズ」（分捕りは早く、略奪は速やかに来る）と分かりやすく書き記されたものが提示されたように、新約に生きる私たちには、「信じる者は救われる」（使徒16:31）と語られ、恵みの契約が与えられています。

実際に戦争が行われ、武器も持たずにいることは、非常に恐ろしいことです。しかし、主なる神は生きて働いておられ、主を信じる者に、罪の赦しと永遠の生命をお与えくださいます。主イエスは、「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、……」と語ります（マタイ10:28）。

イザヤは、主の御言葉に聴こうとしない者に対する主の裁きが行われることを語ってきています。

エフライム（北イスラエル）、サマリア（北イスラエルの首都）の民は、主の御言葉があることを確認しますが、ないがしろにして、心は驕っています(8)。つまり主の御声に聞き従うことなく、自分たちの力で、物事を解決しています。

主の裁きに耐えられるように、自分たちで家を、そして街を作れば良い、と考えています(9)。主の御声に聞き従わない民に対して、主なる神が、レツィン（アラム王、参照:7:1）を興し、イスラエルの民を裁かれます(10)。民は主に立ち帰ることはなく(12)、一日の内に断たれます(13)。

長老、尊敬される者、さらには主に仕え、主の御言葉を教える者、預言者が、こぞって主に逆らい、人々を惑わす者となります(14-15)。旧約のイスラエルの民同様、新約の教会においても、教会内、特に牧師や長老等の教会役員において腐敗が起こると、教会全体、さらには民全体が腐敗します。宗教改革前夜や第二次世界大戦中の日本の教会が、これに似たものでした。現在、こうした状況になっていないか、私たちは自らの信仰を顧みなければなりません。

そうなれば、本来主による施しを受け、救いに入れられる「みなしごややもめすら憐れまれることがなくなります」(16)。そして主の徹底的な裁きが行われていきます(17-20)。それは、同盟を組んでいたマナセとエフライムの間において戦いが起こり、それがユダにまで及ぶびます。

それらは、人間的な敵対関係において戦いが起こりますが、すべては主の裁きの結果です。主の摂理の御業は、私たちには計り知ることができません（参照：ウェストミンスター信仰告白5:2)。

10章に入ると、不正は裁判官に及んでいることが語られます。偽証は、第九戒違反です。不正な裁判が行われることにより、本来救われるべき弱い者の訴えは退けられ、貧しい者の権利が奪われ、やもめ・みなしごが餌食・略奪に遭います(10:2)。

裁判官の下す判決は、その場限りのように思い、自らに優位に働くように、判決を下しているようであっても、その一つひとつの判決は、「刑罰の日」(3)、つまり最終的には最後の審判に直結していることを、忘れてはなりません。

不正を働くことによって、その場において自らの富を得ようとも、最後の審判においてこの罪が明らかにされ、裁きが下されます。言い逃れすることはできません。

北イスラエルは、主が遣わすアッシリアによって滅ぼされます。しかし主なる神は、そのアッシリアもまた、主の裁きがもたらされることを宣告します(5-7)。主はアッシリアに略奪を求めたのに、アッシリアは北イスラエルを滅ぼし尽くすこと、断ち尽くすことを行ったからです。そして、アッシリアは、イスラエルを偶像の国にしようとします(8-11)。これは明らかに主が求めておられることに反することです。

そのため、イスラエルに対する主の裁き・懲らしめが終わった後、主はアッシリアを罰することを宣告します(12)。主の裁きの生々しい状況が、16-18節で語られます。

「その日」(20)とは、アッシリアによって北イスラエルが滅ぼされた日です。南ユダは、アッシリアに攻撃されつつも、最終的には滅ぼされることなく、残りの者が残されます。「その日」主は、アッシリアに頼ることなく、主なる神、イスラエルの聖なる方、主に真実をもって頼る者に、救いをお与えくださいます(24-27)。

前回も語ったように、目の前にある人間の力による武力を恐れるのではなく、生きて働く主なる神を信じ、畏れることが求められます。そうすれば、地上において、様々な艱難があり、武力による戦争が行われたとしても、主は「あなたの重荷を取り去ってくださり、軛は砕かれます」(27)。

神の民イスラエルであっても、キリスト教会に属するキリスト者であっても、主への信仰から離れ、主の御言葉に聞かなければ、主の裁きがもたらされます。私たちに今改めて語られていることは、主がお語りになる御言葉に聞くことです。主の御前にひれ伏すことです。

そのために私たちは、自分の解釈で聖書を理解するのではなく、信仰の戦いをもって形成してきたウェストミンスター信条に従い聖書を解釈し、教会形成を行うことが求められています。

南北に分かれたイスラエルに対して、主は預言者イザヤを立て、罪を悔い改めよ、さもなくば滅ぼすとの預言が語られています。9～10章では、民衆が主の御言葉に聴かないばかりか、長老や尊敬される者・偽預言者、さらに裁判官も罪に満ちていると主は警告します。イスラエルの民は、口では神を信じると語り、形において神に礼拝を献げていますが、実態は偶像を崇拝しており、主の裁きを逃れることができません。

そうしてメシアである神の御子イエス・キリストが約束されました(9:5)。この約束のメシアがどのような状況において誕生するのか、今日の御言葉で語られています。

「エッサイの株」(11:1)と語ります。エッサイはダビデの父です(サム上16:1、マタイ1:6)。エッサイという名には、「軽蔑・貧しさ」があります。

つまり、軽蔑されていたエッサイの家は、木が切り倒された状態になり、もう後はない状態に思われていました。まさにイザヤが預言している当時、北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされ、南ユダも同じように主の裁きがもたらされていました。

イスラエルは主の裁きとして、アッシリアに戦争により滅ぼされます。これが「切株」と語られる理由です。

北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされるとき、南ユダにはわずかな者が残され、国が滅びることはなく守られました。しかしこの後、南ユダもバビロンにより滅ぼされます。国としては完全に滅ぼされ、壊滅状態です。しかし、一部の民は捕囚の民とされ、生き延び、そして信仰を守ります。そして70年後に、エルサレムに帰還することが許され、エルサレム神殿を再建します。これこそが、「ひとつの芽が萌えいで」ることです。そして、捕囚の民とされた者の中から、ダビデの子として神の御子イエス・キリストが与えられます。

キリストは、常に「主の霊がとどまって」います(2)。そのために、周囲の状況、つまり偶像礼拝・腐敗・力による支配に左右されることはありません。そして主なる神は、イスラエルの民に、目の前にある現実・恐れに左右されることなく、生きて働く主なる神を畏れ、主の御言葉に聞き従うように語ってきました。正義をもって人々を裁き、不正な裁判官にもなりません(3)。

このように神の義が貫かれることにより力の支配により虐げを受け、何もできず、死の恐怖に脅える者に、裁判で勝利が告げられ、主の助けが与えられます。そして、力による支配、不正、腐敗、生活の乱れは、取り除かれていきます。

2700年前に預言された言葉は、2000年前にイエス・キリストがお生まれになることにより成就します。そしてイエスは、インマヌエル。「神は我々と共におられる」と語られました(マタイ1:23、イザヤ7:14)。

キリストは十字架の死と復活を遂げ、天に昇って行かれました。天にあるキリストは、今なお私たちと共にいてくださいます。主イエスにより、不正が取り除けられ、虐げられている人たちに希望が与えられます。

今なお、力ある者たちが世を支配し、不正がはびこり、弱い人たち・貧しい人たちが虐げを受けています。しかし、インマヌエルであるキリストを信じるとき、主の霊に満たされ、神の国において、弱い者・貧しい者たちが受け入れられる祝福に希望を見いだすことができます。同時に正義であるキリストが、罪人である私の罪を赦してくださったように、隣人の罪を赦し、互いに和解することが求められています。

私たちは、身近な人々と交わり・意思疎通を行い、和解と平和を実践しなければ、地域社会・国家間へと広がりを見せることなどあり得ません。

そして、キリストにおいて真に平和が実現するとき、世界の間で行われている争い・戦争はなくなります(6-9)。

今、世界の各地で独裁者による支配と共に自由が奪われ虐げ・迫害を受けている民がいます。そして問題は解決しないのだろう、と諦めの気持ちが湧いてきます。

しかし、力と権威を持っておられる主なる神が私たちと共におられます。その御力は為政者にも及びます。主の御力が為政者に示され、虐殺・虐げを終わらせ、悔い改めと和解・平和を実現するように、主の御業に委ねることが求められています。

私たちキリスト者は、キリストの再臨と神の国の完成の時を目指し、エッサイの根であるキリストを旗印とし、主による栄光に満たされる希望を持って歩み続けます。

11章の前半にはメシア預言が語られていますが、特に「エッサイの株」・「エッサイの根」に注目しました(1,10)。すべて滅ぼし尽くされた所に、メシアであるイエス・キリストを約束されています。

イスラエルの罪の故に主の裁きとして、北イスラエルはアッシリアに、南ユダはバビロンに滅ぼされます。これが神の民とされたイスラエルの現実ですが、私たちの現実でもあることを忘れてはなりません。

私たちは、生まれながらにして、信仰を告白し、罪赦された現在においても、私たちは罪人であり、罪による死を避けて通ることができません。「全的堕落」です。

また聖書では、罪の結果として、主による懲らしめとして滅ぼされることと、散らされることが語られます。最初は、人々がバベルの塔を作ったときです(創世記11:7-8)。

イザヤの時代、北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされ、南ユダがバビロンによって滅ぼされていきます。ごく一部の人々は、捕囚の民としてバビロンに連れて行かれますが、ある者はカナンの地に残されます。そしてある者たちは、周辺諸国へと逃れていきます。彼らが離散したユダヤ人（ディアスポラ）と呼ばれるようになります。

さらに新約の時代においては、主イエスの十字架の御業が成し遂げられ、主イエスは天に昇って行かれますが、弟子たちは宣教を開始します。しかし同時に、激しい迫害に遭い、宣教の中心をアンティオケアに移さなければならなくなります。そしてさらにAD70年のエルサレム戦争によりローマにより敗北したことで、イスラエルの人々は、世界中に散らされることとなりました。

第二次大戦後にイスラエルという国が作られ、帰還が始まりましたが、今なお、世界中に、ディアスポラがいる現状です。

「その日が来れば、主は再び御手を下して 御自分の民の残りの者を買い戻される」(11)と語られているのは、まさにアッシリアによって北イスラエルが滅ぼされたとき、さらに南ユダがバビロンによって滅ぼされたときに散らされていったイスラエルの残りの者が帰還することを指し示しています。

ですから、「その日」は、直接的にはバビロン捕囚からの解放のとき、エルサレム神殿が再建され、散らされた民が帰還することです。しかし現実には、バビロン捕囚からペルシャにより解放されたとき、帰還したイスラエルの民は、一部でした。そしてサマリア化した人々は、原住民と混ざり、異邦人となりました。

ですから12節～15節で語られているようにイスラエルの民が、周辺諸国に勝利を遂げて、エルサレムに凱旋するのは、イエス・キリストの十字架における勝利、さらには終末を待たなければなりません。

主イエス・キリストの十字架の御業・死と復活・昇天の後、ペンテコステにおいてディアスポラの人々がエルサレムに集められ、目が開かれました（使徒2:1-13)。これはバベルの塔における混乱が、終末において回復することを指し示すものであり、それが最後の審判において完成します。

そして、キリストの再臨と共に成し遂げられる最後の審判において、神の民は、エルサレムに凱旋します。

現在のイスラエルという国において行われていること、そしてアメリカを初めとする国々がそれを支持しているのは、この預言が、終末において完成し、神の国が到来すると信じているからです。彼らのことをシオニズムと語ります。誤った聖書解釈であり、福音とは似て非なるものです。私たちは、彼らに与（くみ）することはありません。主が救いに導いてくださるのは、人間的な力でイスラエルに勝利をもたらすことではなく、主の御力により道が開け、凱旋することだからです（参照：11月26日週報コラム「イスラエルとパレスチナ」)。

このことは、ローマ11:25～32の解釈にかかっていると言って良いかと思います。肉のイスラエルの中にも悔い改めて主を信じる者が出てくるかと思いますが、私たちに求められているのは力ではなく信仰です。

主は、エジプトにいたイスラエルの民を救い出してくださいました。40年の荒野の歩みの中、不平を語り、偶像を拝んだ者もいました。しかし、モーセをとおして語られる主の御言葉を受け入れ、信じた者に、約束の地における祝福をお与えくださいました。主が、広い道を備えてくださり、そこを通って都エルサレムである神の国に帰還することができるのは、主なる神を信じ、主の御言葉に聞き従う者です(16)。

イザヤは主から召され(6章)、イスラエル・ユダの罪を指摘し、罪の裁きとして国が滅ぼされていくことを預言してきました。

そうした中、主なる神は、罪を悔い改め、主へ信仰を告白する者に、罪を赦し、神の国の生命を約束してくださいます。それは、「エッサイの株から一つの芽が萌え出で、その根から若枝が育つ」(11:1)と語るように、何もなかったところから、主はメシア、キリストを立て、救いをお与えくださるとの約束です。救いは徹底的に神からの恵みであり、人間の功績はまったくありません。

そして「その日」、直接的には主はバビロン捕囚からイスラエルの人々を解放してくださいます。そして最終的には、メシアであるイエス・キリストの再臨により、サタンが滅び、神の国が完成してくださいます。そして神の民である霊的なイスラエル、つまりキリスト者は、神の御国である天国へと凱旋することとなります。

今日の御言葉は、このように６章から語られてきたことの最後にあたります。主によって一方的に罪の赦しと救いが与えられたキリスト者は、ただただ感謝と救いの喜びをもって主への讃美を行います。

そして12章は、1～2節と3～6節に分かれています。つまり1～2節は「あなた」・「わたし」であり、3～6節では「あなたがた」となっています。神と私の一対一の関係が、信仰共同体へと広がりを見せます。

預言者をとおして、主なる神の御前に立ち、罪を悔い改め、信仰を告白することが求められました。最初に、「わたしが」、つまり、預言者から預言を聞いた一人ひとり、私たち一人ひとりが、主の御前に立ち、信仰を告白することが求められます(1-2)。

主はイスラエルに対して、罪の悔い改めと信仰の告白を迫りました。このとき一人ひとりが自らを省みることが求められます。罪の悔い改めのない信仰は形骸化します。

つまり最初に縦の関係、主なる神とイスラエルの民、主なる神とキリスト者たる私たちの一人が、一対一で相対して、罪の赦しと救いを確認しなければなりません。

そして主なる神と出会った者は、救いが示され、主への感謝と喜びをもって、主を礼拝し讃美するものとされます。

しかし、主への感謝と喜びをもって主を礼拝するとき、私たちは一人ではありません。主は「あなたたち」と語り、主がお集めくださった神の民が一つとなり、主を礼拝することを求めておられます。救いの喜びに与るのは、信仰共同体としての教会です。つまり主との間で信仰が与えられ、縦の関係が形成された者は、信仰共同体としての兄弟姉妹との交わりに入れられ、共に主を礼拝する者とされます。ここに横のつながりが形成されることとなります。

ですから、「自分一人で聖書を読み、神を信じた、聖書に従って生きていく」と語る人がいたとしても、それは主が求めておられる信仰の姿ではありません。なぜならば私たちは、主の御前に罪人だからです。そのため、主により信仰を持ったとしても、地上の歩みを一人で信仰生活を行っていると、次第に自分よがりの信仰となり、自己中心・いい加減な信仰となるからです。

一方、信仰共同体を形成することにより、主が聖書を通してお語りになる義・聖・真実の規準を確認することができ、それを私たちは、信仰告白・教理問答（カテキズム）として告白します。信仰の一致をもって教会を形成することとなります。

私たちは、信仰告白・教理問答を告白することにより、より純粋な教会を形成し、信仰が独りよがりになってきている信仰者の信仰を修正するのです。

私たちが、自らの罪を悔い改め、主を信じ、主の御言葉に聞き従おうとするとき、同時に、未だに主の御言葉に聴こうとしない人たちとの違いが露わになります。そのため、主の威厳・主の御力を世界に証しすることが求められ(5)、同時に信仰の戦いを強いられます（参照：エフェソ6:10～18)。

別の言い方をすれば、主なる神を信じ、主の御言葉に聞き従うと語りつつ、周囲の人々と同じ生活をすることはできません。

しかし私たちは一人では弱く、周囲の人たちに流されます。そのため、信仰共同体である教会に属し、主を証しする者同士が、共に歩むことが大切となります。

戦争・地震・社会の閉塞感と、息が詰まる世の中ですが、私たちキリスト者は、希望を持って生き、神の御国を証しして行くことが求められています。

1～12章では、ユダとイスラエルに対する主の裁きと､最後に回復を預言しました。それに続き13～23章では、諸外国に対する預言・そして審判が語られます。

バビロン、アッシリア、エジプトという強大な国々と共に、ペリシテ、モアブ等の周辺の小国についても語られていきます。当時、知られていた国々がすべて語られていると言って良いかと思います。つまり旧約聖書は、ユダ・イスラエルが中心に語られていますが、主なる神の支配は、全世界に及んでいます。

そして主なる神は、神の民としたイスラエルとユダの人々に罪の悔い改めと主への信仰を求めるように迫りますが、それはイスラエルとユダに限ったことではなく、全世界の人々に向けて語られています。

主は天地万物を創造されましたが、バベルの塔の建設をもって、人々は分けられ、散らされていきました(創世記11:1-9)。この後、主はアブラハムを選び、イスラエルを神の民としてくださいました。しかし、主がイスラエルを選ばれたのは、イスラエルが優れているからではありません。すべての者が全的に堕落した罪人であり、罪の刑罰としての滅びを逃れることができません。約束されたメシアが備えられるために、主はイスラエルを選ばれたのであり、イザヤの時代にあっても、イスラエルを守られているのは、メシア預言のためです。

ですから13章から、諸国に対して、罪を指摘し、主の裁きが語られていきますが、それは同時に、彼らに対しても、罪の悔い改めと主への信仰が告白されるならば、彼らもまた主による救いが約束されていることを忘れてはなりません。

最初に取り上げるのがバビロンです。バベルの塔の街バビロンを最初に挙げるのは、私は創世記との関わりがあるかと思います。

「わたしの怒り」(3)つまり、主なる神は、バビロンを招き入れて、主に逆らい続けるイスラエルに対する裁きを行わせることを預言します。つまり、バビロンが南ユダ王国を滅ぼしますが、罪の裁きとして、主なる神の命令によって行われます。

全世界の主権は主なる神にあります(4,5)。そのため一時的に強国を作り、世界を支配したとしても、主に逆らう支配は、主による裁きを逃れることができません。

そして「主の日」(6,9)に、主による裁きが行われます。

主によって用いられ、神の民南ユダ王国を滅ぼすように立てられたバビロンですが、バビロン自身が行ってきた罪の故に、主の裁きがもたらされます(6～11)。

「オフェル」(12)は、良質な金を輸出していた町であり、値踏みもできないほどの高価な宝物のことであり、それを得る以上に、人がまれなもの、つまりすべての民が主による裁きに遭うことを語ります。

「見よ、彼らに対して
　わたしはメディア人を奮い立たせる」(17)。

バビロンによって捕囚の民とされたイスラエルの民は、ペルシャによって解放されますが、聖書においては、メディア人によりバビロンが滅ぼされることを語っています（イザヤ13:17、21:2、エレミヤ25:25、51:11.28)。

カルデア人とは、バビロンを作った国の人々です(19)。ですからカルデア人にとってバビロンは誇りでしたが、滅びの象徴であるソドムとゴモラのように、主による裁きにより、徹底的に滅ぼされ壊滅状態に落ちることを語ります(19)。そしてバビロンは廃墟の町と化します(20-22)。

そして最後、

「今や、都に終わりの時が迫る。
　その日が遅れることは決してない」(22b)。

バベルの塔を生み出したバビロンは、主による裁きを逃れることができません。その日は必ず到来します。今、栄華を極めている国々も、主なる神を信じることなく、力により人々を支配している者たちは、主による裁きを逃れることができません。

バビロンの滅びとイスラエルの回復に関しては、改めて14章において学ぶこととなりますが、大バビロンが倒れるとき（黙示録14:8、18:2)、バベルの塔における罪の刑罰が解消され、神の国における平和が到来します。そのためこの13章において、諸国の最初にバビロンが語られているのは、バビロンという国に限定することなく､罪の支配、サタンの支配をも包括していることであり、救済史の全体、聖書の全体の理解をする上で、理解することができるのではないかと思います。

13章では、主なる神はイスラエルの民に対する裁きを徹底的に行われることを語りました。しかしこの主の裁きは、全的に堕落し、バベルの塔の建設によって分かれたすべての民に対する裁きでした。

その上で「その日」、キリストが再臨し最後の審判が行われる日は、遅れることはなく、霊的なイスラエルであるキリスト者は、神の恵みにより救われます。このことにより、バベルの塔によって分かたれるという呪いは解かれ、天国における主の祝福に満たされます。そしてここで語るバビロンとは、南ユダ王国を滅ぼすバビロンであり、それは同時にサタンを意味する大バビロンのことであると語りました。

「その日」、バビロンに捕囚の民となっていたイスラエルは、解放されイスラエルの家であるエルサレムに帰還します(1)。同時に大バビロンが滅び､神の国が完成し、すべての神の民が天国に凱旋します。

「彼らの土地」と語る都エルサレムですが、大バビロンが滅びたときに訪れる「彼らの土地・約束の土地」は、霊的なエルサレムであり、地上のエルサレムと解釈するシオニズムは、間違っています。

そして、「寄留の民は彼らに加わり、ヤコブの家に結びつ」きます(1)。イスラエルの外にいた異邦人も、信仰により霊的なイスラエルとして、神の救いに与ります。

そして、今まで力において支配していた者たち､すなわちバビロンであり､この後、アッシリア・ペリシテ・モアブと言った人々のことが語られていきます(2)。今まで弱小国であったイスラエルは、これらの国々に、力で支配されていましたが、神の御国が完成し、神の御力が示されるとき、諸国の民こそが捕囚の民としてつながれます。

そして「主は、あなたに負わせられた苦痛と悩みと厳しい労役から、あなたを解き放たれます」(3)。「苦痛と悩みと厳しい労役」は、罪の刑罰としての苦痛を伴う労働との繋がりがあり（創世記3:16～19)、根本的な罪の刑罰からの解放を語っています。

そして、大バビロンの滅亡が語られていきます(4-21)。

神の支配・神の御力は、いつの時代であっても､どの国・どの社会にも及んでおり、そこで行われる罪・虐げを見逃すことはありません。そしてこの時、「全世界は安らかに憩い　喜びの声を放」ちます(7)。

９節からは「陰府」という言葉が繰り返し語られます（9, 11, 15, 19節)。ヘブライ語(旧約)では「シェオル」、ギリシャ語(新約)では、「ハデス」です。すべての民が、自らの罪の刑罰として肉の死と共に陰府に行くことが避けられないのですが、この陰府に、キリストが私たちの代わりに行ってくださいました(使徒信条)。これは、新約における「地獄（ゲヘナ)」と同意語であると言えます。

私としては、「陰府」と「地獄」が両方、新約において用いられていることが、カトリックにおける煉獄思想に繋がったのではないかと思っています。

「ああ、お前は天から落ちた
　明けの明星、曙の子よ。
　お前は地に投げ落とされた
　もろもろの国を倒した者よ」。

「明けの明星」、「曙の子」(12)とは、世界を支配した時の権力者であり、その時代にあっては、光り輝いているのですが、自らの力をおごり高ぶっていたとしても、主の裁きを避けることはできず、陰府に落とされます(13-15)。

そして、「悪を行う者たちの末は　永遠に、その名を呼ばれることはない」と語られます(20)。「命の書に名が記されていない者」、つまり主なる神を信じない者は、すべて陰府に下り、誰一人主の裁きを逃れることができません（参照：黙示録20:11～15)。

「その名が命の書に記されていない者は、火の池に投げ込まれた」(黙示録20:15)。

そして22,23節においてイザヤは、「万軍の主は言われる」と語ります。13:4,13においても語られており、イザヤ書においてこれからも繰り返し語られています。すべてを支配し、御力を持っておられる主なる神が、罪に生きる者たち、そしてバビロンとしてのサタンを徹底的に裁き、断ち滅ぼされることを宣言しています。

だからこそ私たちは、万軍の主なる神の下に信仰を持ち、委ねて生きるとき、地上にあっては力のない弱い存在ですが、救いの希望に満ちて、神の御国へと凱旋することができるのです。

主なる神は万軍の主であり、罪に対する裁きが徹底的に行われ、滅びは陰府に落ちることです。13章以降、各国の裁きを語りますが、最初の13:1-14:23ではバビロンについて語られてきました。バビロンは南ユダ王国を滅ぼす大国ですが、北イスラエル王国を滅ぼすアッシリアよりも先にバビロンが語られたのは、バベル、つまりサタンの代表として語られているのであり、そのことが黙示録において「大バビロンが倒れた」(黙示録14:8) に繋がります。

そして、今日の所から各国について語られていきます。今日は、アッシリアとペリシテの２カ国を取り上げることとします。

主がイザヤに対して預言を語るように命じられた時期、強国アッシリアの力がイスラエルに襲いかかっています。主ご自身が、イスラエルの民を懲らしめるために、アッシリアの力を用いられます。しかし、主なる神の御支配の下にあって、罪を犯すすべての国が主による裁きに遭うのであり、アッシリアも例外ではありません。

イスラエルを支配しておられる万軍の主なる神は、全世界を支配しておられます。そして「万軍の主は誓って言われた」(24)。信仰の証しとして、神の民・キリスト者が主に誓いを立てることはあるかと思いますが、ここでは主がイスラエルに誓われます。主なる神が、イスラエルに誓われるのは、アッシリアが滅びるというイスラエルの民にとって信じがたいことが、主によって成し遂げられることの確かさを示すためです。

アッシリアは、主による裁きとして、滅ぼされます(25)。このことに先立ち、北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされます。しかしアッシリアが滅ぼされ、さらにバビロンが滅ぼされることにより、イスラエルは捕囚から解放され、エルサレムへの帰還が許されます(25cd)。

25 「その軛は、わが民から取り去られ
　　その重荷は、肩からはずされる」。

主なる神が万軍の主であり、主が語られたことが必ず実現するだけではなく、主なる神は、御計画されたことを約束され、そして実現してくださいます(24,26-27、参照：ウェストミンスター信仰告白3:1)。主の御計画が実現するからこそ、私たちは主なる神を信じ、主がお約束してくださる救いに希望に生きることができるのです。

主なる神は、世の中の成り行きに任せて、ご自身の業を行うのではありません。主なる神を信じ、霊的なイスラエルとするキリスト者を救うことをお約束してくださり、キリストの再臨により、最後の審判と神の民の救いを実現し、神の御国へとお招きくださいます。

続けてペリシテに関して語ります(28-32)。

「アハズ王の死んだ年のことである」(28)と語られています。BC715年のことです。北イスラエルが、アッシリアに滅ぼされたのが720年であり、その後のことです。この当時、北イスラエルが滅ぼされる中、南ユダも同じように滅ぼされるのではないかと思われている最中のことです。

ペリシテは当時の海運国として地中海文明と接触し繁栄していたエクロン、アシュドド、アシュケロン、ガザ、ガトなどの主要都市から成る国でした（巻末地図4、5)。今のパレスチナのガザ地区にあたります。

ペリシテの人たちは、南ユダの王アハズが死んだことを喜びます。なぜならば、アハズ王はアッシリヤの勢力に屈し従属しており、ペリシテはアハズ王の背後にいるアッシリアの力に脅えていたからです。ペリシテは、アハズ王の死去によりアッシリアの脅威からも解放されたと思ったのです。

南ユダ王国はヒゼキア王となり、主の守りの内にユダはアッシリアと平安を保ちますが、その一方でペリシテは、アッシリアの攻勢を受けることとなります(29)。そして、根絶やしにされます(30-31)。主なる神を信じることなく、人間的な力関係に生きるとき、主の裁きを避けることはできず、ここに希望はありません。

一方、南ユダは……。

主を信じることがなかったアハズ（列王下16:1-4）の後に王となったヒゼキヤは、主の目にかなう正しいことをことごとく行ったため（列王下18:1-4)、主は、ユダの民を救い、お守りくださいました。

ここではアッシリア、そしてペリシテがでてきますが、そこに、神の民イスラエル・ユダが常に中心にあります。主の愛に満たされ、イスラエルが主なる神を信じ、主に委ねて歩むとき、イスラエルは主の恵みと守りが与えられます。

預言は、主がこれから起こることを予め神の民に対して語られ、神の民は主の約束の実現に備えることですが、預言にはいくつかの種類があるかと思います。

第一に、預言者が語った時代、あるいは次の世代に実現することです。例えば、北イスラエルの滅び、南ユダの滅びとバビロン捕囚、さらに捕囚からの解放です。

第二に、救済史全体を網羅し、メシアであるキリストが来臨と救いの完成、最後の審判と神の国の完成です。これらは、預言を聞いたイスラエルの民は具体的なことを理解することができず、奥義に包まれていました。

第三に、直近の出来事だけれども、特定の出来事ではなく、主が語ろうとしておられる真意を理解することに着眼することです。イザヤ書15・16章はこれにあたり、具体的にモアブに起こったどのような出来事か、史実を特定することはできません。新約に生きる私たちは、主の警告に対してモアブのとった言動に対して、主がどのように答えておられるのかを、確認することが求められています。

15章では、モアブが滅びていく状況が語られます。アル、キル(1)、ディボン、ネボ(2)、ヘシュボン、エルアレ(4)、ツォアル、エグラト・シェリシヤ、ルヒト、ホロナイム(5)、ニムリム(6)といった地名が記されています。巻末の聖書地図にも記されていない都市がほとんどです。モアブの全域が攻められ、滅びに向かっている状況が描かれていると言って良いかと思います。

私たちが15章で着目すべきことは、モアブの嘆きです(2-4)。主による裁きに対して、苦しむ者・モアブの人々は、嘆き・叫び、助けを求めます。

このモアブの叫びは、シオン(16:1)、つまりユダの人々に届きます(2-4)。そしてこの叫びは、主にまで届きます。

主なる神は、この叫びを無視されるお方ではありません(4b-5)。主はダビデの幕屋に王座が据えられることを語り、ダビデの系図南ユダ王国の王が統治し、その支配に服するとき、モアブの人々に対する救い・平和が実現することを宣言してくださいます。その結果、モアブを虐げる者を散らし、滅ぼします。

主なる神は、主の統治に従う者、つまり主が支配しておられるユダにモアブが従うとき、主はモアブの救いを約束してくださいます。こうして主は、モアブの叫び・嘆きの声を聞き、応えてくださいました。

私たちは、モアブの嘆きに対する主の答えから、主の御力の支配に従う者を主を信じる信仰と認めてくださっていることを確認することができるのではないでしょうか。

つまり直接的に主なる神を認め、主なる神を信じることがなかったとしても、主の御力を認め、それに聞き従うことは、信仰を告白しているのと同じであると、主はお語りくださっているのだと思います。

しかし、続けて主の回答に対するモアブの態度が記されます。主なる神の支配の下にあるユダの民に対して、モアブは高ぶり、誇り、傲慢で驕っています(6)。

つまり、モアブの叫びをお聞きくださった主なる神により、一時的に平和を取り戻したモアブでしたが、モアブは主の御力に従うこと、つまりユダ王国にひれ伏すことができませんでした。あくまで自分たちの力を誇ろうとします。そのため、主の裁きがモアブにもたらされます。どれだけ泣き叫び助けを求めても、主は彼らの声を聞き、助けてくださることはありません(7)。

このとき主なる神は、「シブマのぶどうのために泣く」、「わたしは涙でお前を浸す」(9)と語られます。主なる神は、モアブが異邦人だから、彼らを滅ぼすのではありません。できるならば彼らが罪を悔い改め、主を受け入れてほしい、救われてほしいと願っておられます。それが叶わないことに対する主の涙です。

ルツ記の舞台はモアブであり、主はモアブの女ルツを憐れみ、イスラエルのボアズとの結婚が許され、そしてボアズとルツからダビデ王、そしてイエス・キリストが誕生します(ルツ4:18-22、マタイ1:5)。

主なる神は、イスラエル・異邦人の区別なく、主の御言葉にひれ伏し、罪を悔い改める者、主に従う者に救いをお与えくださいます。しかし主の警告の言葉に対しても、傲慢になり、聞き従わない者には、彼ら自身の罪の故に裁きを行われます。

私たちキリスト者も、主の御言葉に聴き、主への信仰に生きることが求められています。

預言者イザヤは、イスラエルとユダの周辺諸国の滅びについて語ってきていますが、17章ではダマスコ、そしてエフライムが取り上げられます。

ダマスコとは、アラムの首都です。またエフライムとは北イスラエルのことです。そしてダマスコとエフライムは、アッシリアの力に対して軍事同盟を結んでいました。軍事同盟を結ぶことにより、強国であるアッシリアに対抗することができ、国を維持し続けることができると考えていました。

しかし、ダマスコは異邦人・偶像の国であり、エフライムは、本来神がお選びになった神の民でした。イスラエルが主なる神への信仰を強くしていれば、火と油の関係であり、一緒になり軍事同盟を結ぶことなど考えられない関係です。

そうした両国の関係を、主なる神はどのように思っておられるのかを、今日の御言葉から確認することが求められています。

1～3節では、エフライムもダマスコも、滅ぼされる状況が語られています。

続く3 「『アラムに残るものは　イスラエルの人々の栄光のようになる』と万軍の主は言われる」。ここは、解釈が分かれるところです。イザヤ書では「残りの者」が繰り返し語られていますが、神の民イスラエルにおいて、信仰を失うことなく、信仰を貫く人たちに対する救いが語られるときに用いられます。

一つの解釈は、イスラエルの残りの人と同様、アラム（ダマスコ）に残りの者が与えられ、主による救いが与えられるとします。

もう一つの解釈は、「イスラエルの人々の栄光のようになる」という言葉が、実現することのないことであり、このようなことが起こるはずがないと、否定的に解釈することです。

私としては後者だと思います。なぜならば、ここではイスラエルよりもエフライムが用いられているからです。新約聖書ではサマリア人が出てきますが、つまり彼らは、神の民イスラエルから離れ、異邦人と化していきます。

また、ここでは「アラムに残るもの」と語られ、「アラムの残りの者」とは語られていません。イザヤ書で「残りの民」と語るとき、その主体は救い主イエス・キリストが与えられる南ユダ王国の中から与えられるのであり、北イスラエルの人たちに対して「残りの者」とは語られないからです。

そして「その日には」と繰り返し語られます(4,7,9)。終末における主の裁きのときです。最後の審判では、主に逆らう者たちが徹底的に滅ぼされていきます(4-6,9)。

しかし、主に従う者に対する救われます(7-8)。「その日には、人は造り主を仰ぎ、その目をイスラエルの聖なる方に注ぐ。もはや、自分の手が作り、自分の指が作った祭壇を仰ぐことなく、アシェラの柱や香炉台を見ようとはしない」。エフライムであるイスラエルの民が、主への信仰を取り戻し、ダマスコの人たちも従うのであれば、彼らは神の救いに導かれたことでしょう。

しかしイスラエルの人々は、神を忘れ去り、砦と頼む岩を心に留めようとしません(10)。主なる神は、僅かにでも救いの道を指し示してくださっているにも関わらず、彼らはそれを拒絶したのです。このとき、主の裁きが、ダマスコにもエフライムにも、徹底的に行われます。

異教の国日本に生きる私たちキリスト者にとってエフライムのことは他人事ではありません。強い者になびき、知らず知らずの内に信仰が弱まり、離れてしまいます。しかし私たちキリスト者はどのような時にも人間的な力に支配されることなく、主に依り頼み、主に従って生きることが求められています。主こそが私たちの砦の岩です。

12節以降、「多くの民・国々」について語られています。すべての民、すべての国々と語っても良いかと思います。すべての人は罪を帯びて生まれ、日々、主の御前に罪を犯しています。全的堕落と語ります。誰一人、自分の力を誇り、自分の力によって永遠の生命を得ることはできません。

全世界を支配している主なる神を忘れ、今、目に見えている世界の中でのみ生きることは、すべて滅びに向かう道です(12,14)。

こうした中、主は私たちを神の民、救いへと導いてくださっています。自分の力で、信仰を守り抜くのではありません。私たちが主に寄りすがり、主を砦として生きるとき、主は神の御国・栄光に導いてくださいます。私たちの信仰は守られます（参照：ウェストミンスター信仰告白17:1「聖徒の堅忍について」）。

イザヤ書では、諸外国の裁きについて、続けて語られています。

今日取り上げるのは、クシュ（エチオピア）です。新共同訳聖書の表題は「クシュとの陰謀」と記されていますが、本文からかけ離れているのではないかと思います。

「災いだ、遠くクシュの川のかなたで
羽の音を立てている国は。
彼らは、パピルスの舟を水に浮かべ
海を渡って使節を遣わす」(1-2a) と語られています。「遠くクシュの川のかなたで」と語られているのは、ナイル川のことです下流のエジプトのことを指すとの解釈もありますが、クシュのことが語られているかと思います。「羽の音を立てる」とは、「羽こおろぎ」のことを語っています。そして彼らは「パピルス」紙を用いています。

「行け、足の速い使者たちよ。
背高く、肌の滑らかな国
遠くの地でも恐れられている民へ。
強い力で踏みにじる国
幾筋もの川で区切られている国へ」(2b)。

これはエチオピアの人たちのことを語っています。遠く、エチオピアの地から主なる神が使者を遣わします。

つまり18章では裁きは語られておらず、遠くの方から、主なる神による救いが到来することが語っています。

「世界の住民、地上に住むすべての人よ
山に合図の旗が立てられたら、見るがよい
角笛が吹き鳴らされたら、聞くがよい」(3)。

全世界の人々が、主なる神が遣わされた使者を見なければなりません。ここは、メシアであるイエス・キリストのことが指し示されているようです。主イエスは生まれたばかりのとき、ヘロデ王の虐殺を避けるために２年間､エジプトに逃れていました。こうしたことと、重ね合わせることができるのではないでしょうか。神の救いは、イスラエル・ユダからではなく、地の果てから到来するのであり、イスラエルの民も、自らを誇ることなく、主の使いを見て、主の御言葉に聞くことが求められます。

主はわたしにこう言われた。
「わたしは黙して
わたしの住む所から、目を注ごう。
太陽よりも激しく輝く熱のように
暑い借り入れ時を脅かす雨雲のように」(4)。

主なる神が、神の民に対する救いをお与えくださる熱い思いが伝わってきます。一方において主なる神は、預言者を通して、強く罪の悔い改めを語り、さもなくば裁きがもたらされることが語ってきています。一方、遠く天にあって、私たち神の民を見守っていてくださいます。今、私たちは目で主なる神を見ることができないため､「神はいない」と語ることは許されません。
参照：ヨハネ3:16-17「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである」。

「刈り入れ時の前に、花が終わり
花の房が実となり、熟し始めると
主は枝を刃物で切り落とし
つるを折り、取り去られる」(5)。主なる神が、すべての祝福に満たされた実りを収穫されます。

そして、肉食である猛禽も野の獣も、主がお与えくださった実りを食べます(6)。つまりもう他の動物を襲う必要がありません。そして、人も支配・被支配の関係はなくなり、争うこともありません。イザヤはすでに11章で、メシアが与えられることによって到来する神の国について語ってきています(11:6-10)。

７節「そのとき」(7)です。イザヤ書は最後の審判と神の国の完成の時を｢その日｣と語ってきています。「その日」ほどではありませんが、イザヤ書では「そのとき」と何度となく用いられます。神の国が完成し､すべての民が主を誉め讃えるときです。

このとき、敵も味方もなく、あらゆる国々から、民が訪れ、主を誉め讃え、そして主への貢ぎ物がもたらされます。

主なる神は、完成された都エルサレム、シオンに座しておられます。このときのことを、黙示録は語っているのではないでしょうか（黙示録7:9～12)。主によって集められた神の民は、主の招きにより、主の晩餐に与り、恵みに満たされます。

主は罪に対する裁きを徹底的に行われますが、主によって集められ罪赦された神の民は､恵みと祝福に満たしてくださいます。

イザヤは諸国の裁きについて語ってきています。このとき同時に主なる神が異邦人の国を支配し、主による恵みが示され、主を信じる民に主の祝福が与えられます。

ダマスコ（アラム）とエフライム（北イスラエル）では、「その日」に主を礼拝する者とされます(17章)。主による世界の民への呼びかけが行われることにより(18:3)、クシュ（エチオピア）から主による救いが示されていきます。そのとき神の国が完成し、すべての民が主を誉め讃えるときが与えられます。

そうした背景にあって、エジプトについての託宣が語られます。偶像を礼拝しているエジプトの民たちは打たれ、主による裁きがもたらされます。このとき、偶像がおろめくことにより、「エジプト人の勇気は、全く失われ」ます(1)。偶像という強いシンボルがあるからこそ、勇気が与えられ、強大な力を諸国に誇ることができたのであり、シンボルを失うことにより、一人の人間としてのエジプト人の弱さが露わにされているように思います。シンボルを失い、力が削がれていくと、犯人捜し・責任転嫁が行われ、同士討ちが始まります(2)。そして、主の裁きとして、エジプトが滅びていく状況が語られていきます(5-15)。

最後の審判として強国エジプトが滅びることにより、神の国が到来します。そしてエジプトにおいて、主を礼拝されます(18)。

このとき「カナンの言葉」（イスラエルにおけるヘブライ語）のみが用いられます。つまりバベルの塔により、世界中の人々が異なった言葉を用い始めたのですが、ペンテコステの日、世界中から集まって来ていた人たちが、言葉を理解することができるようになり、その日に、バベルの塔の呪いが完全に解かれ、人々が一つの言葉を語り始めます。つまり神の国の到来は、言葉の混乱が収束することをも、意味しています。

そして偶像は廃れ、一人の神・主なる神が世界を支配することとなります(18)。そして皆が一人の人のよう主を礼拝します。

そして主を礼拝するとはどのようであるかが語られていきます。①祭壇を築き(19)、礼拝の場所が整えられます。②祈りが献げられます(20)。③主御自身が示され、神の啓示が行われます(21)。これが新約においては御言葉の説教です。④神が礼拝され、請願が立てられ、備えの供え物を献げられます(21)。私たちの礼拝における感謝の応答としての献金と奉仕です。⑤「撃たれる。しかしまた、いやされる。彼らは主に立ち帰り、主は彼らの願いを聞き、彼らを癒やされる」(22)。これは戒規（訓練）のことです。

「撃たれる」・「戒規する」と語れば、主の裁きのように聞こえますが、戒規は訓練であり、戒規を行うことにより、主の御前に立ち帰り、罪の悔い改めを求め、信仰を新たにすることが求められます。繰り返しますが、戒規が裁きとなってはなりません。

教会を立てるために、正しい礼拝が必要です。このときに求められるものを「教会のしるし」と語りますが、祈り・御言葉の説教・聖礼典の執行・戒規です（参照：ウェストミンスター大教理問108）。正しい礼拝が献げられるところに聖霊が働き、主が証しされ、それが結果として伝道となります。またその結果として、敵対していた者が和解し、共に礼拝を献げることとなります。

そして正しい礼拝が行われるとき、教会は広がりを見せます。強国であるエジプトとアッシリアは、世界を緊張と分裂を引き起こしていました(23)。しかし主を礼拝する民が集うとき、それらの分裂が解消され、一人の人のように、エジプト人もアッシリア人も共に礼拝を献げるときが到来します。

ですから主なる神によって救いに導かれた私たちに求められていることは、第一に伝道することではなく、まず主なる神に正しい礼拝を献げることです。

つまり私たちは、ここ大宮教会で礼拝を献げているのですが、点ではなく、この点は空間的な広がりを見せるのです。一つの民・一つの世界に、唯一なる主なる神がおられるだけで、エジプトもアッシリアもイスラエルも一つになり、主の祝福に満たされます(25)。これがまさに2:4で語られてきたことが実現するときです。

このときの神礼拝の様子が黙示録において語られています（黙示録7:9～12）。「あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、……大声でこう叫んだ。

「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、誉れ、力、威力が、世々限りなくわたしたちの神にありますように、アーメン。」

18章でクシュ（エチオピア）、19章においてエジプトについて語られてきました。クシュから万軍の主が示され、エジプトもアッシリアもイスラエルと共に主に従い、主を祝福する終末の状況を確認してきました。

20章では、アシュドドについて語られていきますが、ここにおいてもエジプト、クシュのことが語られていきます。つまりその日における終末の出来事が起こる前に、エジプトやクシュに対する裁きが行われるのであり、悔い改めを迫っています。

アシュドドはペリシテにあり、ガザの北、地中海に面した小さな町であり（巻末地図４）、新約ではアゾト（使徒8;40、巻末地図６）です。

BC720年に北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされた後、713年に、エジプトの影響力の下、アシュドドはアッシリアに対する反乱を行います。しかし、711年になると、アシュドドはアッシリアに屈し、アッシリアの傀儡(かいらい)政権となります。しかしなおもエジプトはアシュドドに働きかけ、アシュドドはユダ・エドム・モアブと共にエジプトの同盟に加わります。そしてアッシリアに対する反乱を継続します。

しかし、アッシリアの王サルゴンは将軍タルタンを送り、アシュドドはアッシリアに屈し、アッシリアに占領されます(1)。

主なる神は、エジプト・クシュ・アシュドドに対する警告を発するにあたり、まず預言者イザヤに命じます(2)。「腰から粗布を取り去り、足から履物を脱いで歩け」。粗布をまとうこと自体、預言者として遜り、人々に対して自らの姿を顧み、悔い改めを迫る姿でした。しかし主は、粗布をすら脱ぎ捨て、履き物も脱げと語られます。非常に恥らしい格好です。この預言者の姿こそ、エジプト・クシュの前兆であると、主は語られます(3)。

こうした裸の姿は、捕虜とされる捕囚の民・奴隷の姿そのものです(3)。つまり、エジプト・クシュといった強国が、戦いに敗れ、捕囚となり、奴隷として買い取られていくことを物語っています。

そして、イザヤは裸になることを３年間課せられます(3)。この３年という期間は、主が行われる裁きの確実性を語っています。

そして、「彼らは自分たちの望みをかけていたクシュのゆえに、誇りとしていたエジプトのゆえに、恐れと恥をこうむるであろう」と語るとおり、アシュドドもまた、クシュやエジプトに依り頼んでいた故に、同じような恥を被ります(5)。

主なる神が、なぜエジプトを裁き、クシュを裁き、アシュドドを裁くのか、彼ら自身が主の御前に立ち、主の御言葉・主の律法に照らして、自らを省みることが求められています。力を誇り、武力で自国の民、そして他国を支配しようとするとき、隣人を愛することなど行わず、殺し・姦淫し・盗み・偽証し・さらにむさぼるのです。それ故に、主なる神は彼らを滅ぼし、囚われの身・奴隷に差し出されるのです。

「その日には、この海辺の住民は言う。『見よ、アッシリアの王から救われようと助けを求めて逃げ、望みをかけていたものがこの有様なら、我々はどうして逃げ延びえようか』」(6)。海辺の住民とは、アシュドド周辺のペリシテのアシュケロン、ガザのことですが、イザヤが遣わされたユダの人々に向けて語られています。このとき、すでに北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされており、さらにアシュドド・エジプト・クシュとなれば、ユダも他人事で済ましていてはなりません。

今、世界を見渡すと、力をもって支配しようとして、戦争・武力による自国民の抑圧・迫害が行われています。しかしイザヤの預言により語り、世界は主なる神が支配しておられること、それが実現することが語ってます。今の時代、神はいなくなったのではありません。当時の人々も同じように、神の支配を忘れ、偶像に頼り、自らの力で世界を支配しようとしていたのです。

主なる神が、今に生きる私たちに語りかけていることは、世界の状況をただ見ていてはなりません。他国で起こっていることが、日本においても起こる可能性があること、さらにここに潜む罪は、私たち自身の姿であることを顧みなければなりません。私たちは、今も生きて働く主の支配の下に、生命が与えられ、神の恵みにより、キリストの十字架の御業が主を信じる私たちに転嫁され、罪が赦され、神の子とされています。ただ神を信じるのではなく、主の御力にひれ伏し、罪を悔い改め、遜り、主への信仰に生きることが求められています。

今日の御言葉では、バビロンが滅ぼされ、偶像の神々の像も砕かれ、地に落ちることにより、主の御支配が明らかになります。

最初、「海の荒れ野についての託宣」と語ります。イザヤ書では「託宣」という言葉が繰り返し語られます(13:1,14:28,15:1,17:1,19:1です。「海の荒れ野」が、バビロンの地域、ペルシャ湾を指すと、一般的に注解されてきています。

「ネゲブに吹き荒れるつむじ風のように彼は来る　荒れ野から、恐ろしい地から」(1)では、バビロンが周辺諸国、さらにはユダを攻めてくることを語っています。

こうした状況の中、主がイザヤに預言を託します。最初は、バビロンの不法について語っているようです。それに対して、エラムやメディアといったペルシャのキュロスの軍隊が攻め上ってくることにより、バビロンの不法を終わらせることを、主は預言されます(2)。

ここで、主は「わたしは呻きをすべて終わらせる」と語り、アッシリアの恐怖にあるユダに対する主の愛が示されています。

しかしこれは激しい幻です(2)。そして、預言者イザヤに苦痛が襲います(3)。このときイザヤは「それゆえ」と語ります。なぜ「それゆえ」なのか？　なぜ、イザヤに腰の痛みが襲ったのか？　謎だらけです。バビロンが滅びることにより、ユダは解放され、苦痛から解放されるはずです。

このとき、主なる神が行うバビロンに対する裁きの恐ろしさ、すさまじさを、主はイザヤの体全体に体験させ、その迫力、主なる神の思いを、イスラエルの人々、さらには滅びの対象となるバビロンの人たちにも迫っているのではないでしょうか。

そしてイザヤは「わが心は乱れ、おののきが、わたしを打ちのめす」と語ります(3)。イザヤにとっては、ユダの人々に悔い改めを迫ることでも、人々から蔑まされ、迫害を受けていたと考えられます。さらには20章では、裸になり、エジプトとクシュに対する裁きを語り続けることが強いられました。そこまで、主の召しに従ってきたイザヤが、心が乱れ、おののくと語ります。

イザヤ自身が「楽しみにしていた夕暮れ」も、これから迫ってくる裁きのため、「恐怖に突き落とされ」ます(4)。

しかしバビロンの人々は、誇り高ぶり、「宴は広げられ、座は整えられ　人々は飲み食いしていました」(5)。そして、新たな征服のために、軍隊に鼓舞している状況が語られているようです(5)。

しかし、主なる神による裁きが迫っています。「見張りを立てる」とは、誰が何に向かって見張りの立てるのでしょうか？(6)

①まだ滅びが迫っていることに気がつかないバビロンが、ユダを攻めてくるかか？
②バビロンが、これから主の裁きが迫ってくるために、備えのために見張りを立てよと語っているのか？
③主がバビロンに攻めてきて、激しい戦いにより滅ぼしますが、その状況を、イザヤが第三者的に「見届けよ」とのメッセージが語られているのか。

私は③のように解釈します。

「二頭立ての戦車」(7)がやってきます。主がエラムやメディアの軍隊によって攻めて来ます。これは、スポーツ中継をアナウンサーが実況しているように聞こえます。

このときにイザヤはバビロンが滅ぶことを見届けます。主なる神が、エラム、メディアを用いてバビロンを裁き、滅ぼします。

「倒れた、倒れた、バビロンが。
神々の像はすべて砕かれ、地に落ちた。」

ユダにとってバビロンが滅びることは、信じられないことです。しかし主は、アッシリア・ペリシテ・モアブ・エジプト・クシュと周辺諸国を次々と滅ぼし、そして最後にバビロンの裁きを語ります(13章以降)。

今ユダは、北イスラエルがアッシリアに滅ぼされ、自分たちも滅ぼされることに脅えています。そうした最中バビロンもまた主の裁きがもたらされることが語られます。

こうしたときに、主はユダに対して、「打たれ、踏みにじられたわたしの民よ」(10)と語りかけられます。アッシリアが怖いから、バビロンに付くではダメなんだ！との、主からの強烈なメッセージです。イザヤはこのことを、自らの体で受け止め、それをユダの民に語りかけます。

そして、イザヤは最後に、自らの言葉で、ユダの民に語りかけます。人や力に依り頼む前に、誰が天地万物を創造され、誰がすべてを支配しておられるのか、私たちは生ける主なる神を忘れてはなりません。

新共同訳では、11節にタイトルとして、「エドムについての預言」とあります。一方、聖書協会共同訳では、11節「ドマについての託宣」、13節「アラビアについての託宣」とあります。今日は、11節は「エドムについての託宣」、13節は「アラビアについての託宣」として、預言の御言葉に聴きたいと思っています。

「ドマ」(11)は、「沈黙」を意味する言葉であり、セイルから訪ねる者がやってくるということからしても、エドムのことを暗示しています。

「見張り」(11)は、８節においても出ていました。バビロンが滅ぶのを見届ける者であり、ここではエドムが滅びていくのを見届けている者です。

エドムにおいて夜の闇・沈黙の時間が流れていきます。このとき見張りの者が語ります。「夜明けは近づいている、しかしまだ夜なのだ」(12)。沈黙の時が長く続きます。これはただの静まりではなく、何も起こらない暗闇が続き､厳しい訓練の時です。

しかし「夜明けは近づいてい」ます。夜の沈黙の間、何も考えないことは、求められていません。私たちは先日、イースターをお祝いしましたが、夜が明けることにより､キリストの復活が成し遂げられました。夜が明けることにより、死・罪・サタンに対する勝利が与えられます。このことを考えるとき、夜の沈黙の間に、主なる神と出会うこと、自らの姿を顧み、罪を悔い改めること、そして主なる神への信仰を表すことが求められます。このこと抜きにして、夜明けは訪れません。

「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった」(ヨハネ1:4-5)。

そして、見張りの者は「もう一度来るがよい」と語ります(12)。同じ状態で再来するのではなく、罪の悔い改めと主への信仰をもって来ることが求められています。そうすることにより、光である神の御子と出会い､夜明けを迎えることができるのです。

13節、新共同訳は「荒れ地」と訳しますが、他の翻訳は「アラビア」と訳します。「荒れ地」と訳せる言葉ですが､「夕暮れ」と訳すことにより、11-12節とのつながりを考えることができます。

「デタンの隊商」(13)と語られています。アラビアの人々は、商売・貿易によって栄えていました。夕暮れが迫っており、どこかで夜を明かさなければなりません。そのために、デマの地の人々に対して、デタンの隊商を受け入れよと語ります。

夕暮れが迫り、闇の中・長い沈黙の時が来ます。一晩休んだら、続けて商売を行うことができるのではありません。

「まことに､主はわたしにこう言われた。
雇い人の年期のように、一年たてば
ケダルの栄光はすべて尽きる。
ケダルの勇士らの弓も残り少なくなる｣。

主なる神の主権の下、時間は流れています(16-17)。貿易・商売によって栄えたアラビア・ケダルの繁栄・栄光も、時が来れば廃れてきます。これは世界を支配しておられる主の御業として行われます｡預言者は、このことをもって、アラビアに夕暮れが訪れていると語ります(13)。

神のいない社会で商売をしていれば、闇の支配の下、剣による裁きを受けます。そのためすべてを支配しておられる主の支配に生きることが求められています。

つまり、アラビアの人々に求められることは、テマの地の住民に逃れ、水を得ることではありません。テマの地では乾いた喉を潤すことはできません。ケダルの人々に求められることは、シオンにある主なる神に助けを求めることです。

イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」(ヨハネ4:13-14)

今の日本では、ほとんどの人が主なる神を信じていません。闇の中に私たちキリスト者は置かれています。私たちは、闇の支配に屈するのではなく、なおも光である御子を見る必要があります。そのために私たちは、主の御言葉である聖書に聞き、教会の交わりに生きることが求められています。

また今の世の中、神なき商売・経済が、世界を席巻しています。そうした中私たちキリスト者は、主なる神の御力を見失ってはなりません。主は御言葉により、私たちに真の生きた水をお与えくださり、永遠の生命に導いてくださいます。

主はイザヤを通して、イスラエルの周辺諸国の民に対して、主の裁きを語り、悔い改めて主なる神を信じるように求めてきました。このことをとおして主なる神は、イスラエル民族の王ではなく、王の王、世界の上に立つ神であることを語ってきました。そして21章では、「ドマ（沈黙)」、「アラビア（荒れ地)」の託宣が語られてきました。

22章は「幻の谷についての託宣」です。エルサレムは三方を山で囲まれた谷に位置しており、今日の御言葉はエルサレムについて語られています。

北イスラエル王国がアッシリアに滅ぼされても、南ユダ王国は周辺の諸国と軍事同盟を結んだりしますが、同時にエルサレムが攻められ、要塞にある街が陥落することはないとの自負を持っていました(1b～3)。

イザヤ書22章では、選びの民としてのイスラエル（神は戦う）・エルサレム（平和の町）ではなく、他の民族と同じように、主を信じようとしない罪が指摘され、悔い改めが求められます。それはあたかも異邦人のごとくであり、そのことが表題（1節）にも表れています。

エルサレムに住む人々について預言者イザヤは、「騒音に満たされ、どよめく都、喜びに浮かれた町よ」(2)と語ります。

北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされ、南ユダ王国・エルサレムも陥落が迫っています。そのため戦わずして捕らえられ、殺されていく様子が描かれています(2～3)。

それ故預言者イザヤは、激しく心を痛め、嘆きます(4)。

混乱は主なる神から来ます(5)。エルサレムの人々の罪の結果です。エラムが、アッシリアの傭兵としてエルサレムを攻撃してきます。キルも同様です(6)。

エルサレムの人々はなんとかしのごうとします(8-10)。しかし主によるエルサレムの人々への裁きは避けることができません。主を顧みようとしなかったためです(11)。

主は、主の御前に嘆き・泣くこと・悔い改めを行うことを求めます(12)。しかしエルサレムの民は主の御言葉を無視し、喜び祝い、「食らえ、飲め、明日は死ぬのだから」と、贅沢な食事に興じています(13)。そのため神が選ばれたイスラエルの民であっても、主による滅びが宣告されます(14)。

続けてイザヤは、エルサレムの人々の代表として、ヒゼキヤ王の家令（書記官・執事）のシェブナ（「主よ帰りたまえ」の意）に言及します。彼はアッシリアの王がユダのヒゼキヤ王に降伏を迫ったとき、交渉した３名の一人です（参照：36:3)。そして彼は贅沢な墓を作り、贅沢な家に暮らし・贅沢な生活を行っていました(16)。その生活は人々にも知られていたため「あの家令」なのです。

そして主による裁きが行われます(17-19)。

主なる神は、主の御前に生命が与えられている一人ひとりを見ておられます。仕事ぶり、地位・権力といった表面的なことばかりではなく、人々との関係・主なる神との関係をつぶさに見ておられます。そして主は、最後の審判において、一人ひとり、信仰・生活・仕事においてすべてを評価し、審判を行います。私たちは何一つ隠すことはできません。

そしてその日には、シェブナの支配権を、ヒルキヤの子エルヤキム（「神は確立したもう」の意）に与えると宣言されます(20-21)。エルヤキムもシェブナ同様に、ヒゼキヤ王に仕えていました(参照　36:3)。

ここで主はエルヤキムのことを「わが僕」と語り、彼にメシア的な権威を与えます。「彼が開けば、閉じる者はなく、彼が閉じれば、開く者はないであろう」(22)。ペトロに与えられた鍵の権能（マタイ16:19）において用いられますが、主なる神のもっておられる権能です（参照：黙示録3:7)。

主は、主を信じ・御言葉に従って生きる者を主の働き人として用いてくださいます。

しかしエルヤキムは、メシアに代わる者ではありません。エルヤキムは、シェブナの世俗性と高ぶりに対比して、信仰深さ・謙遜さにおいてメシア像を表し、寛容で愛に満ちたキリスト者の模範となりました。しかしながら、立場を利用して、何を行っても許されることはなく、腐敗を持ち込むことは許されません。(25)。

ここにキリスト者、そして教会のあるべき姿が語られているといって良いのではないでしょうか。主を信じ、主の御言葉に従って教会形成を行います。しかし同時に、罪赦された罪人であり、主への信仰と遜り・謙遜を失ってはなりません。

イザヤ書23章はティルスとシドンについて語られています。地中海の地図を思い描いていただきたいと思います。ティルスとシドンはイスラエルの北西・地中海にある港のある商業都市です。タルシシュは、スペインの街と言われています(参照：ヨナ書)。旧約時代における地中海の最西端とされ、金・銀・象牙・サファイア・錫・鉛などの産地・加工地として知られていました(列王上10:22、歴代下9:21、エレ10:9, エゼ27:12, 38:13)。

そして、シホル、ナイルとエジプトの地名がならび、キティムはキプロス島のことであり、貿易の中継寄港地です。

エジプトのシホル・ナイルにおいて多くの収穫物が獲れます。タルシシュにおいては、様々な鉱物資源が獲れていました。それらが収入源となり、貿易により栄え繁栄していました。

イザヤはタルシシュの船に、泣き叫べと語ります(1)。ティルスは破壊され、キティムからの船がそのことを知らせます。

そして、シドンの貿易商たちに嘆け、うろたえよと語ります(2,4)。「海の砦」として知られていたシドンが、滅亡に際して、子どもを持たない不妊の女のように声すら発することもできない苦しみに陥ります(4)。

ティルスは、地中海貿易において重要な拠点の都市であり、ティルスが衰退すると、地中海地域の諸都市にもその影響が及びます。このことが主の託宣として語られ、主権者である主なる神の裁きとして成し遂げられることが、イザヤにより預言されます。

ティルスの繁栄により、地中海地域全域が繁栄していました。皆が、自分たちの手によって築き上げた繁栄であり、またこの繁栄がいつまでも続くと思っていました。

しかし「それを定められたのは万軍の主であり」(9)、主の裁きとしてティルスが汚され、辱めを受けます。すでにイザヤが預言において語ってきていることですが、主なる神の支配は、神の民イスラエルにだけ及ぶのではなく、主が天地万物を創造された全世界に及びます。主なる神が不在の中、貿易を行い・繁栄しているティルスにも及んでいます。そのため、繁栄し素晴らしい街となっていたティルスも、不信仰の故に、主によって汚され、そこに住む住民は辱めを受けることとなります。

続けてイザヤはタルシシュに対して言及します(10)。ティルスが滅ぶことにより、タルシシュを遮るものはなくなり、砦は破壊されました(10,11)。カナン地方のティルス、シドンが滅びることにより、従属関係にあったタルシシュは自由となります。

しかし同時に主は語られます。「お前は、二度と陽気な町ではありえない。……しかし、そこでもお前は休みを得ない」と(12)。タルシシュは自由になりますが、喜びは失われます。繁栄がなくなることにより、楽しみが失われ、力が砕かれるからです。

これはアッシリアが滅ぼされたためにカルデアが滅びたのと同様であり(13)、ティルスが滅びることによりタルシシュも滅ぼされ、廃墟とされます。そのため、タルシシュの船も泣き叫ぶこととなります(14)。

しかし主なる神は、「その日が来ると」と語られます(15)。ユダが70年の年を経て、バビロン捕囚から解放されたように、解放されるときが来るのです。「ティルスは遊女の歌にうたわれているようになる」(15)という表現は、世俗社会として繁栄を取り戻すことを言い表しています。これは非常に不思議なことであり、彼らに対しては、最後の審判における裁きがここで語られることなく、回復が宣言されます。

遊女として、周囲の国々を姦淫すると語ります。預言者ホセアに対して、主なる神が「淫行の女をめとり、淫行による子らを受け入れよ」(ホセア1:2) と語られていました。繁栄を取り戻すが、ここが罪の巣窟のごとくになるのです。

つまり主はティルスが神の民として無条件で祝福されると語っているのではありません。彼らは、遊女として、神から離れた生活により繁栄を築いたとしても、主の恵みに満たされることはなく、主の裁きが待ち受けています。そして「彼女の利益と報酬は、主の聖なるものとなり、…彼らは飽きるほど食べ、華やかに装い」ます(18)。

つまり発展という形で、主は彼らの生活を向上させてくださいますが、そうしたものが、神の民であるキリスト者にも届けられます。それらは、あくまで主なる神がお与えくださった恵みであって、彼らがそれらを自らのものとするとき、主からの裁きを逃れることがありません。

今まで、エルサレムを含むイスラエルの周辺の各国の罪を暴き、裁きと悔い改めを求めてきました。そして24章に入り、各国から離れ、全体のこと、つまり世界の裁きについて語り始めます。そのため24～27章は、「イザヤの黙示録」とも呼ばれ、旧約聖書のダニエル書、新約聖書のヨハネの黙示録と共に、聖書の終末論を展開します。

そのため、今までは「託宣」として、主からの言葉が直接、それぞれの国に対して語られていたのに対して、24章では、「見よ」と語り始め、終末の出来事が始まり、第三者的に見ているような状況です。

終末の出来事が始まると、そこに集うすべての人たちが、苦しみの中に置かれます。神に仕える祭司も、権力・財力を持っている者も、貧しい者も、男も女も、関係なく、裸にされ、強奪に遭います(4)。

裁きの理由は、

「彼らが律法を犯し、掟を破り
永遠の契約を棄てたから」です(5)。

主なる神は、天地万物を創造された時、はじめの人であるアダムと女の間に契約を立てられたました（創世記2:16～17)。生命の契約と呼ばれています。

主なる神は、この生命の契約のことを「永遠の契約」と語り、「人はそれを棄てた」と語ります。最初の人から普通に生まれたすべての人が、罪を担って生まれ、日々罪を犯しています。それ故に、人は、肉の死・滅びを避けて通ることができません(6)。

天地万物、つまり気象において、すべてのものが枯れ、衰えて行きます(4)。こうした主による裁きは、人々の生活に及び、悲惨な現状が語られていきます(7-12)。

そうした中、「わずかの者だけが残され」ます(6)。主なる神を信じ、神の御言葉に聞き入っている者、周囲の人々に流されることなく、主の教えに従って生きている者です。他の箇所では「残りの者」という言葉で繰り返し語られてきたことです(4:3, 10:20～11:16, 14:3, 15:9, 28:5, 46:3, 49:6)。

そして13節を見ると、新共同訳では訳出されていませんが、「こうして」という言葉が記されています。「わずかの者・残りの者」について語られています。つまり、人々がぶどうを用いて酒を造り、放縦な生活をしている最中、落ち穂を拾い、慎ましく生活をしている者に脚光が当たります。

このとき、人々はイスラエルの神、主なる神を信じています。主の威光を喜び歌っています。今まで諸国に対して、主の託宣を語ってきましたが、「自分たちの神・偶像ではないのだ！」、「イスラエルの神、主なる神を信じ、誉め讃えよ！」と語ります(14-16)。イスラエルの神、主なる神に従う人にこそ、誉れがあります。つまりこうした人々こそが、「わずかの者」です。

16 しかし、わたしは思った。
「わたしは衰える、わたしは衰える
わたしは災いだ。
欺く者が欺き
欺く者の欺きが欺く。」

一部のわずかな人は、イザヤの言葉に耳を傾け、主に従います。そして、主の救いに導かれます。しかし多くの人々は、預言者の言葉に耳を傾けず、自らの生活を変えようとはしません。ここにイザヤは自らの無力感を感じ、自分の役目はこれまでだと思います。

そして主による裁きがもたらされた状況が語られ(17-18b)、そして改めて４節においても語られていた天地万物が破壊されていく状況が語られていきます(18c-20)。

つまりすべての者が救われることはありません。主はすべての者に罪を悔い改め、主なる神を信じるように求めています。主の御声に聞き従い、主を信じる者にのみ、主による救いがもたらされます。だからこそ「わずかな者」なのです。

そして、「その日が来れば」(21)と語られます。裁きが終わり、神の国が到来するときです。この24:21から27章にかけて、６回「その日」が出てきます（24:21, 25:9, 26:1, 27:1, 27:2, 27:12-13)。このことは、次回から改めて学び続けたいと思います。

今に生きる人々は、今の時を楽しみます。しかし私たちキリスト者は、今も主が御支配の下に置いてくださっていることを信じつつ、来たるべき世である神の国を信じています。神の国にある喜びのある永遠の生命にこそ、希望があります。だからこそ、今のとき、周囲の人々に流されることなく、「わずかな者」であるかも知れませんが、なおも主にある救いの希望に、信仰生活を歩み続けることが求められています。

完成された神の御国では、主なる神が崇められ、救いの感謝の讃美が行われます(1)。 ここには主に逆らう者も、主の民を虐げる者もいないからです。

主なる神は、天地万物を創造される前に、すべてのことを御計画されました。御子の十字架の御業により、罪人の罪を贖い、救い、神の御国へと凱旋し、神の国が完成することをです。イザヤは、この神の御計画が成就した世界を、黙示し、預言しています（参照：ウェストミンスター信仰告白3:5)。

つまり主なる神は、神を信じるかどうか分からない人たちを、彼の信仰によって救ったり、滅ぼしたりするのではありません。主の御計画に従い、神の民の心を開き、罪を悔い改め、主を信じるように働いて下さいます。そして私たち一人ひとりも、聖霊の呼びかけにより、主によって集められました。主の御計画が摂理として実現し、そして神の国が完成へと至ります。

しかし、この日を迎えるまではどうだったでしょうか？ 都エルサレムはがれきの山となります。そして永久に都が立て直されることはありません(2)。つまり、イエス・キリストの来臨、十字架の御業が成し遂げられ、その後は順風満帆に教会が成長し、神の国が完成するのではありません。都であるエルサレムは廃墟と化します。

イザヤの時代であれば、この後、南ユダ王国はバビロンに滅ぼされ、捕囚の民とされます。主イエスの時代のイスラエルも、AD70年にエルサレムは崩壊します。

これは今に生きるキリスト者も同じです。クリスチャンになれば、神がすべてを守り、順風満帆に生きることができると考える人もいます。そのため、いざ試練が襲ってきて、祈っても祈りが聞かれないことにより、信仰から離れる人もいます。しかしこうした試練は、主が神の民にふさわしい信仰を与えるための訓練の時であり、神がいないのではありません。

しかし神の国が完成するとき、主の御力がすべての民に示されます。そして勝利を遂げて下さいます。そのため、異邦人・主に逆らい、独裁を誇ってきた権力者であっても、このとき、主の御前にひれ伏さざるを得ません(3)。そして主に従う神の民は、苦しみが取り除かれ、平安が訪れます。

そのため、権力者・独裁者に虐げられ、苦難の中に歩んでいる神の民を、主は守り導いてくださいます。地上での歩みは、虐げ・苦難・艱難の絶えない生活であるかも知れません。しかし、主なる神が砦の塔・避け所となってくださいます。そして信仰がなくならないように、守って下さいます。

しかし私たちは、苦難の中にあるとき、神の民は自分の努力で、問題を解決しようと動きます。しかし問題は解決できません。主は、いつでも神の民と共にいてくださり、守ってくださいます(5)。そして一時的に信仰が弱まったり、神から離れることがあっても、主の御前に立ち帰り、主を信じ、主の守りと導きを信じることができます。

そして改めて主なる神がお与えくださる祝福をお示し下さいます(6-8)。神の御国では主による祝宴が催されます。新約に生きる私たちは聖餐式において、神の御国における祝宴の前味を味わいます。キリストが最後の晩餐において弟子たちにお語りになった言葉、つまり主イエスが再び晩餐を行うときこそが、神の国が完成したときです。

そしてこのとき、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数え切れないほどの大群衆が、主を誉め讃え、讃美の歌を歌います（黙示録7:9)。

そして完成された神の御国では、もう死は永久に滅ぼされ、神の民は永遠の神の祝福に生かされます。苦しみ・悲しみは無くなり、涙を流すこともなくなります。

「これは主が語られたことである」(8)。この主の約束は不変であり、必ず実現します。だからこそ、主が預言者を通してお示し下さる神の国の姿を、私たちは喜びをもって受け入れ、ワクワクしながら待つことが許されています。そしてその日が来れば、神の民は全身をもって喜び踊るのです(9)。

最後に、イザヤはモアブについて言及します。異邦人や独裁者であっても、主の御力の前に悔い改め、主への信仰を言い表すならば救われますが、最後まで高慢で、主の御力にひれ伏そうとしない者は、主の裁きを避けることはできません。

つまり、その日、神の国の完成するとき、神に従い、主を信じる神の民は、永遠の祝福に入れられますが、自らの罪を悔い改めない者に対する裁きがあります。

イザヤ書では、24～27章において「イザヤの黙示録」と言われる終末の預言が語られています。そして、26章でも「その日には」(1)と語り、最後の審判と神の国の到来の状況を、預言します。

1-2「我らには、堅固な都がある
救いのために、城壁と堡塁が築かれた。
城門を開け
神に従い、信仰を守る民が入れるように」。

この１～２節を読むと、ヨハネ福音書10章が思い浮かびます。1～3 「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す」。… 7 イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である」… 8「わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける」。

城壁の中、羊飼いの囲いの中は、まさに神の支配される神の国であり、ここにはサタンが入ることはできません。そのため、神を信じる者は守られ、平和が実現します。

そのためイザヤは語ります。

3b 「あなたに信頼するゆえに、平和に。
4 どこまでも主に信頼せよ、
主こそはとこしえの岩」。

通常、信仰とは「信じる」ことであるように語られます。しかしここでは「信ぜよ」とは語らず、「信頼せよ」と語ります。「信頼」とは「信じて」「頼りにする」ことですが、「頼りにする」とは、「委ねる」ことができることだと思います。

主なる神は、いつでも私たちと一緒にいてくださり、守ってくださいます。だからこそ「とこしえの岩」と語ります。

そして、「その日」には、主の御力が示され、サタンに勝利を遂げてくださいます。「主は高い所に住まう者を引きおろし」(5)とは、権力を持ち、人々を支配し、人々を虐げている者が、主による裁きにより滅ぼされることを語っています。そして、貧しい者・弱い者である神の民が、彼らを踏みしめて、神の御国へと凱旋します。こうした喜ばしい状況を、イザヤは讃美します。

7 「神に従う者の行く道は平らです。あなたは神に従う者の道をまっすぐにされる」。

このことばは、ヨハネ福音書14:6の御言葉を連想させます。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」。

私たちの人生は様々な艱難・試練が待ち受けている道です。こうした私たちの歩む道を、主が「平らにする」とお語りくださいます。主を信じ、主の栄光を讃えて歩むとき、主は、勝利を与え、主の栄光に満たしてくださいます。

一方、主に逆らい続ける人は、主の裁きを逃れることができません(10～11)。しかし、主は主に逆らう者を、簡単に切り捨てているのではありません。預言者を通して語られる主の御言葉を聞き、正しさを学び、罪を悔い改め・主を信じる者には、救いの道を示されます。主の御言葉を聞いても、正しさを学ぶことなく、不正を繰り返し、主を信じようとしない者に対して、主は最終的に裁きを行われます。ここの所は、注意深く読むことが求められます。

その上で、主がお与えくださる平和を、預言者は喜んでいます(12～15)。

しかし私たちの地上の生涯は順風満帆ではありません。苦難があり、妊婦が出産のときに苦しみに遭うことも避けられません。

このとき、神を信じていない者、神に頼っていない者は、まじないを唱えます。異教の神への祈りではないでしょうか。

絶対的な統治を行っておられる主なる神への信仰・信頼がないために、他のものに答えを求めようとします。

しかし、とりでの岩である主なる神は、死者を甦ることを可能とします(19)。主イエスは、死して墓に葬られてから４日以上経っていたラザロを復活させてくださいました。主を信じる者・主にすべてをより頼み委ねる者に、勝利をお与えくださいます。

そうした中、終末における艱難が到来すれば、神の民に、部屋に入り隠れよと語ります(20-21)。ヨハネ黙示録では、１／３が滅ぼされることが語られていきます。その間に、まだ悔い改めない者たちに対する悔い改めが迫られていきます。しかし、神の民キリスト者は、部屋の中に入ることにより、主の守りの中に救いへと導かれます。

イザヤ書24～27章は、イザヤの黙示録と言われています。27章はその最後です。

レビヤタンが出てきます(1)。ヨブ記(3:8、40:25)、詩編(74:14、104:26)、イザヤ27:1と聖書では５回出てきます。神によって裁かれるべき神に敵する勢力を象徴すると思われる動物として描かれています。ヨハネ黙示録においても正体が分からないものが語られていきますが、終末の出来事が語られるときには、こうした表現が用いられます。

そして蛇＝レビヤタンです。人を誘惑した蛇はサタンであり、彼であるキリストが蛇の頭を砕くことが語られていました(創世記3章)。「その日」、主が最後の審判を下されるとき、主に逆らい続けるサタンは、主により裁きを受け、罰せられます。そして原福音が成就します(創世記3:15)。つまり神の国の完成は、聖書全体・救済史における主の御計画が完成するときです。

その上で「その日には」と語られます(2)。サタンの裁きと主の民に与えられる祝福(参照：ウェストミンスター大教理問90)は、コインの表裏の関係です。

聖餐式において、私たちは主の晩餐に与りますが、主が晩餐の主催者です。私たち神の民はぶどう畑における収穫の喜びに与ります。そして主は、喜びの晩餐に与る者を祝福し守ってくださいます。

主は和解を求めます(5)。今まで自らの力を誇っていた者であっても、主の御前にあって和解し、主の恵みに入るようにと、主はお招きくださいます。過去のおいて主と敵対していたとして､主なる神と和解し、自らの罪を悔い改めるとき、主は神の国の祝福にお招きくださいます。

主が終わりのときを定めておられるのは、彼らと和解するためです。イエス・キリストの十字架の御業が成し遂げられてから、終末の時代が始まりましたが、すでに2000年の年月が流れています｡にもかかわらず、未だに神の国は完成していません。主は主から離れ、罪を犯す民を、懲らしめ、時に滅ぼし・捕囚の民としました(7-8)。しかし主なる神は、彼らを完全に滅ぼすことはしませんでした。彼らが悔い改めて帰還するときを待たれました。旧約のイスラエルの民も、新約のキリスト者も、主から離れて行こうとするとき懲らしめられます。しかし主は、罪を悔い改め、主の御前に帰ってくる民を待っておられます。

そして「その日」が来れば､罪を犯して、一時的に離れていた者も、罪を悔い改めることにより主による贖いにより、罪が除かれ、主の恵みに満たされます(9)。そして、偶像のために作られていた祭壇やアシェラの柱・香炉台も砕かれていきます。

このとき都エルサレムであっても破滅します(10-11)。これはイスラエルの民の罪の故の裁きです。預言者が「これは全く分別のない民だ」と嘆くとおり(11)、イスラエルが神の民として主の御前にひれ伏すことなく、形だけで礼拝を献げようとしていることに対する裁きです。その日、最後の審判において、主に逆らう者に対する裁きと共に、主に従う者に対する祝福が語られていきますが、形だけの信仰、信仰の伴わない礼拝行為に対して、主は見過ごされることはありません。

今に生きる私たちキリスト者も、主による神の御国の完成を希望をもって待ちわびますが、今改めて、自らの信仰を顧みることが求められています。

そして12・13節は、24～27章において語られてきた黙示の最後です。「ユーフラテスからエジプトの大河まで」(12)とは、旧約時代の全世界のことです。13～23章で、各地の罪と裁きの予告が語られてきましたが、その全域が、主により打たれ、裁きがもたらされます。最後の審判においては例外はありません。

そうした中、神の民は、「ひとりひとり拾い集められ」ます。肉においてイスラエル、イスラエル民族だから、洗礼を受けキリスト者だから救われるのではありません。主なる神を信じ、主の御言葉にひれ伏している民が、主によって拾い集められ、主の救いに導かれます。

またその日には、罪を犯し、主により散らされていた者たちでも、自らの罪を悔い改め、主にひれ伏し、信仰を言い表す者に対する救いが宣言されます。

私たちは、異教の国日本において神の民キリスト者とされています｡神の民として、罪が赦されました。そして、主による救いに感謝し、喜びをもって主に仕えていくことが求められています。

28～33章では、イスラエルの民の不信に対する神の裁きの宣告が行われていきます。

「災いだ」がキーワードとして上げられます(28:1,29:15,30:1,33:1)。この言葉は、イザヤ以後の預言書において、イスラエルに悔い改めを迫るときに用いられています。

罪の指摘は、最初エフライム（＝北イスラエル王国）に求められます。北イスラエルの首都サマリヤは、文字通り肥えた谷にあり、その真中の小高い丘に建てられた町は冠のように見えたと言われています。

そうした麗しき輝きある光景にあるサマリアが、酒の酔いによりよろめき、主の裁きに遭います（1－4)。主は北イスラエル王国の人々が何を行ってきたかすべてをご存じです。そして彼らの行いの故に、アッシリアを用いて裁きを行われます。

しかし「残りの者」つまり、周囲の人々が罪に満ち､自らの道を歩む中にあっても、主なる神を信じ、主の御言葉に従って歩む者に対して、神の国が完成するとき、主からの恵み・祝福が与えられます。

主は王や裁判官等に、神ご自身が働きかけ、真の審判者として公義を正しく執行できるようにしてくださいます。また、外部から迫って来る敵に対して真剣に神を畏れ神の民として対抗する者には、必要な力となり助けを与えてくださいます(6)。

反逆と不信に満ちた指導者や行政者が治める乱れた社会の中、なおも神の支配と主権を信じ、神に信頼し続ける者に、主は恵みと祝福を約束してくださいます。

その中でも主に仕える祭司・預言者ら宗教的指導者に対して警告が語られます(7-8、参照：レビ10:9-11)。強い酒をたしなむことは禁じられており、飲酒に溺れることは危険な行為です。

イザヤは主からの警告として預言を語っていますが、彼らは預言者を嘲笑します。まじめくさってうるさく、堅苦しく、融通のきかないやつだ、というあざけりです。

そうした中、イザヤは真の預言者としての孤独を覚えながら、皮肉を込めて語ります。「どもる唇と異国の言葉」と思われるが、それでも神は、迫りつつあるアッシリヤの恐怖と混乱の中にいる指導者やその民に、真に信頼できる安らぎは神ご自身にのみあることを告げておられます。

しかしこの預言者の言葉を彼らは聞こうとしません。このとき、彼らは主によってつまずき倒れ、主の裁きに遭います（13)。

いつの時代も、神の言葉を語る伝道者・聖職者は、少なからず孤独を覚えます。それでもなお、神の言葉を語り続けることが求められており、神の言葉は空しく地に落ちることはありません（参照：イザヤ55:11)。

続けてイザヤは南ユダ王国エルサレムの住民たちに向かって、神から預かった啓示を預言として語ります（14～29)。エルサレムの住民にとって、サマリアの人たちは、自分たちから離れていった分派として蔑んでいました。そして自分たちこそが神に祝福された民であると自認していました。

そのため南ユダの人たちは、北イスラエルが滅びても、自分たちは滅びないと信じていました。そのことイザヤは皮肉を込めて「死と契約を結んだ」と語ります(15)。

この世の権力・金・力・軍事力は、究極的には信頼し得ないものであり、神ご自身が示されるご計画こそ信頼するに足るものです。このことはイエス・キリストの来臨により実現されます(16,参照マタイ21:42、マルコ12:10、ルカ20:17、使徒4:11、ローマ9:33、Ⅰペトロ2:6)。

すべての基準は主なる神にのみあります。主が定められた律法に正義があり、私たち人間は、行い・言葉・心の中のすべてが露わにされます（17)。そしてすべてを支配されている主なる神は、自然を用いて、裁きを行います。そしてユダの人々が結んだとする死との契約は破棄され、陰府との協定も実行されることがありません（18)。

ペラツィム山(21)、はサムエル下5:20、ギブオンはヨシュア10:10-11で言及されています。主なる神を信じるとき、どのような苦しい場面にあっても、主が守り、勝利を遂げてくださることを指し示しています。

農作業を行うとき、農夫たちは、その方法をわきまえています。同様に私たちは、すべては神の御手の業であることをわきまえ、神の審判を真剣に受け止めるべきであると、警告的に預言を行われます(23-29)。

神の御言葉を侮ってはなりません。主の審判は、私たちの思い通りにではなく、主の義・聖・真実に基づいて行われます。自分勝手に御言葉を判断することなく、主の御言葉に聞き従うことが求められています。

イザヤ28～33章では、イスラエルの民の不信に対する神の裁きの宣告が行われ「災いだ」と語り始めます。29:1の「ああ」も同じ単語です。

そして29章では「アリエル」に対して語ります。「祭壇の炉」(2)と訳されている言葉ですが、「ダビデが陣を張った都よ」(1)と呼びかけていることから、都エルサレムのことを暗示していると言われています。

主イエスは「エルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、自分に遣わされた人々を石で打ち殺す者よ、めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。見よ、お前たちの家は見捨てられる。」(ルカ13:34-35a) と語り、イスラエル人の罪を指摘し、十字架を預言されます。主イエスはこのイザヤの預言を指し示しているかと思います。

イザヤは、「年毎に、祭りの数を増し、巡り来たらせよ」(1)と語ります。毎年のようにアッシリアがエルサレムに攻めてくることを意味しています。このとき主は、「そのとき、わたしはアリエルを苦しめる」と語ります(2)。エルサレムが裁きを受けるのは、主による裁きです。主はアッシリアを用いて、そして後はバビロンを用いて、エルサレムは滅びの道を歩み、苦しみます。このときのエルサレムの裁きは、主なる神の御業です。そのため、エルサレムを攻めてきた人々、つまりアッシリアもバビロンも、瞬く間に消えていきます。

「群がる外敵は砂塵のようになり
　群がる暴虐の者らは
　吹き去られるもみ殻のようになる。
　そのことは突然、瞬く間に起こる」(5)。

「アリエルを群がって攻撃する国はすべて
　夢か夜の幻のようになる。
　彼女を攻撃し、取り囲み
　苦しめる者はすべて」(7)。

「シオンの山に群がって戦いを挑んだ国は
　すべてこのようになる」(8)。

このとき主はイスラエルの民の目をふさがれ、見えなくされます(9)。本来、主によって歩むべき道を指し示す預言者も、目が閉ざされ、偽預言者と化します(10)。

そしてエルサレムの人たちが、主による裁きに遭う理由を語ります(13)。

「この民は、口でわたしに近づき
　唇でわたしを敬うが
　心はわたしから遠く離れている。
　彼らがわたしを畏れ敬うとしても
　それは人間の戒めを覚え込んだからだ」。

口だけの信仰、形だけ整える礼拝です。主が求めておられるのは、主への真の信仰を告白し、また礼拝生活を送ることです。そのため、賢者と呼ばれる者も、滅びの道を歩み、聡明な者の分別も隠されます。

さて預言者は改めて「災いだ」と語ります(15)。主なる神に隠れて行動し、「誰にも気づかれるはずがない」と思っていることであっても、主なる神の御前には、何一つ隠すことはできません(15)。主なる神は創造主であり、私たち人間は、主による被造物です。主なる神が人間を創ったのであり、人間の側が、「彼(神)には分別がない」と、言うことなどできません(16)。

エルサレムの民は、目がふさがれ、形だけの信仰となり、主に隠れて行動していました。それ故に、主の裁きを免れることができません。しかし「しばらくの時がたてば」(17)、「その日」(18)には、変化が訪れます。「耳が聞こえない者が、書物に書かれている言葉を聞き取り、盲人の目が暗黒と闇を解かれ、見えるようになると」(18)。主なる神が、聖霊を通して働きかけてくださいます。そしてイスラエルの民は、信仰を取り戻し、イスラエルの聖なる方、主なる神の故に喜び踊ります(19)。苦しみ、虐げから解放されるからです。

そして、主に逆らい続ける暴虐な者はうせ、不遜な者は滅び(20)、主の正義によって人々が生活を送り、健全で公正な司法制度が回復します(21)。

29章の初め、「エルサレム」とは呼ばず、「アリエル」と語られていたイスラエルの民が、ヤコブの家に生まれたアブラハムを贖われた主が、イスラエルの民を祝福してくださり、「あなたがたはアブラハムの子である」と宣言してくださいます。

そして、ヤコブを聖なる者として、イスラエルの神を畏るべき者とするように導いてくださいます。そして、主が語る御言葉により、歩むべき道が示され、また人の前で語ることにおいても、正しく語ることができるようにされていきます(24)。

イザヤ28～33章では、イスラエルの民の不信に対する神の裁きの宣告が行われていきます。30章も「災いだ」で語り始めます。

ここでは「背く子ら」に語り始めます。ここで彼らの背きは２つです。「謀を立てて、エジプトと盟約の杯を交わす」ことであり、それは同時に「主なる神に頼ることはなく、神に祈り求めることをしない」ことです。イザヤは、「こうして、罪に罪を重ねている」(1)と語ります。

アッシリアが迫ってきて、これから北イスラエル王国が滅ぼされ、南ユダ王国そしてエルサレムにも危機が迫ってこようとしているときのことです。彼らは、主なる神に祈り求めることをせず、エジプトに助けを求めます。人間的な計画を立てる努力はするけれども、神の御旨・神の導きを求めようとしない彼らの姿勢を、主は叱責します。

しかし、「エジプトの助けは空しくはかない」のです(7)。エジプトとの同盟は、無力で、まったく効力がありません。

そして主は、預言者イザヤにこの事実を書に書き記せと語ります(8～11)。彼らはもうイスラエルでもユダでもありません。「反逆の民」であり、「偽りの子ら」・「主の教えを聞こうとしない子ら」です(9)。「彼らは主なる神を信じている」と口では語りながらも、実態は、主の語られる預言の言葉に背を向け、聞こうとしません。

そのために、主なる神は彼らの裁きを宣告されます(12～14)。静かに主なる神の御言葉に聞き従い、立ち帰り、悔い改めを行っていれば救われたのだが、お前たちは罪を犯した。そのために主による裁きを免れることはありません。

それでもなお、主なる神はイスラエルが悔い改め、主なる神を信じることを願っています。

「それゆえ、主は恵みを与えようとして
　　あなたたちを待ち
　それゆえ、主は憐れみを与えようとして
　　立ち上がられる。
　　まことに、主は正義の神。
　　なんと幸いなことか、
　　すべて主を待ち望む人は」(18)。

「まことに、シオンの民、エルサレムに住む者よ」(19)。「シオン」とは「神の住まい」(詩9:12)、「聖なる山」(詩2:6)のことです。つまり、本来エルサレムは神の住まい、聖なる山であり、神の民が在する場所です。多くの者が、主から離れ、主を信じようとしませんが、その中にあって、主なる神を信じ、主の語られる御言葉に聞き従う者に対して、主は「もはや泣くことはない」、「必ず恵みを与えられる」とお語りくださいます(19)。

そして「わが主はあなたたちに
　災いのパンと苦しみの水を与えられた。
　あなたを導かれる方は
　　もはや隠れておられることはなく
　あなたの目は常に
　　あなたを導かれる方を見る」(20)、

と語り、イスラエルの民を霊的に祝福し、すべての苦しみを取りのけてくださいます。

そして、生活においても祝福が満たされることが宣言されます(22～25)。「殺戮の日」つまり主の裁きにおいても、イスラエルの民は守られ、祝福が約束されます(25)。

「主が民の傷を包み
　重い打ち傷をいやしてくださいます」(26)。

そして預言者は、イスラエルに攻めかかってくるアッシリアに対して語ります。繰り返して語っていることですが、彼らは主に用いられ、北イスラエルを滅ぼすこととなりますが、彼らの罪が赦されているわけではありません。彼らもまた、主の御前にあって裁きを受けます(27～28)。

その上で、「あなたたちは祭りを
　　祝う夜のように歌い
　笛に合わせて進む者のように心楽しみ
　主の山に来て
　イスラエルの岩なる神にまみえる。
　主は威厳ある声を聞かせ
　荒れ狂う怒り、焼き尽くす火の炎
　打ちつける雨と石のような雹と共に
　御腕を振り下ろし、それを示される」(29～30)。神に信頼する民には祝福を与え、ご自身の権威と力を啓示されます。

私たち人間は、どうしても目に見えるものを恐れてしまいますがそうであってはなりません。私たちは、目の前に迫ってくる力を持っている国・権力者ではなく、主なる神こそがより頼むべき方であることを覚え、今日の御言葉より聴かなければなりません。

イザヤ28～33章では、イスラエルの民の不信に対する神の裁きの宣告が行われていきます。31章も「災いだ」で語り始めます。

31章では、30章と同様にエジプトに助けを求めるイスラエルの民について語られています。エジプトは、馬があり、戦車の数が多く、騎兵の数もおびただしいことを頼りとしています。そのため、イスラエルの民は、彼らに頼り、盟約の杯をかわします。

このときイスラエルの民は、主なる神を仰ごうとはしません。

31章では、イスラエルの民が仰ぐこともしない主なる神がどのようなお方であるか、語られていきます。「主は知恵に富む方」(2)であり、主は奥深いお方です。また主は「災い」言い換えれば「裁き」を行う力を持っておられます。また、主は「御言葉を無に帰されない」つまり、約束されたことは、守ってくださるお方です。

一方、イスラエルの民が助けを求めるエジプトは、軍事力は強力であり、強国アッシリアやバビロンに対して対抗する上では助けとなるかも知れませんが、「人であって、神ではありません」(3)。

また「その馬は肉なるものにすぎず、霊ではない」(3)と語り、「肉」と「霊」を対比して語ります。肉においては目に見えるものしか見ることができません。一方、霊である主なる神は、私たちのすべて、そして心の中もご存じです。表面的な行動により、人を裁いたりすることはなく、心の中、信仰をご覧になって、人を裁かれます。

力をもって世界を支配しようとするエジプトも、エジプトに助けを求めるイスラエルも、主によって裁きを受け滅びます(3)。

「万軍の主は、そのように
　シオンの山とその丘の上に降って戦われる。
　翼を広げた鳥のように
　万軍の主はエルサレムの上にあって守られる。
　これを守り、助け、かばって救われる」。

ウェストミンスター大教理問答問63は、上記の聖句を証拠聖句とします。

問６３　目に見える教会の特別な特権は、何ですか。

答　目に見える教会は、〔第一に〕神の特別な配慮と統治のもとにある、また〔第二に〕あらゆる敵の反対にもかかわらず、いつの時代にも保護され、保持される、さらに〔第三に〕聖徒の交わり、救いの通常の手段、キリストによるその全会員への恵みの提供―それは、キリストを信ずる者はだれでも救われることを証しし、キリストに来る者はだれ一人排除しない福音の宣教においてなされます―を享受する、といったた特権をもっています。

神さまは、教会に来る者、教会に繋がっている者を、特別の配慮と統治のものに置かれ、お守りくださいます。

だからこそ、主なる神は、イスラエルの民に対して語られます。「イスラエルの人々よ、あなたたちが背き続けてきた方に立ち帰れ」と(6)。私たち人間は、目に見えるものを恐れます。しかし私たちは、霊においてすべてを統治し、すべてを支配しておられる主なる神の御前に生きています。だからこそ、主なる神を信じ、主なる神にすべてを委ねて祈れば良いのです。このとき主は、私たちをお守りくださいます。そして神の国に導いてくださいます。

ここで「その日」が出てきます(7)。キリストが再臨し、神の国が完成するとき、最後の審判が行われ、人の力に頼る者は、同時に自分の手で造った偶像に頼るものであり、それらの偶像を、主はすべて打ち砕き、勝利を遂げられます。

強国であるエジプトを代表として語られてきましたが、今、イスラエルの目の前に迫っている恐怖であるアッシリアも同じであると、主は語られます(8)。

エジプト・アッシリア・バビロンの滅びは、別の強国によってもたらされるのではなく、主なる神によって行われます。それは時として、別の国を主が用いられるかもしれませんが、主による裁きです(8)。

そして預言者は最後に語ります。

「主はシオンに火を
　エルサレムに炉を持っておられる」(9)。

神によって祝福されたエルサレムの町とシオンは、主を信じて歩むとき、主の守りに置かれます(4-5)が、イスラエルの民が、主に逆らい続けることにより、主はシオンやエルサレムであっても、例外なく滅ぼすことが宣言されます。主が求めておられるのは、イスラエル・シオン・エルサレムの民として生きることではなく、主なる神に寄りすがり、主を信じて生きることです。

イザヤ書28～33章では、イスラエルの民の不信に対する神の裁きが宣告され、「災いだ」で語り始めていました。

しかし32章は異なります。

「見よ、正義によって
一人の王が統治し
高官たちは、公平をもって支配する。」(1)

主なる神に従う王の登場が預言されます。具体的には、ヒゼキヤ王(BC715年即位)のことが語られています（参照：36～39章)。

しかし、イザヤの預言は、直近の具体的なことを預言することと同時に、「その日」で語られる終末と神の国の完成を見据えた預言です。そのため、ここで語られる一人の王は、神の御子イエス・キリストの預言であると、解釈して良いかと思います。

キリストは預言者・祭司・王として働かれます(ウェストミンスター小教理問23-26)。キリストの王としての職務は、私たちを治め、守ること、そしてサタン・罪・死に打ち勝ち、勝利を遂げることにおいて成し遂げられます（同問26)。本来、為政者はこの王の職務を主から託されているため、主の御言葉に聞き従うことが求められています。

イザヤは、この王が正義によって統治すると語ります。単に「義」と語るのではなく、「正義」と語るわけで、この「正義」は主なる神にしか存在しません。

私たち人間（国に立てられる為政者も含む）は、全的堕落に生まれた罪人です。そのため、主の御言葉に聴き、主の律法に従わなければ、義を民に示すことはできません。

主なる神であるキリストは、目の前にいる人のすべてを包み隠さずご存じです。つまり、私たちは、主の御前に、何も隠すことはできません。そればかりか、主は心の中もすべてご存じであり、明らかにされます。その結果、主を見上げ、主の御言葉に聴き、主に従うとき、その人の語る舌をも主は軽やかにしてくださり、主を証しする者となります（3-4)。

その一方、真の王であるキリストが、世界を統治するとき、愚かな者(5)、つまり主を信じることなく主の御言葉に従わない者が、高貴な人・王となることはなくなり、罪・悪の支配は終わります。彼らは今なお世界を支配していますが、一人の王としてのメシア・キリストが再臨されることにより、彼らの支配は終わります。

こうした世が、キリストが再臨し、神の国が完成したときに実現します。

そして預言者イザヤは「憂いなき女たちよ、起きて、わが声を聞け」と語ります(9)。突然「女たち」と出てきます。しかし、ヘブライ語では、「エルサレム」は女性名詞であり、「彼女」と語られます。そのことを知っているならば、ここは南ユダ王国、エルサレムの人々に語りかけられていることが分かります。

「安んじている女たちよ
　一年余りの時を経て
　お前たちは慌てふためく」(10)。

「一年余り」と、エルサレムに対する裁きが切迫していることを伝えます。実際にアッシリアによって滅ぼされるのは、北イスラエルだけであり、南ユダ王国とエルサレムが滅ぼされるのは、バビロンによってと、もうしばらく先になります。

しかし「自分たちはイスラエルだから、エルサレムに住んでいるから大丈夫だ」との過信を捨てるように迫っています。その時を迎えて、初めて慌てふためくようであってはなりません(11)。

15節以降、キリストが再臨され、神の国が完成した状況が語られています。

悪・不正・虐げは、すべて主の裁きにより取り除かれます。そして主の恵みの内に神の国に導かれた者たちは、公平であり、主の正義が満ちています。だからこそ、ここには争いはなく、真の平和がもたらされ、互いに疑いを持つこともなく、安らぎと信頼がもたらされます。主を信じる者に与えられる祝福は、この神の国に完成します。

「わが民は平和の住みか、安らかな宿
　憂いなき休息の場所に住まう」(18)。

これこそが神の国であり、私たちが形成する教会のあるべき姿がここにあります。教会が休息の場・安らぎの場であることが求められます。

こうした安らぎは、時代の差・育ってきた教会によっても異なります。だからこそ私たちは、自分たちが求めてきた教会像だけをすべての人に求めることなく、若い人たち・新しい人たちが、何を求めて安らぎが与えられ休息の場となるのかを、共に考え、形成していくことが求められています。

イザヤ28～33章では、イスラエルの民の不信に対する神の裁きの宣告が行われています。今日はその最後です。

32章では、正しい王の支配・メシアであるキリストの支配の時、神の国の完成の時が与えられることを語ってきました。それを受け、33章も「災いだ」という言葉でイザヤは語り始めます。ここではもうイスラエルやユダのことを語ることはなく、アッシリアのことを語っています。

今、人々を虐げる者は、主による裁きが待っています。そして、略奪され・欺かれ・時に虐げられている人々の苦しみを、主はそのすべてを知っておられます。そして預言者イザヤは語ります。

「主よ、我らを憐れんでください
　我々はあなたを待ち望みます
　朝ごとに、我らの腕となり
　苦難のとき、我らの救いとなってください」(2)。

ここで、イザヤは「我ら」と語ります。イザヤが預言を語っても、イスラエルの民は聞こうとしませんでした。そのために、主の裁きがもたらされようとしています。しかしイザヤは次ように語っていました。

「その日には、
　万軍の主が民の残りの者にとって
　麗しい冠、輝く花輪となられる。
　裁きの座に着く者には、裁きの霊となり
　敵の攻撃を城門で押し返す者には
　雄々しい力となられる」(28:5-6)。

最後の審判と神の国が到来する「その日」に、イスラエルとユダの「残りの者」が主による救いに導かれます。つまり「我ら」(33:2)は、イザヤの言葉に耳を傾け、主の御言葉に聞き従うイスラエル・ユダの民であって、イスラエルの民全体のことではありません。主の預言であるイザヤの言葉に耳を傾けない者は、すでに語られてきたとおり、主の裁きを逃れることはできません。

また力を誇る国々が主の裁きを逃れることができません。そしてアッシリアやバビロンも滅びていきます。このとき主の御言葉に聞き従う神の民のみが残されます。

そして主の御力が、神の民に示されます。

「主は、はるかに高い天に住まわれ
　シオンに正義と恵みの業を満たされる。
　主はあなたの時を堅く支えられる
　知恵と知識は救いを豊かに与える
　主を畏れることは宝である」(5-6)。

しかし、「その日」が到来するまでの間、イスラエルの民は、苦しみの中に置かれます。神の都エルサレムもエルサレムと呼ばれることなく「アリエル」と呼ばれ、人々の信仰は荒廃し、街も乱れます(8)。

同様に「レバノン＝いつも青々していることの象徴」、「シャロン＝美しさの象徴」、「バシャン＝肥沃の象徴」、「カルメル＝よく手入れされた果樹園の象徴」の町々が、辱められ、荒廃していきます(9)。

そして「その日」が来るまでに、主に逆らい行く人々の罪が明らかにされ、彼らは自らの罪の故に主に裁かれていきます(10)。

この間、神に従い行く残りの民は、苦しみを耐えなければなりません(13・14)。そして主の御言葉に聞き従うことにより、様々な誘惑に陥ることなく信仰を貫き、正義を貫いた者たちを、主が覚えておられることをはっきりとお語りくださいます(15)。

そして主は彼らを祝福してくださいます。

16「このような人は、高い所に住む
　その高い塔は堅固な岩
　彼の糧は備えられ、水は絶えることがない」。

そして神による救いにより、神の国に入れられた神の民は、王である主なる神を仰ぎ見ます(17)。この神の国には、かつて恐怖に陥れた敵たち・傲慢な民たちは、もう姿を見ることはありません。そのため、もう脅えることはありません(18-19)。そして「アリエル」と呼ばれていたエルサレムは、「神の都シオン」と呼ばれます(20-21)。

そして神の国では、主なる神の王としての支配、罪の裁きと神の民の救いは、すべてが正しく行われます(22)。

神の国は、神に敵対する者たちが滅ぼされるだけではなく、罪もサタンも除去されるため、罪の結果にあった苦しみや病もなくなります(24)。そして神に従い続けた神の民は、キリストの十字架の御業の故に罪が贖われ、罪が赦されます。

私たちは、主がお与えくださる神の国を目指して信仰生活を歩んでいます。終末の時代、まだ様々な艱難が待ち受けているかと思いますが、神の国の希望をもって、主の御言葉に聞き従い、神に対してひれ伏して礼拝を献げ、隣人に対して愛と遜りとをもって歩み続けることが求められています。

イザヤ書34章・35章では世界に対する裁きと救いの恵みについて語られていきます。

イザヤは「もろもろの国よ」と語り始めます(1)。「すべての国々・民たちよ」との語りかけです。28～33章に見てきたように、イスラエルであっても、主なる神から離れ、権力になびいたり、偶像に頼ったりすることにより、主の裁きを免れることはありません。それと同様に、コインの表裏にあるのが、イスラエル以外の諸国の民であっても、主を信じる者に救いがあります。

そのためイスラエル・異邦人如何に関わらず、クリスチャンであろうとなかろうと、主なる神の御言葉に聴くことが求められます。主なる神が、全地万物を創造し、また今も、すべてを治めておられるからです。

「神やキリストなど自分とは関係がない」と語る人々に向かって、主は憤りを発しておられす。その怒りがすべての民に向かい、主は絶滅することを定められます(2)。

「絶滅」は、例外なくすべてが滅ぼされることですが、ここでは、「絶滅に定められた民を裁く」と語ります(5)。

イスラエルであっても主に逆らい続ける者には主の裁きがもたらされます。異邦人であっても、主を信じ、主の御言葉に聞き従う者に対する救いが与えられます。つまり、主の御言葉に聴こうとはせず、主の御言葉に逆らい続けるすべての者が「絶滅に定められた民」となります。

主なる神は、救われる民を選んでおられますが、主の御言葉に逆らい続ける民に対する裁きをも決めておられます。

そしてここからエドムが続けて語られます(5,6,9)。これはイスラエルに対するエドムです。主は、ヤコブにイスラエルという名をお与えくださいました(創世記32:29)。

そして主は、ヤコブとエサウが生まれるとき、両者が争い、兄が弟に仕えるようになることを預言されました（創世記25:23)。

そしてエサウはエドムと呼ばれるようになります(創世記25:30)。そしてエドムは神の民イスラエルに敵対する存在となります。ここでは、厳密な意味でのエドム人のことを語るのではなく、神による救いに与るイスラエルに対して、主の裁きに遭う民として「エドム」と語られています。

主に逆らい行くエドムに対して、主の裁きは徹底的に行われていきます(5-7)。

「ポツラ」（要塞の意）(6)とはエドムの重要な要塞の都市です。

そして９節では、「エドムの涸れ谷は変わってピッチとなる」と語ります。「ピッチ」とは、アスファルトのようなもので原油・石油タールなどを蒸留した後にできる黒色の残留物です（参照：出エジプト2:3)。では

「涸れ谷」とは、水がまったくなく、なにも燃えるものがない状態ですが、そこがアスファルトのようなもので、燃えやすい場に変わり、主の裁きの炎で燃え上がると語っています。

「まことに、主は報復の日を定められる
　シオンにかかわる争いを
　　正すための年を」(8)

裁きは終末のときであり、キリストが再臨する最後の審判によって頂点を迎え、その後、神の民が救われ神の国が完成します。

主なる神は、この報復の日・神の国の完成のときを定めておられます。だからこそ、この日まで、罪を悔い改め、主を信じ、主の御言葉に聞き従えと、主は語っておられます。主の御言葉に聞き従わない者に対する神による裁きは、この日に徹底的に行われます。そしてこの日、神を信じ、御言葉に聴き従っているキリスト者は、救いに入れられます。

「主の書に尋ね求め、読んでみよ。
　これらのものに、
　　ひとつも欠けるものはない。
　雌も雄も、
　　それぞれ対を見いださぬことはない。
　それは、主の口が命じ
　主の霊が集めたものだからである」(16)。

私たちに与えられた御言葉である旧・新約聖書には、主なる神について、私たち人間の罪について、神による救いについてのすべてが提示されています。創造主である神が、被造物である私たち人間にお語り下さった言葉に、すべての者が聴き従うことが求められています。

私たちは、異邦人・エドムに属する者でしたが、主の御言葉が与えられ、聖霊の働きにより御言葉を理解させていただき、私たちは主を信じ、霊的なイスラエルに属する者とされました。主の救いに感謝して、御言葉に聴き従っていきたいものです。

【祈祷会奨励】「主の栄光と神の輝きを見るとき」イザヤ書35章　ウ小教理38(7/24)

イザヤ書34章と35章では世界に対する裁きと救いの恵みについて語られています。主による最後の審判は、主に逆らい続けた者はすべて主の裁きに遭い死と滅びを免れ得ませんが、主がお語りになる御言葉・主が遣わした預言者の言葉に耳を傾け、主を信じる者に罪の赦しと救いが与えられます。

この35章では、神の国の完成のときのことが語られています。新約聖書では、ヨハネ黙示録21章・22章の新天新地の場面と重なります。つまりそのときが来ると、ただ神の民が救われるだけではなく、新天新地、つまりすべてが新たに作り替えられます。

ですから、荒れ野・荒れ地であっても喜び踊り、大いに喜びの声があがります(1･2)。

「荒れ野よ、荒れ地よ、喜び躍れ
　砂漠よ、喜び、花を咲かせよ
　野ばらの花を一面に咲かせよ。
　花を咲かせ
　大いに喜んで、声をあげよ」(1,2a)。

33:9では、主の民イスラエルであっても、主の裁きを免れ得ないことを語っていました。「レバノン＝いつも青々していることの象徴」、「シャロン＝美しさの象徴」、「バシャン＝肥沃の象徴」、「カルメル＝よく手入れされた果樹園の象徴」の町々が、辱められ、荒れ地となり、荒廃する状況を語っていた訳ですが、それらが本来の栄光・主からの輝きを取り戻します(2)。

「砂漠はレバノンの栄光を与えられ
　カルメルとシャロンの輝きに飾られる。
　人々は主の栄光と我らの神の輝きを見る」。

現在、キリスト者の歩みは、非常に小さなものであり、無力に感じてしまいます。預言者イザヤも然りです。しかし主はこのようにお語りくださいます。

「弱った手に力を込め
　よろめく膝を強くせよ。
　心おののく人々に言え」(3,4a)。

目の前のことだけを見ているならば、キリスト者であることに幻滅を覚える人もいるかも知れません。しかし、主なる神がお示しくださる神の国をはっきりと見据えるとき、今、苦しく・弱さを覚えていたとしても、なおも希望をもって、前を向いて歩み続けることができます。主は、キリストの復活と最後の審判に基づく神の民の救い・永遠の生命をお示しくださっています。

また、主がお与えくださる神の国に対して、私たちがどのようなイメージを持っているのかが問われてきます。神の国について具体的でなくなれば、信仰が概念的になってしまう恐れがあります。

しかしイザヤは、神の国に入るときの状況を具体的に私たちに語ります。

「そのとき、見えない人の目が開き
　聞こえない人の耳が開く。そのとき
　歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。
　口の利けなかった人が喜び歌う」(5,6)。

つまり体の不自由が解消されます。健康な体・理想的な体（栄光化された状態）で復活することが語られているのではないでしょうか。復活された主イエスに最初弟子は気がつきませんでした。しかしすべてを理解したとき、復活の主イエスと認めることができました（参照：ルカ24章　エマオの途上)。

現在では世界の自然が乱れています。過酷な夏・猛暑を迎えています。こうしたことも、人間が自然破壊をした結果です。

しかし神の国が完成したとき、自然も、祝福された状態になります(6,7)。まさに天地創造のときのような状態が回復します。

そして主に贖われた神の民が、主を礼拝するために、主の御前に集められます(8-9)。ここには、罪に汚れた者・愚か者もいません。力をもって支配する獅子・獣のような者たちも襲いかかることはありません。主に敵対するすべての者たちは、主による裁きがもたらされたからです。

そして「とこしえの喜び」としての御子が立ち、キリストの御前にあって、私たち神の民は、キリストに従います(10)。

ここで主を讃美する礼拝が行われます（ヨハネ黙示録7:9～12)。「見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、大声でこう叫んだ」…。

「アーメン。賛美、栄光、知恵、感謝、
　誉れ、力、威力が、世々限りなく
　わたしたちの神にありますように、
　　アーメン。」

主がお与えくださる神の国に希望をもって、今、地上の歩みを続けていくことが求められています。

イザヤ書はしばらく、黙示、つまり最後の審判と神の国の完成について語ってきました。しかし36～38章では、ユダの王ヒゼキヤが出てきます（参照：列王記下18～20章、歴代誌下29～32章）。ヒゼキヤ王の治世第14年は、BC701年頃です(1)。アッシリアは北イスラエル王国を滅ぼし、さらに南ユダ王国をも滅ぼそうとして、押し迫っています。

このような歴史の中で語られているとき、登場人物を確認する必要があります。

アッシリアの王はセンナケリブ(2)であり、ラブ・シャケが軍隊の長です。このラブ・シャケがヒゼキヤ王のいるエルサレムに遣わされます(2)。そしてこの36章は、ラブ・シャケの言葉が大半を占めています（4～10節、12節、13～20節）。

このとき南ユダ王国は、ヒゼキヤの子・宮廷長エルヤキム、書記官シェブナ、アサフの子・補佐官ヨアが対応にあたります(3)。

ラブ・シャケは、アッシリアの王センナケリブの言葉を、ユダの王ヒゼキヤに伝える形で語ります。ヒゼキヤ王は、直前のアハズ王が行っていた偶像崇拝を止め、主なる神のみに依り頼み、主なる神のみを礼拝して、国を立て直そうとしています(7)。

偶像崇拝を止め､主なる神を信じるとき、目に見えるものはありません。そのため、偶像を信じている人たちから見ると、主を信じ、主に祈りつつ信仰生活を送っている神の民のことが頼りなく見えるのではないでしょうか。だからこそ、ラブ・シャケは、力で勝負しようと持ちかけます(8-10)。

彼は、「なぜこんな頼りのないものに頼っているのか。ただ舌先だけの言葉が戦略であり、戦力であるのかとわたしは言う。今お前は誰を頼みにしてわたしに刃向かうのか」と語ります(4b～5)。この言葉は、いつの時代でも神の民・私たちキリスト者に対して突きつけられる問いかけです。私たちが信じている主なる神は、目で見えません。像を持ちません。そのため主を信じる者の姿は、無力に見えます。

しかし神は、無限(空間)・永遠(時間)・不変(変化)の霊です（ウェストミンスター小教理問４）。力を有する神です。列王記上18章では、預言者エリヤがバアルの預言者と対決することが語られています。バアルの預言者450人、アシェラの預言者400人いましたが、彼らは準備された祭壇の上にある生け贄の雄牛に火を付けようとしますが、まったく何の変化も生じませんでした。

しかし、預言者エリヤは、同じように祭壇に雄牛を準備し、そして主なる神に祈ります(18:36～37)。「すると、主の火が降って、焼き尽くす献げ物と薪、石、塵を焼き、溝にあった水をもなめ尽くし」ます(38)。

主を信じて祈るとき、主は私たちの祈りに応えてくださいます。祈りに力があるのは、主なる神を信じる信仰から生じます。少しでも主なる神を疑ったり、主を試したりするとき、純粋な祈りとはなりません。

このとき､ユダのエルヤキム､シェブナ､ヨアは、ラブ・シャケに、アラム語で語り合うことを提案します。つまり、一般民衆に不要なことを聞かせたくないとの思いがあったと言って良いかと思います(11)。

しかしこのときラブ・シャケは、すべてのユダの人々に語りかけると語ります(12)。ラブ・シャケの思いは次の言葉に表れています。「ヒゼキヤにだまされるな。彼はお前たちを救い出すことはできない。ヒゼキヤは、お前たちに、主が必ず我々を救い出してくださる。決してこの都がアッシリア王の手に渡されることはない、と言って主に依り頼ませようとするが、そうさせてはならない」(14-15)。つまりラブ・シャケは軍隊の力で脅し、そして民衆を分断させようとします。信仰が弱ければ、力に屈してしまいます。人間の弱さがここにあります。

ラブ・シャケの執拗な言葉の攻撃がありましたが、押し黙ってひと言も答えませんでした(21)。一人ひとりの信仰は弱さを持っています。しかし教会に繋がると、主が遣わされた預言者が共にいます。ヒゼキヤ王は、一人ひとりの信仰の弱さを知っているからこそ、信仰の揺さぶりがあるとき、黙っておくように求めたのです。そして、預言者イザヤに聞きます(37章)。

私たちの人生においても、様々な信仰の揺さぶりがあります。このとき、自分で解決しようとするのではなく、主に祈り、さらには教会(牧師)に相談し、解決を求めることが必要です。主が預言者の働き人として牧師を立ててくださっています。一人よがりな信仰に陥ることなく、主なる神と教会に解決を求める信仰生活を送りましょう。

ユダの王ヒゼキヤの時代に、アッシリアが責めてきて、そして降伏を迫っています。

そしてアッシリアの王は「ヒゼキヤにだまされるな。…主に依り頼ませようとするが、そうさせてはならない。…わたしと和を結び、降伏せよ」と迫ります(36:13b～16)。

このことを聞いたヒゼキヤ王の使者たち３名は、ヒゼキヤ王にこの言葉を伝えます。

このときヒゼキヤ王は衣を裂き、粗布を身にまとって主の神殿に行き、家臣たちを預言者イザヤのもとに遣わします(1-2)。ヒゼキヤ王は自らで判断し解決を図ることなく、主にすべてを委ねます。そして３人の使者はイザヤに現状の苦しみを訴えます(3)。

そしてアッシリア王の罵り(ののしり)は、ユダの王ヒゼキヤとユダ国民に対してばかりか、「主なる神には力がなく、何もできない」と生ける主なる神に対する冒涜です。だからこそ彼らに対する裁きを行うようにとの切なる祈りが献げられます(4)。

このとき、主なる神は預言者イザヤを通してユダの王ヒゼキヤに語ります。「目の前にある恐怖に対して恐れることはない」と(6-7)。主なる神が力ある神であること、すべてを滅ぼす力を持っておられることを、私たちは忘れてはなりません。

アッシリアのラブ・シャケは、ヒゼキヤ王に対して、アッシリアの王の言葉、あざけりの手紙を送ってきます(8-13)。力によって支配しようとする人々は、繰り返し、執拗に脅してきます。反抗しても無駄であることを思い知らせ、諦めさせるためです。

しかしユダの王ヒゼキヤは、主の神殿に上り、主の御前に祈りを献げます(16-20)。私たちの信じている主なる神は、天地万物を創造されたお方です。今も生きて働かれ、私たちの祈りを聞き、またすべてを見届けておられるお方です。すべての支配者であり、力ある主なる神を信じ、委ね、祈りを献げるとき、主は応えてくださいます。

ヒゼキヤの祈りに対する神の応答が、語られます。主なる神は、私たちのすべてをご存じです。すべての行い、すべての口から発する言葉、怒り・震えといった感情の伴う心の中をもです。主の御前にあって、私たちは何も隠すことはできません(28)。

そして主なる神は、ユダとイスラエルを用いて、アッシリアを裁かれます(22)。

主なる神は、出エジプトにおいて、カナンに入るために、イスラエルの民に力をお与えくださったように、アッシリアを主の裁きにより滅ぼすことにおいても、直接・間接的にイスラエルをお用いになります。

主なる神は、主に逆らう者に対する滅びを定めておられます。そして、主を信じる神の民に救いを実現してくださいます(26)。ソドムとゴモラがそうであったように、主の裁きは徹底的・完全に行われます。

その上で主なる神は、ユダに対して主の御計画を明らかにされます(30-32)。

今、ユダはアッシリアに責められ、まさに国が滅びる寸前に置かれています。しかし主なる神はユダと共にいてくださいます。最初の年（今年）は、落ち穂を拾って食べるように、荒れた地に残っている僅かな食料を食いつなぐこと、そして翌年は、自然の力によって生えてきたものを食べることにより生き延びます。そして３年目に、自分たちで種を蒔いて刈り入れることができるぶどう畑が与えられます(30)。

そしてユダの家の中で難を免れ、残った者たちは再び根を下ろし、上には実を結びます(31)。主は短期的な直近のことを約束されるだけではなく、中期的・長期的な未来についても約束してくださいます。

「残りの民」という表現は、旧約聖書において繰り返し語られます。彼らは、現実の戦いの中、生命が守られ生き延びる人たちです。それは同時に、主を信じ、主の御言葉に聴き従うことにより、主の裁きを免れた人たちです。この残った者たちにより、イスラエルは継承されます。

「シオンの山から、難を免れた者が現れ出る」(32)。「シオンの山」つまり主なる神がメシアを遣わすことを預言しています。イスラエルが滅ぼし尽くされることなく、残りの民が残されるのは、メシアであるイエス・キリストのためです。

主は感情を持たない無機質な神ではありません。罵りに対する憤りをもって罪人を裁き、神の民を救い、メシアによる救いを完成させる熱情を持っておられます(32)。

今に生きる私たちも、この熱情の神が、私たち一人ひとりに働きかけてくださいます。艱難な道ですが、主を信じ、主にすべてを委ねて祈りつつ、歩んで行きましょう。

主なる神は、預言者イザヤを通して、ヒゼキヤ王の死が近いことを告げます(1)。

ヒゼキヤ王は主による死の宣告を拒否し、さらに命をいただく祈りを行います。自らの信仰を誇る傲慢さすら感じます(3)。

しかし主はヒゼキヤの祈りを聞き届けてくださり、寿命を15年間延長させてくださいます(5)。ここに主なる神の愛を感じます。主は御自身の計画を遂行されます。しかし、私たち人間の意志を無視して、計画を実行されるお方ではありません。つまり主は私たちの思いをもお聞きくださるお方です。

主は、主の被造物である私たち人間にも、自由意志を与え、主に祈り求める自由をお与えくださっています。ですからこのヒゼキヤのように、主の当初の計画とは異なったことを、主が受け入れ、聞き入れてくださることもあります。私たちは、主が祈りを聞き届けてくださることを信じて祈ることが大切です。

このとき主なる神は、日時計を十度後戻りさせることを宣言されます(8)。並行箇所である列王記下20:8～11を見ると、ヒゼキヤは、日時計を十度進ませるか、十度戻すかの選択が求められました。こうした選択が求められるのは、ダビデ王から繋がるユダの王の特権です。日時計を進ませるとは、時代を前に進めることです。一方、影を十度戻すのは、時代を元に戻すことです。

つまりヒゼキヤが日時計を十度戻すことを選択したのは、イスラエルに対して罪の悔い改めと主への信仰を求めていた神ですから、ヒゼキヤを代表としてイスラエルの民が罪を悔い改め、主への信仰を告白するときを、ヒゼキヤが求めたと言うことです。

主は、主に従い行くヒゼキヤの信仰により、ヒゼキヤの時代には、アッシリアからはイスラエルを救い出すことを約束してくださいます(6)。しかし同時に、ヒゼキヤの息子の時代に、バビロンにおいて滅ぼされ、連れて行かれることを予告します(39章)。

つまり主はヒゼキヤの祈りを聞き、15年間の猶予をお与えくださいました。しかし、イスラエルの罪に対する悔い改めは不十分であり、次の世代には改めて堕落し、主の裁きに遭うことを予告されます。

そうした中、主によりヒゼキヤの病気が癒やされます。このときヒゼキヤは、賛美を献げます。しかしこのときの祈りは、感謝・喜びの賛美とは言えません。10～15節は、不当な死に対する訴えのように聞こえます。「あなたはわたしの息の根を止めようとされる」と語りかけます(12・13)。主により、命が奪われようとしているとの不当性を訴えているようです。

しかしヒゼキヤは、死が罪に対する刑罰であり、主の怒りの結果であることを受け入れます。そしてヒゼキヤは、自らの死を前にして、主の怒りの結果、主から離され、主の裁き・陰府が迫ってきています。

主を信じ、主の御言葉に聴き従うヒゼキヤにとって、主なる神が味方であり、主と共に生き続けることによる希望を求める祈りとなっていきます(14)。

「どうかわたしの保証人となってください」

そして感謝の祈りとなります(16)。

当初、ヒゼキヤは嘆いていましたが、ここにきて、主と共にある生命、霊における救いに生きることの喜びへと変わっていきます。ヒゼキヤの祈りを主が聞き入れてくださったことからくる信仰の表れです。

ヒゼキヤは死の恐怖を体験することにより、主から与えられた生命・神の国に与えられる平和が示されます(17)。そして主こそが、滅びに陥らないように守ってくださり、自らの罪すらも贖ってくださることが示されました。つまりヒゼキヤに与えられた死の恐怖は、ヒゼキヤの信仰が養われ、さらに主に従った統治をするために必要なものであったのです。

陰府に下り・主の裁きに遭うのは、主の恵みに感謝することなく、主を讃美しない結果、つまり不信仰の罪です(18)。命ある者、主により救われ天国にある永遠の生命に与る者は、救いにある感謝と喜びをもって、主を証しし、主の神殿において主の御前にあって、主を礼拝します(19-20)。

ヒゼキヤに対する死の宣告とヒゼキヤの祈りが、突如語られているように思いましたが、ヒゼキヤの信仰の養いのため、またイスラエルの罪の悔い改めのために、必要なことがここで語られていたのです。

私たちにも突如として試練が迫り、信仰が試されます。主はこうした試練により、私たちの信仰を養い、神の子として神の御国に導いてくださいます。

イザヤ書は66章ありますが、今日の39章は、前半の最後の章となります。

さて南ユダの王ヒゼキヤは、主から死の宣告を受けましたが、主に懇願することにより、主は15年間延命させてくださいました。ヒゼキヤは、延命を純粋に喜んでいたことかと思います。ここにふっと心の緩みがあります。心に緩みがあり、誘惑に対して信仰の武具を身につけていないとき、サタンはつけ込んできます。

それが、バビロンの王がヒゼキヤに手紙と贈り物を贈ってくることにより到来します。病気の回復を共に喜ぼうとします。ヒゼキヤはバビロンからの使者を歓迎します。そしてヒゼキヤは、すべての財宝、すべての武器を見せ、バビロンに伝えました(2)。

ユダの国力・軍事力のすべてをバビロンの使者に見せることにより、国に危機が迫ってきます。このことは、ユダがバビロンにつけ込む隙を作ったことを意味します。

このことを伝え聞いた預言者イザヤは、ヒゼキヤの所に来て、尋ねます。「あの人々は何を言ったのですか。どこから訪ねて来たのですか」(3)。イザヤは主の預言者としての働きを行います。預言者は、王のご意見番ではありません。

ウェストミンスター大・小教理問答では、キリストの預言者職について告白します。主は、旧約の時代に預言者・祭司・王を遣わし、主の働きをイスラエルの民に示されました。この預言者・祭司・王の三職の働きをキリストが担ってくださいました。

預言者の働きは主のご意志を啓示することであり、祭司の働きは私たちの罪の赦しをお与えくださること、つまりキリストの十字架ですが、旧約の祭司は、祭儀を司り、生け贄の供え物を献げることが中心的な働きです。そして王は、主の統治を、主に代わって行うことです（ウ大教理問42～45)。

ヒゼキヤ王が、イスラエルの統治を揺るがすことを行ったことに対して、主から遣わされた預言者イザヤが疑問を呈します。それが3・4節で繰り返される問いかけです。

新約の教会において、預言者職は牧師、祭司職は執事、王職は長老に委ねられています。牧師と長老は一緒に小会形成を行いますが、働きの違いを認識した上で、主から託された教会形成の働きに従事することが求められます。そのため、両者は従属関係ではありません。

そしてヒゼキヤ王は、イザヤの問いかけに素直に応えます(4b)。

このとき預言者イザヤは、主から託された言葉をヒゼキヤ王に伝えます(5-7)。つまり南ユダ王国がバビロンによって滅ぼされ捕囚の民とされるという、バビロン捕囚の宣言です。北イスラエルがアッシリアによって滅ぼされたこと同様に、南ユダ王国がバビロンによって滅ぼされ、捕囚の民とされるのは、主の主権によって行われます。

ただ私たちは、このイザヤ書39章を読むときに注意しなければなりません。つまり、バビロン捕囚の原因を、ヒゼキヤ一人に押しつけることです。主は預言者をとおして、イスラエルの民・ユダの民に対して、繰り返し罪の悔い改めと主の御言葉に聴き従う信仰を求めてきました。

またこの預言が語られたのが、ヒゼキヤの死の15年前BC701年頃です。しかし南ユダが滅ぼされ捕囚の民とされるのは、597年(第一次)・585年(第二次)で、約100年後です。

南ユダ王国がバビロンに敗れ、捕囚の民とされるのは、ヒゼキヤ王一人の責任ではなく、主によって立てられた王が、主の御言葉に聴くことなく、偶像崇拝を行い、乱れた生活を繰り返してきた結果です。

しかし主は、イスラエルの民が滅亡するとは語らず、捕囚の民とされ、残されることを約束されます。ここに主のイスラエルに対する約束は継続することとなります。

つまり、主なる神がイスラエルの民を救い、約束の民としてくださったのは、救いを完成する約束のメシア・キリストが、イスラエルから与えられることでした。このことをマタイ福音書１章のイエス・キリストの系図が語ります。出エジプトすら記さないこの系図において、バビロン捕囚は非常に大切であり、この系図において唯一、出来事として記されています(1:11,12,17)。

預言者イザヤの言葉を聞いたヒゼキヤは、自らの言動によって、バビロン捕囚となる事の重大さを認識します(8)。自らの言動に責任を持ち、過失を認めることは信仰的に非常に大切なことです。しかし同時に、ヒゼキヤは自分の在世中は平和と安定が続くと思う、自己保身の弱さを持っています。

イザヤ書は39章までと40章以降とで分かれており、40章以降はバビロン捕囚後に預言されたのではないかとも語られます。つまり、40章以降は別の預言者（第二イザヤ）が記したと語られます。一方、保守的な解釈では、イザヤ一人で預言したと語ります。

正直なところ私はどちらでも良いと考えています。大切なことは、誰がいつ預言したかではなく、主なる神が、私たちに語りかけている預言として受け入れることです。

また40章以降は、直接的にはバビロンに捕囚の民とされたイスラエルを、主なる神が解放し、帰還させてくださることを約束するのですが、それは新約に生きる私たちにとっても、罪から解放され救いに導かれること、やがて与えられる神の国の祝福に満たされることが語られています。

預言者は「慰めよ」と繰り返し語りかけます(1)。選びの民とされたはずのイスラエルですが、罪の結果、捕囚の民とされました。しかし主なる神が慰めてくださり平安を回復してくださることと宣言します。

捕囚の民としての「苦役の時」は、終わりを告げ、咎は償われます(2)。

異邦人であった私たちは、罪の故に死に行く者でした。しかし主は慰めを与えてくださり、神の子として召し、キリストにあって救いへと導いてくださいます。まだ教会に来たことのない人たちも、主は愛をもって、慰めを覚えていてくださり、教会へと導くときを待っておられます。

3「呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え　わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。……」。

3～5節の御言葉には、洗礼者のヨハネのことが預言されていることを確認することができるかと思います（参照：ルカ3:2-6）。

ロゴスであるキリストが来られたのは、荒れ野にあって苦しみの中にある民に対して、主なる神による救いを指し示すためであり、その道備えをする者として、洗礼者ヨハネが遣わされました。そして、主なる神は、荒れ野に道を備え、神の栄光が示されることを、捕囚の民とされるイスラエルに対して、そして現在に生きる私たちに語りかけます。

「呼びかけよ、と声は言う」(6)。

このとき私たちは自らの姿を顧みなければなりません。イスラエルが捕囚の民となるように、私たちは、野の草・花のように、枯れ・しぼむ存在、つまり肉の死と死による主の裁きを逃れることのできない者です。

そのため私たちは、主の御前にあって、罪を悔い改めることが求められます（参照：ウェストミンスター信仰告白15:1）。

「わたしたちの神の言葉は
　とこしえに立つ」(8)。

主は、すべての民に対して、主の御言葉をお語りくださいます。そして主の御前に集められた私たちは、耳を塞ぐことなく主の御言葉に聴くことが求められます。

旧約の預言者・洗礼者ヨハネは、主の良い知らせを伝える者とされます(9)。そして新約の教会に立てられた説教者である牧師も然りです。主の御言葉は、良い知らせ（エバンゲリオン、good news）だからです。

主は主の御言葉を聴いた神の民を捕囚の地・罪の荒れ野から解放して、約束の地・神の国に導いてくださいます。

主に従いキリスト者となることは、人々と異なります。日本人キリスト者は、周囲との違いを気にしてしまいます。しかし、人々との違いを気にしてはなりません。主が私たちにお与えくださった御言葉は、良い知らせだからです。人々を恐れる必要はありません。神による救い、神により憐れみに満たされており、何よりも主が共にいてくださり、守り導いてくださいます。

最後の10-11節では、主によって与えられる救いの核心が語られます。ここに２つのことが語られています。第一に、主なる神が生きて働いておられ、今も力をもって世界を統治しておられることです。多くの人たちが、「神はいない」と神の存在を否定して生きています。しかし主の御前に、永遠から永遠に存在し、全知全能の主の御前に、私たちが頭を垂れて生きるとき、私たちは、何も恐れることはありません。

そして第二に、主が羊飼いとして群れである私たちキリスト者、教会を養い、養い導いてくださいます（参照：ヨハネ10:11, 14-16）。「わたしは良い羊飼いである」(10:11)。

私たちは荒れ野にあって滅びに向かうのではなく、主の御前に集められ、主の養いの内に、神の御国の栄光へと導かれます。

イザヤ書は、40章に入り、バビロン捕囚からの帰還を約束し、イスラエルを奴隷から解放してくださる約束を語り始めます。主なる神が、私たちの羊飼いとして、私たちを滅びから救い出し、神の御国に導いてくださいます。そのため、「主の御言葉に聴け！」と語られていました。

私たちは、常々自らの姿を顧みることが求められますが、同時に、私たちの御前におられる主なる神がどのようなお方であるかを顧みることが求められます。

今の時代、私たちは海の大きさ、宇宙の広さ、山の高さなどを測ることができる時代を迎えています。これは旧約の時代とは大きな違いです(12)。しかし、

「主の霊を測りうる者があろうか。
　主の企てを知らされる者があろうか。」

と語ります(13)。「主の霊」とはどのように解釈すれば良いのか、難しいところです。

主なる神は、全知全能であり、空間的に無限・時間的に永遠・形の変化において不変の霊です（ウェストミンスター大教理問７）。「主の霊」は、神そのもの、あるいは神の愛と言って良いでしょう。

また、メシア預言が行われているイザヤ11章では次のように語られています(1-5)。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで
　その根からひとつの若枝が育ち
　その上に主の霊がとどまる」……。

主の霊は、キリストも共有しておられます。

私たち人間は、この主の霊・さらに主の企てを知ることなどできません。さらに、創造者であり、全知全能の神である主に対して、神の被造物である人間が、主の御計画・支配に対して、何一つ知識を与えたり、影響を行使することなどできないことを、私たちは受け入れなければなりません(14)。

むしろ私たち人間は、主の霊の下に恵みによって生命が与えられており、主の霊を軽んじ無視することにより、主の裁きを逃れることができません（参照：アナニアとサフィラ：使徒5:1-11）。生きて働く主なる神、神の御前に私たちは生命が与えられ、恵みが与えられています。そのため聖霊を欺き、主の霊を試すことは赦されません(使徒5:3,9)。

主なる神の御前には、私たち一人ひとりがそうであるように、国であろうと、国を治める王・為政者であろうと、無に等しい、むなしくうつろなものです(17)。

そのため主なる神を、人間が作った像・偶像の中に閉じ込めても、そこには何の力もなく、無に等しい、むしろ自分たちが神に変わろうとする大きな罪です(18-20)。

私たちは、創造主であり、永遠から永遠に生きておられるお方、全知全能の主なる神の御前に立つことが求められています。そのため、主なる神がお語りになる御言葉、聖書の言葉に耳を傾けることが求められています(21、40:8参照)。

私たちは、天地万物を創造し、私たち人間を創造し、今日も生命をお与えくださっている主の御前に立ち、ひれ伏し、主の御言葉に聴くことが求められています(26)。アナニアとサフィラのように、主に対して、誤魔化し嘘を付くことにより、主からの裁きを逃れることはできません。

しかし、イスラエルの民、そして現代に生きる多くの民が語ります。

「わたしの道は主に隠されている
　わたしの裁きは神に忘れられた」(27)。

生きて働く主なる神を認め、信じることと、主なる神の存在を否定すること・主の導きも主の裁きも認めず、己のが道を歩むこととは、徹底的に生き方が異なります。

主は御言葉をもって私たちに語りかけ、今も私たちを統治しておられます。主の存在を忘れ、主を侮ることにより、イスラエルがアッシリア・バビロンによって滅ぼされたように、またアナニアとサフィラのごとく、主の裁きを逃れることはできません。

この主なる神は今も生きて働いておられます(28)。

そして、生きて働く主なる神は、私たち一人ひとりを知っておられます。私たちを見守り、御子イエス・キリストにより今も私たちのために執り成しの祈りを献げ、そして必要を満たしてくださいます(29-31)。だからこそ、ヨハネ福音書10章に通じる言葉を、11節において

「主は羊飼いとして群れを養い、
　　御腕をもって集め
　小羊をふところに抱き、
　　その母を導いて行かれる」。

とお語りくださいます。

イザヤは、41・42章を中心に「島々」と呼びかけます。バビロン捕囚からの解放は、イスラエルの民に与えられる恵みですが、同時に、「島々」で表される異邦人が、主の御前に信仰を表すことを求められます。

このことは、御子イエス・キリストによる救いにより、福音が全世界に広がりを見せることを物語っています。

バビロン捕囚からイスラエルの民を直接的に救い出すのは、ペルシャの王キュロスです(2)。主が彼を、イスラエルをバビロンにおける捕囚から救い出すために、用いられます。そして新約の私たちにおいては、メシアである御子イエス・キリストが立てられることが預言されています。

「この事を起こし、成し遂げたのは誰か。
それは、主なるわたし。
初めから代々の人を呼び出すもの
初めであり、後の代と共にいるもの」(4)。

しかしペルシャの王キュロスは、あくまでも主なる神が立てた王であり、主権は主なる神にあります。主なる神は永遠から永遠に生きておられる神であり、すべての者を支配しておられます。ペルシャの王ではなく、主なる神にひれ伏す必要があります。

主の御声に聴き従う者は、イスラエルとは限らず、島々、地の果ての人々に広がります（参照：マタイ28:18～20：宣教命令)。

しかし異邦人は、神に近づき、神を畏れつつも、職人の作った偶像に依り頼みます。人で作られたものは、動くことはなく、何の力も有していません(6-7)。

そして主なる神は、神に従うイスラエルの民に呼びかけます(8-9)。「わたしはあなたを選び、決して見捨てない」(9)。これは肉におけるイスラエルに留まることなく、霊的なイスラエル、すなわち主を信じるすべての民に及びます。

「恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神」(10)。私たちが神を信じるとき、何も恐れる必要はなくなります。主がすべてを創造されたばかりか、今も生きて働き、私たちと共にいてくださるからです。そればかりか、主はすべてを統治し、罪を犯し続ける者、主に逆らい続ける者に対する裁きを行われます。主に敵対する者が、主からの裁きを逃れることなどできません。

私たちが信仰を持つとき、この主なる神の絶対的な御力を信じること、すべてを主に委ねて、信仰を貫くことは、非常に大切なことです。しかし主の御力を疑うとき、私たちは不信仰になり、自己の力で問題を解決し、自分の力で生きようとするのです。

「苦しむ人、貧しい人は水を求めても得ず
渇きに舌は干上がる。
主であるわたしが彼らに答えよう。
イスラエルの神であるわたしは
彼らを見捨てない」(17)。

苦しむ人・貧しい人は、地上の歩みの中にあって、助けが与えられず、苦しみが続くかも知れません。しかし主は「見捨てない！」と宣言してくださいます(17・18)。私たちが神に祈り求める以前に、主なる神が、神を信じるイスラエルの民に対して、「見捨てない」と宣言してくださいます。

主が見捨てない民に対して、主は何もしないわけがなく、必要を満たしてくださいます。必要な水、必要なマナをお与えくださいます（参照：マタイ7:7-11「求めなさい～」)。

そして主は朽ちることのない、永遠の命に至る水を、私たち一人ひとりにお与えくださいます（参照：ヨハネ4:13,14)。

そして主を否定し、偶像を求める人たちを、法廷に差し出すように語られていきます(21-29)。ここで審議されることは天地万物が創造されてから現在にいたる歴史そのものです。「お前たちの論拠を示せ」(21b)と語られる主は、「お前たちは無に等しく、働きはむなしい」(24)と宣告されます。

そして人間の手で作られた像に何の力も見いだすことはできず、虚しいだけであることを徹底的に指摘されます(25c-26、28-29)。

そして主は27節でこのように語ります。

「見よ、シオンに初めから
告げられていたことは
ここに実現した。
エルサレムに良い知らせを伝える者を
遣わそう」。

主は主を信じるイスラエルの民を、捕囚から解放してくださいます。そしてキリストをこの世にお送りくださり、現在、主の御言葉を信じる私たちキリスト者を、奴隷の縄目から解放し、神の御国を約束してくださいます。ここに希望があります。

【祈祷会奨励】「主なる神による支配に生きよ！」イザヤ書42章　ウ信仰告白8:6(10/2)

イザヤ書はイスラエルとユダの滅びと捕囚を語った後、40章より捕囚の民が解放されることを語っています。そして41章では主が偶像に勝利を遂げられること、苦しむ人・貧しい人を永遠に朽ちない水をお与えくださることを約束してくださいました。

預言者は、

「見よ、わたしの僕、わたしが支える者を。
わたしが選び、喜び迎える者を。
彼の上にわたしの霊は置かれ
彼は国々の裁きを導き出す」(1)と語ります。

聖書において突然「彼」と語るとき、御子が約束されていることがあります（参照：原福音（創世記3:15））。

また主イエスが洗礼を授かるとき、「『これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者』と言う声が、天から聞こえた」（マタイ3:17）と、この箇所が引用されています。

また、マタイ12:15～21においても、主イエスご自身が、ご自身においてこの預言が成就したと語られます。主なる神は、キリストをこの世に遣わすことにより、私たちの救いを完成へと導いてくださいました。

御子により私たちを救いに導いてくださる主なる神が、どのようなお方であるかを、預言者は改めて語ります(5-9)。

主は、天地万物を創造し、私たちに生命をお与えくださいます(5)。

また主は、一人ひとりを覚えて救いに御計画してくださり、御声を持って呼び出してくださり、罪の赦しと救いの契約を結び、命の道へと立ててくださいます(6)。

そして、

「見ることのできない目を開き
捕らわれ人をその枷から
闇に住む人をその牢獄から
救い出すために」(7)。

囚われの身であるイスラエル・罪により捕らわれている私たちを救い出し、魂を、生命をお与えくださいます。

「わたしは主、これがわたしの名」(8)。

このお方こそ、私たちの神、主なる神です。作られたもの偶像には力はなく、主なる神により、救いは成し遂げられます。

メシアによる救い、そして主なる神がどのようなお方であるかが示されることにより、預言者は、主への讃美へと導かれます。

「新しい歌を主に向かって歌え。
地の果てから主の栄誉を歌え。
海に漕ぎ出す者、海に満ちるもの
島々とそこに住む者よ。
荒れ野とその町々よ」(10-11)。

「主に栄光を帰し
主の栄誉を島々に告げ知らせよ」(12)。

主なる神ご自身とその統治、そして私たち罪人を解放してくださるお方であることが示されたとき、私たちは、ただただ感謝をもって、主を褒めたたえ、讃美の歌を歌うように導かれます。別の言葉を語れば、主なる神を知らなければ、本当の意味で、主を讃美することはできません。

だからこそ、私たちが主を礼拝する場で、主に讃美を献げるとき、主から語られる御言葉への応答となります。そのため、御言葉を忘れる高揚するような讃美ではなく、御言葉をかみしめつつ、主を讃美することとなります。

18節、新共同訳は「捕囚の解放」と表題を付けていますが、そうでしょうか？　聖書協会・共同訳は「耳の聞こえないイスラエル」とします。新共同訳は意味を取り違えているようです。ここでは捕囚の民とされたイスラエル・ユダの人々のように、主の御言葉に聴こうとしない者に対する警告が語られています。

すでに語られてきたように、バビロン捕囚は、イスラエルの民が、主を信じることなく、主の御声・悔い改めに耳を貸さなかった結果、罪を犯し、それ故の裁きでした。

「耳の聞こえない人よ、聞け。
目の見えない人よ、よく見よ」(18)。

という言葉に表れています。

つまり主なる神は、主がお語りになる御言葉に聴き、主なる神がどのようなお方であるかを知り、罪人であった自らをメシアであるキリストにより救ってくださったことを知り、受け入れる者には、救いを与え、神の御国を約束してくださいます。そして、この事実が示されたキリスト者は、主を讃美し、主を誉め讃えて生きる者とされます。

一方、主が御言葉を提示されたにもかかわらず主の御声に耳を傾けない者は、罪の裁きと滅びを避けて通ることはできません。

私たちは与えられた御言葉である聖書に聞きつつ、主による救いに感謝をもって、主に仕え、主を誉め讃え続けたいものです。

42章の後半(18節以降)、主の御言葉に聴き従わないイスラエルの民に対して厳しい言葉が語られてきました。

そして43章に入り、預言者は改めて、ヤコブ・イスラエルに対して語りかけます。

新共同訳聖書では「今、こう言われる」と記しますが、「しかし、今、こう言われる」と訳した方が良いかと思います。主は今御言葉を聞く私たちに語りかけられます。

肉におけるアブラハムの子ヤコブの子孫は主なる神によって創造されました。そしてイスラエルは、霊的に主によって召された民です。この２つの言葉が並んで記されるとき、肉におけるヤコブ、霊におけるイスラエルと書き分けていると思います。

そして主なる神は続けて語られます(1)。

「恐れるな、わたしはあなたを贖う。
　あなたはわたしのもの。
　わたしはあなたの名を呼ぶ」。

私たちは自分一人で存在しているのではなく、主なる神が創造し、主の恵みによって生命が与えられています。私たちは主の所有物、主の僕（奴隷）です。

この主なる神が、主の御声を聞こうとせず、主の御前に立とうとしないイスラエルに、なおも「わたしはあなたを贖う」と宣言してくださいます。「贖う」とは、一般的な言葉ですが、教会でのみ用いる言葉となっています。「物を代償として出して、罪などのつぐないをする」との意味です。

イスラエルは、罪の故に、北イスラエルはアッシリアに、南ユダはバビロンによって滅ぼされ、バビロンに捕囚の民とされました。イスラエルの民は、主なる神の御前に、何か、救われるために必要なことを何一つしていません。主が一方的にイスラエルと共におられ、イスラエルの名を呼び、贖い、つまり罪の赦しと救いをお与えくださいます。このことを主は、捕囚イスラエルの民に語りかけてくださいます。

２・３節の言葉は、出エジプトにおける海を分ける奇跡、あるいはダニエルにおける奇跡などを想起させます。イスラエルを一方的に贖い、救い出してくださった恵みを、私たちは旧約聖書から学んでいます。

(4-5)「わたしの目にあなたは価高く、貴く
　わたしはあなたを愛し……
　恐れるな、わたしはあなたと共にいる」。

主にとってイスラエルは特別な存在です

「彼らは皆、わたしの名によって呼ばれる者。
　わたしの栄光のために創造し
　形づくり、完成した者」(7)。

イスラエルにおいては、メシアである御子イエスが約束されています。イスラエルがイスラエルであるのは、アブラハムの子・ダビデの子として、イエス・キリストが与えられることです(マタイ1:1～17)。

また、霊的なイスラエルとして新約の教会に結ばれている私たちキリスト者も、主の栄光のために創造されているのです（ウェストミンスター小教理問答問１）。

改めて主はイスラエルの民に語ります。

「引き出せ、目があっても、見えぬ民を
　耳があっても、聞こえぬ民を」(8)。

「わたしが選んだわたしの僕だ、…
　あなたたちはわたしを知り、信じ
　理解するであろう」(10)。

イスラエルの民は、まったく変わらず、主の御声を聞こうとしていません。しかし、イスラエルの民は、主の御声に聴き従う者へと導かれます。まさしくここに聖霊の働きがあり、主が石の心を肉の心に変えてくださり、主を信じる者とされます。

「わたしこそ主、わたしの前に神は造られず
　わたしの後にも存在しないことを。
　わたし、わたしが主である。
　わたしのほかに救い主はない」(10-11)。

「あなたたちを贖う方、
　　イスラエルの聖なる神」(14)。

主なる神は、イスラエルを贖い、神の子として受け入れてくださり、そしてイスラエルをバビロンから救い出し、都エルサレムへの帰還をお与えくださいます。

イスラエルは繰り返し主を裏切り、罪を繰り返します。その結果として、時に、主はイスラエルを懲らしめ、裁かれます。

それでもなお主なる神は、イスラエルの罪を贖ってくださいます。イスラエルこそ、キリストが約束された民です。

新約に生きる私たちも、霊的なイスラエルとして、主によって召されキリスト者とされました。私たちは、主による救いに入れられながらも、罪を繰り返す罪深く弱い存在です。だからこそ私たちは、おごること無く、日々主の御前に遜り、罪を悔い改めて主を讃美することが求められています。

主はイスラエルを愛し、「あなたはわたしのもの」(43:1)と宣言し、さらに、イスラエルに「あなたたちを贖う」(43:14)と宣言してくださいます。主の一方的な恵みです。

「そして今、わたしの僕ヤコブよ
わたしの選んだイスラエルよ」(1)と呼びかけてくださいます。肉におけるヤコブの子たちであり、主の選びの民、霊におけるイスラエルです。

主なる神は、イスラエルの民、そして私たちを含むすべての人を創造し、日々恵みに満たしてくださいます。そして罪の贖いをキリストにおいてお与えくださいます(2)。

主なる神はさらに、
「恐れるな、わたしの僕ヤコブよ。
わたしの選んだエシュルンよ」(2)とお語りくださいます。エシュルンとは、「正しい者」の意味です(参照:申命記32:15、33:5,26)。

イスラエルは「神に勝利した」と言う意味で、「神によって勝利が与えられた民」とされたように、エシュルンは「神によって義が与えられた民（義認)」のことを指し示しています。肉のヤコブは、主によりエシュルンとされるのです。

３～５節では、主なる神がイスラエルの民に恵みと祝福をお与えくださっていることを確認します。日々の生活においては、乾いた地に水の潤いを与え、食物の恵み、生い茂る草木の恵みが約束されます。

それと同時に、神の霊が注がれ、神の祝福が与えられ、霊的な恵みも示されます。

主の恵みが示され、神の民として生きる者とされた者は、自分自身においても「自分は主のもの」として、クリスチャンとして生きる者とされます。神によって召された者は、自分において、主を告白し、主の恵みによって生きる者とされます(5)。

そして主は、神によって召された民に、「イスラエル」という神の刻印を押し、神の所有としてくださいます。キリスト者は、救いから漏れることはなく、必ず神の国に入る特権が与えられています。

そして主の恵みに生きる者は、主なる神がどのようなお方であるかを知り、また主を誉め讃える者とされます(6-8)。主は、イスラエルをキリストの贖いをもって救う王として、全世界を支配しておられます。

主なる神は、時間において永遠・空間において無限・そして不変の霊です。そして、主なる神の他に神はいません。

そのため人間の手によって作られた偶像は無力です(9-20)。そして、偶像を信じる者たちは、目も心もふさがれているため、主なる神が御声をもって語っても、聞くことはなく、理解することもできません(18-19a)。そのため、自らの姿を顧み悔い改めることも反省することもなく、ましてや神の知識も英知も知ることもありません。

改めてヤコブ・イスラエルに対して呼びかけられます(21)。主なる神が、私たち人間を創造し、生命をお与えくださいました。私たちは主の僕です。私たちが神によって生きているのであって、私たちが神を従えているのではありません。主従関係、上下関係を誤ってはなりません。

主なる神は、義・聖・真実なお方であり、私たちのすべての罪を知っておられます。しかし、キリストによって罪を贖ってくださったのであり、私たちの罪を、主は雲のように、霧のように吹き払い、忘れたと宣言してくださいます(22)。だからこそ、主なる神は、私たちの過去の罪を、繰り返し持ち出して、攻め続けることなどしません。

だからこそ私たちは主なる神による罪の贖いを、心から感謝し喜び歌うのです(23)。このことが主を証しする生活です（参照：ウェストミンスター小教理問１）。

そして、捕囚とされるイスラエルも、神の救いの計画により、エルサレムに帰還することが許され、ユダの町々を再建することが宣言されます(24-28)。

ここで「キュロス」について言及されます(28)。この預言が、いつの時代に預言されたのか問題とされます。私は、捕囚前にイザヤが預言したのか、第二イザヤだったのか問題にしません。主の御支配の下、預言者が立てられ、そして主の言葉を預言したのです。私たちは、今の時代に、この御言葉に聞けば良いのです。

主が支配し、ヤコブの民をイスラエルにし、そしてエシュルン（正しい者）として義と認めてくださいました。私たち罪人が、霊的なイスラエルとして召され、キリストによる罪の贖いが与えられ、義と認められ、神の子とされました。主の御支配と恵みに感謝し、主による救いに喜んで生きよう！

44:28で、ペルシャの王として立てられるキュロスについて言及されていました。45章1節において、主は改めてキュロスに言及します。

「主が油を注がれた人キュロスについて」

異邦人の王であるキュロスが、油注がれた人、つまりメシアのような存在であると語ります。イスラエルは主によって選ばれた民ですが、肉によるイスラエルだから救われる訳ではありません。イスラエルであっても、主なる神を忘れ主に従わない者は、主の裁きに遭います。そのため、イスラエルはバビロンにより滅ぼされ、捕囚の民とされたのです。一方、異邦人であっても、罪を悔い改め、主に従い行く者は、主による救いに与ります。

ですからペルシャの王キュロスが、主によって用いられ、主の働き人として油が注がれることを驚く必要はありません。主は、イスラエル・異邦人の区別なく、主の働き人として用いられます。

主なる神は天地万物を創造し、すべてを統治しておられます。そしてイスラエルを選びの民とされました。そして主は、数々の奇跡により、主の御力が示されることにより、イスラエルを奴隷であったエジプトの地から救い出してくださいました。そしてイスラエルは、主を礼拝する度に、生け贄を献げる度に、そして過越の食事をする度に、主の御力と愛を顧み、主への信仰を新たにすることが求められました。

しかしイスラエルは主を離れ、偶像を拝み、姦淫を犯しました(4-5)。その結果が、バビロン捕囚の民とされることでした。

主が天地万物を創造し、すべてを統治しておられます(6-8)。主なる神の他に、世界を統治する者はありません。争い・戦争は、主なる神を忘れた者が行います。主は、自然をも支配し、人に主の御力を示すために災害も主の御力によります。正義・救い・恵みは、主から与えられたものであり、人の手で行うことはできません。

主なる神が創造主であり、人間は主によって作られた者、被造物に過ぎません(9)。この関係を忘れた者に対して、主は「災いだ」と語ります。

しかし人は、「神がいるのか」と神からのしるし（奇跡や証拠）を求めます。主イエスはヨナのほかにしるしはないと語られます(マタイ16:4)。天地創造された主なる神は、奴隷であったイスラエルをエジプトから救い出してくださいました。主なる神がおられるしるしは、聖書に記されています。

そして主イエスは、病人を癒やす奇跡・死人を甦らせる奇跡・嵐を沈める奇跡により、ご自身の神としての御力をお示しになりました。また主イエスご自身が十字架の死から甦ることにより、神としてのしるしを私たちにお示しくださいました。

天地万物を創造し、今も世界を支配しておられる主なる神が、イスラエルを救い、神を信じて神に従い行く者を救うことを宣言してくださいます。そのことの表れとして、エジプト、クシュ、セバと言った諸国の人々が、イスラエルに従う者となることを宣言してくださいます(14)。

バビロンで捕囚の民となるイスラエルに対して、主はペルシャの王キュロスに油を注ぎ、イスラエルを救い出す働きを託されます。そして主は、周辺諸国の人々が主なる神を信じ、ひれ伏すこと、他に神々はいないことを示されます。偶像を造る者、拝む者は、辱めを受け、主の裁きに遭います。

「イスラエルは主によって救われる。
　それはとこしえに続く救い
　あなたたちは世々とこしえに
　恥を受けることも、
　　辱められることもない」(17)。

「わたしは主
　正義を語り、公平を告知する者」(19)。

主による救いは、主を信じるイスラエルの民に与えられます。主の正義・公平、つまり救いの恵みは、隠されて混沌としているのではなく、皆に提示されています。だからこそ、肉のイスラエルも、霊のイスラエルである私たちも、主の御言葉に聴くことが求められています。

主は、混沌とした社会を形成するのではなく、平和・正義・公平が行われる社会を形成されます。それが神の国において完成します。主はこのことを、預言者の口を通して、また御言葉の聖書をとおして、私たちにお示しくださっています。主の御言葉に聴き従い、主の御業にひれ伏す者に、主の御力は注がれ、平和・正義・公平である神の御国が与えられます。

「ベルはかがみ込み、ネボは倒れ伏す」(1)。「ベル」とはバビロンの神の名であり、ベルの息子が「ネボ」です。ダニエルが拒んだ神々です。また新共同訳聖書は表題として「バビロンの偶像」と付けています。しかし表題を意識すると、この章全体の理解が違ってきます。そのためあまり表題を意識してはなりません。

偶像には民を救う力がないことを、主は宣言されます。しかし主なる神がこの46章で語ろうとしている主題は、主なる神の呼びかけに対して、耳を傾け、主を信じる者に対する救いをお示しくださることです。

「わたしに聞け、ヤコブの家よ
イスラエルの家の残りの者よ、共に」(3)。

主は、ヤコブの家、つまり肉におけるイスラエルの民に語りかけます。しかし、ここで主が約束される民は、「イスラエルの家の残りの者」です。肉においてヤコブの息子として生まれたからといって、救いが約束されているわけではありません。

しかし主は、「わたしが担い、背負い、救い出す」(4)と語り、罪を犯しても、神を忘れていても、改めて主の呼びかけに答え、主の御言葉に聴くとき、主は、霊のイスラエルとして救い出してくださいます。

主は、「あなたたちは生まれた時から負われ　胎を出た時から担われてきた」(3)とお語りくださいます。主の貴い御計画が、彼らの内に表れるのであり、彼らが主の御前に帰ってくる遙か前に主の御計画が示されています(参照:ウェストミンスター信仰告白3:6)。

しかし主は、ヤコブが偶像を作り、それを拝んでいることを指摘します(5-6)。出エジプトを果たしたイスラエルの民は、モーセがシナイ山に登り、いなくなると、金の子牛の像を造り、「イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き登ったあなたの神々だ」と語りました(出エジプト32:4)。ヤコブの民は同じことを繰り返します。

しかし自らの手で作った偶像は、手で運ばなければなりません。そしていざ、助けを求めて祈っても、悩みを救う力などありません(7)。

だからこそ、主はヤコブに、

「背く者よ、反省せよ
　思い起こし、力を出せ」(8)

と語ります。

思い起こすべきは、バビロンやバベルやアシェラの偶像ではなく、生きて働く主なる神です。預言者を通して、言葉を発せられる神を思い起こすことです。

主がお語りになる御言葉は、歴史において実現してきました(9)。イスラエルの民は、親から子に・子から孫に、主なる神のなされた御業を語り伝えてきました。それが出エジプトにおける奇跡であり、約束の地カナンに入るときの奇跡です。また、年に一度、過越の食事を取ることにより、出エジプトを確認しました。

「わたしの計画は必ず成り
わたしは望むことをすべて実行する」(10)。

主は預言を語り、それを摂理において実行して、歴史に表して行かれるお方です。特に、主の御言葉である聖書には、神の民とされるキリスト者の救いを約束し、実行されます。

イザヤ書では、バビロン捕囚と共に捕囚からの解放を預言します。また、メシアが約束されています。新約に生きる私たちは、主の言葉が成就したことを顧みることができます。さらに主の御言葉は、キリストが再臨し、神の御国を完成させ、神の民を天国へ導いてくださることを約束します。

だからこそ主はヤコブの民・現在に生きる私たちに語りかけます。

「わたしは語ったことを必ず実現させ
　形づくったことを必ず完成させる」(11)。

主は、ヤコブの家に対して、つまりまだ偶像から離れることなく、神を信じることのできていない人たちに呼びかけます(12)。

主は、イスラエルの民を懲らしめるため、バビロン捕囚に渡しますが、イスラエルを回復し、帰還することを許してくださいます(13)。遠くの時代ではなく、捕囚の帰還は、決められています。約70年です。

その規模は、イスラエルの民全体ではなく、「残りの者」だけです。神の御声に耳を傾け、悔い改め、主なる神のみを信じることが求められています。

だからこそ、イスラエルの民にしても、現在に生きる私たちも、主がお語りくださる御言葉に聴き、偶像から離れ、主なる神のみを信じ、主の御言葉に聴き従うこと、つまり霊的なイスラエル、真のイスラエルとなることが求められています。

46章では、主なる神は預言者イザヤをとおして、バビロンの偶像には何の力もないため､捕囚の民とされるイスラエルの民は、生きて働く主なる神を信じ、主の御言葉に聴き従うように語りかけました。

この47章はその続きです。主の御計画に従い、罪に陥ったイスラエルを懲らしめるために主はバビロンを用いて、イスラエルを滅ぼし、捕囚の民としました。しかしこれらは主の御業であり、バビロンもまた主の御前に、主を信じ、主の御言葉に聴き従うことが求められています(参照：13・21章)。

そのため、主の御業である南ユダ王国の滅亡とバビロン捕囚を達成したバビロンに対して、主は改めて語りかけます。

「身を低くして塵の中に座れ
おとめである、娘バビロンよ。
王座を離れ､地に座れ､娘カルデアよ」(1)。

「カルデア」とは「バビロン」の別名です。大国になったからと、おごり高ぶるのではなく、主の御前に身を低くして、塵の中に座る、つまり主の御前に遜ることを求めています。

バビロンは、栄華を極め、贅沢な生活を送っていますが、こうした生活は主によって剥奪され二度とこうした生活は送れなくなります。そして主による裁き・恥辱に満ちた姿を露わにすることとなります(2,3)。

「わたしたちの贖い主、
　　その御名は万軍の主
イスラエルの聖なる神」(4)。

主なる神こそが、すべての民の贖い主であり、万軍の主です。世界を支配している大国であろうと、主に逆らうことはできません。バビロンもまた主の御前に遜り、主の御言葉に聴き従うことが求められます。そして大国バビロンも、すべての行ってきたことに対して､主の裁きの座に立たされ、逃れることはできません(5)。

主がバビロンに力を与え、イスラエル・ユダを裁く力を与えたのは、イスラエルの罪の故です。バビロンが優れていたから、優秀だったからではありません。

主が求めたことは、イスラエルが滅びて捕囚の民となることで､自らの罪と向かい、悔い改めを求めることです。そのためバビロンは、イスラエルと向き合い、捕囚の民を憐れみをもって受け入れることでした。

しかしバビロンは、自らの力を誇り、永遠に強国であると誇っていました。主は、バビロンが、主がすべてを支配し、また滅ぼす力をも持っておられることを、知るように指摘します(6,7)。

「今、これを聞くがよい」(8)。

主なる神はバビロンに呼びかけます。ここでバビロンの２つの罪が明らかにされます。１つ目は、「わたしだけ、わたしの他に、力を持っているものはいない、神はいない」と語る主なる神を否定すること。２つめは、「わたしはやもめになることはない」つまり「滅びることはない」と豪語することです。

しかしこの２つ罪にに対する主の裁きは､「一日のうちに、瞬く間に起こります」(9)。つまり主の御力が示されることにより、バビロンは滅ぼされます。

いざ主の裁きが始まり、偶像に頼って呪文を唱えたり、まじないをしても、偶像には力がなく、主の裁きを逃れることはできません。

主なる神は霊のお方であり、目で見ることはできません。そのため､「主なる神はいない」と主の存在を否定し、力を欲しいままにしていると、どれだけ悪事を行っても、咎める者はないと思い込んでしまいます(10)。おごり高ぶりであり、傲慢です。自ら与えられた知恵や知識は、自らの権威を築くために用いてきたのであり、主の御前には、何の役にも立ちません。

主の裁きは、突然訪れます。偶像は頼りになりません。なすすべもなく、主の裁きとしての滅びがやってきます(11)。

最後の部分（11～15節）では、まじない、呪文、星占い等、偶像に仕える者たちが用いる手段が記されています。しかし歴史の支配者である神の預言は必ず成就し，偶像はそれを妨げることはできません。主なる神はバビロンに審判を下し滅ぼされます。

今、世界では、自国中心、覇権主義的な国家が、世界を支配しようとしています。しかし、生きて働く万軍の主である神を忘れ、主の御言葉に聴き従わなければ、どのような大国であっても、バビロンのように主の裁きを逃れることはできません。

私たちは大国を恐れるのではなく、主なる神を畏れ敬うことが求められています。

【祈祷会奨励】「イスラエルに語りかける主なる神」イザヤ書48章　ウ信仰告白5:1（11/20）

イザヤ書は40章よりバビロン捕囚とされたイスラエルに対する救いを語ってきましたが、48章で一区切りとなります。

真のイスラエル（霊のイスラエル）が、肉におけるヤコブとは異なることを、微妙な言葉において表現されています(1-2)。

アブラハムの子、ヤコブから生じる12部族に属している者たちは、「自分たちはイスラエルだ」と自負していますが、そうではないことを、預言者は明らかにします。

つまり、自分はイスラエルだと名乗りながら、実際には主なる神を信じておらず、偶像崇拝を行い、不信仰な生活を行っているため、イスラエルとは認められません。

また「ユダの水に源を発し」(1)と語られていることに注目したいと思います。南ユダ王国がバビロンに滅ぼされ、捕囚の民とされます。そういう意味では、ここは南ユダ王国とも読めますが、「ユダの水に源を発する」とは、源流であるヤコブの12兄弟のユダであり、ユダ族のことです

つまり、ユダ族からメシアであるイエス・キリストが約束されています。しかし、イスラエルの中でもユダ族に属しているから、自分は神の民、救われていると自負することは許されないと語っています(1)。

イスラエルに実現することとは(3)、バビロン捕囚とされたイスラエルが、ペルシャのキュロス王により捕囚から解放されて、エルサレムに帰還することです。

捕囚からの解放は、主により預言されています。この預言が実現したとき、イスラエルの民は、自分たちの拝んでいる偶像の手柄としようとします。主はこのイスラエルの民の罪を、事前に否定しています(5)。

主なる神は、すべてを聖定され、歴史において明らかにされます。そしてイスラエルの民、私たちキリスト者には、主の御言葉により預言を語り、それを成就されます。主の御業は偶然の結果ではありません。

主は、預言としてイスラエルに語りかけますが、イスラエルは、突然、創造が始まったかのように、突然の出来事として受け止めます(6-7)。秘められた出来事である奥義は、主の御言葉に聞き従う者には、提示され、その意味が明らかにされますが、主の御言葉に聞き従おうとしない者には、突然の出来事として発生します。

主なる神は、イスラエルとされた肉のヤコブが罪を重ね、背くことを知っています。そのため、南ユダ王国を滅ぼし、バビロン捕囚へと導きます(8)。

しかし、主はイスラエルを滅ぼし尽くすことはありません(9)。主が、ユダを捕囚の民とするのは、選びの民とされたユダが、罪を繰り返し、主の御名を汚し続けるからです。捕囚としての懲らしめにより、真に主の栄光を誉め讃える民となることが求められています(11)。

「ヤコブよ、わたしに耳を傾けよ。
　わたしが呼び出したイスラエル。
　わたしは神、初めであり
　　また終わりであるもの」(12)。

主なる神は、改めてヤコブに対して呼びかけます。そして真のイスラエルになるようにと。「わたしは神、初めでありまた終わりであるもの」という言葉は、アルファでありオメガであると黙示録(1:17、22:13)でも語られるように、聖書全体を貫くことであり、主の存在を指し示す言葉です。主なる神は、時間的に永遠、空間的に無限、そして変わることのない不変の霊です。

そして主が彼を呼び、その意志を成し遂げると語られます(14,15)。彼とは、ペルシャの王キュロスであり、彼によりバビロンを滅ぼし、イスラエルを解放することを、宣言してくださいます。

肉のヤコブとしてではなく、主に選ばれ、神の民イスラエルとして、主の御言葉に聴き従うように、主は語りかけます。主は私たちの知らない所で、救いと滅ぼしを行われるお方ではありません(16)。

主は、主なる神を信じ、主がお語りになる御言葉・預言に耳を傾け、聴き従う者を救い、その罪を贖ってくださいます。そして、どのような苦しみの中にあっても、守り、導いてくださいます(17)。

そして、アブラハムを召し出したとき(創世記12:1～3、15:5-6)の約束が改めて示され(19)、出エジプトにおける荒れ野の40年を顧みるように語られています(21)。

主は聖定において御計画されたことを、歴史において成し遂げてくださいます。このとき、御言葉としてお語りくださった約束は、必ずお与えくださいます。

預言者は、「母の胎にあるわたし」(1)と非常に意味深げなことを語り呼びかけます。

3節では、「あなたはわたしの僕、イスラエル」と語ることから、主により選ばれた民イスラエルに対する呼びかけであることが理解できます。

つまりこの預言は、バビロン捕囚となったイスラエルを、エルサレムへと帰還することを約束する言葉であり、民族としてのイスラエル、「イスラエルの残りの者」(6)と言って良いかと思います。

しかし同時に預言者は「あなたによってわたしの輝きは現れる」(3)、と語り、また「わたしはあなたを国々の光とし　わたしの救いを地の果てまで、もたらす者とする」(6)と語ります。救い主であるメシア、イエス・キリストを指し示していると言っても、過言ではないでしょう。

そして主は、故郷を追われ、捕囚の民とされ、侮られ・忌むべき者とされ、支配者らの奴隷とされたイスラエルに対して、「救い出す」と語られます(7)。

イスラエルは、バビロンから解放され、荒廃したエルサレムに帰還し、そして神殿再建して国を再興することが求められます(8-9)。主なる神は、アブラハム・イスラエルとの約束を成就するお方であり、イスラエルがここで途絶えることはありません。

「天よ、喜び歌え、地よ、喜び躍れ。
山々よ、歓声をあげよ。
主は御自分の民を慰め
その貧しい人々を憐れんでくださった」。

預言者はもう救いが完成したかのように語りかけます(13)。しかし預言者がこの言葉を語っているのはバビロン捕囚の前、もしくはその最中です。捕囚の民にとっては、先のまったく見通しのない状態の中、主は救いの希望を約束してくださいます。

こうした中に生きるイスラエルの民（現在、苦しみの中に生きるキリスト者も同様）、主による救いの約束に希望を持ち、主に委ねた信仰生活が求められています。

「主はわたしを見捨てられた
わたしの主はわたしを忘れられた、と」。

先の見えない状況の中、イスラエルも、キリスト者も、絶望に感じます(14)。しかし主なる神は、力強くお語りくださいます。

「たとえ、女たちが忘れようとも
わたしがあなたを忘れることは
決してない」(15)。

主なる神は、永遠から永遠に生きておられるお方です。私たち人間からすれば70年後の解放は、非常に長く、途方に暮れます。しかし主なる神は、イスラエルを忘れるお方ではありません。主はアブラハムへの約束を忘れることなく、エジプトに下ってから400年後にイスラエルを解放してくださったように、捕囚の民となったイスラエルをも、エルサレムに帰還することを成し遂げてくださいます。

主なる神は、目に見えない、死んだ神ではなく、預言者をとおして言葉を発し、イスラエルを解放し、救いをお与えくださる神です。主は、イスラエルを救うためにペルシャを立て、イスラエルを救い出します。

捕囚の中、苦しみの中にいるとき、孤独に感じ、主からも同胞からも見放された思いにされるイスラエルですが、しかし、捕囚から解放のとき、同胞の民が、エルサレムに満ち、多くの神の民が共にいることを味わうことが許されます。

今に生きるキリスト者も同様です。各個教会は小さくなってきています。近くに、キリスト者がいないと孤独に感じてしまうこともあるでしょう。しかし、中会・大会・さらに教派や国を超えた交わりが与えられることにより、多くのキリスト者・同志がいることに気づかされます。だからこそ私たちは、目を教会の中だけに留めることなく、外に外に求めていくことが必要です。

24節では改めて、囚われの身イスラエルの不安が露呈されます。

しかし、主なる神は答えてくださいます。

「わたしは主、あなたを救い、あなたを贖う
ヤコブの力ある者であることを」(26)。

ここで語られている主による預言を、力強い勇気の出る言葉として受け入れるか、虚しい言葉として聞き流すのか、問われてきます。主なる神は、永遠から永遠に生きて働いておられます。主なる神は、御言葉をもって私たちに語りかけてくださいます。主なる神は、約束の言葉を忘れることはないお方です。

そして主なる神は、旧約のイスラエル、そして今に生きる私たちを救い出し、御国の祝福をお与えくださいます。

主なる神は、イスラエルに対して離縁状を渡したと語ります(1)。バビロン捕囚のことで、イスラエルが罪を犯した結果です。

しかし主はイスラエルを迎えに来ます(2)。主は、イスラエルの罪を赦して贖い、連れ帰ると語られます。

しかし、いざ主がイスラエルを迎えに来ても誰もいません(2)。つまり主が遣わした預言者の言葉にだれも耳を傾けません。

イスラエルの民は、主なる神から離れ、主を忘れていき、主がイスラエルを救う力などないと思っていました(2)。しかし主なる神は世界を支配し、そして自然をも、御力において支配されています。

そして主ご自身が、喪服を着て粗布で覆われることにより、イスラエルの罪に対する悔い改めを行ってくださいます(3)。これはキリストの十字架を指し示しています。

続く４～９節では、主なる神は「わたし」に対して語られます。これは預言者としてのイザヤであり、バビロンに捕囚の民とされつつ、主の御言葉に聴き従ってエルサレムに帰還するイスラエルの民一人ひとりのことです。また「わたし」と単数形が語られていることから、救い主であるイエス・キリストが指し示されています。

主なる神がイスラエルの残りの者たちを救い出しますが、最初からすべての人に対して語りかけるわけではありません。まず一人の預言者の石の心を砕いて信仰を与え、主の御言葉に聴き従う者とします(4-5)。

一人の預言者が与えられ、彼から罪の悔い改めと福音が伝えられ、それがイスラエル全体に広まることが求められます。そして、教会は牧師の説教が中心となりますが、教会に集う一人ひとりが主の証し人とされることから福音は広まるのであり、牧師任せ、教会任せでは、教会は成長しません。

また、このときのイスラエルの現実を忘れてはなりません。捕囚の民として囚われの身です。主への信仰を告白すると、虐げ迫害を避けることはできません。

しかし主なる神は、預言者に主がどのようなお方であるかをはっきりと示され、固い信仰を与えます(7)。

主なる神は今も生きて働き、イスラエルを助ける力を持っておられます。この世にあって虐げられ、蔑まされたとしても、主の贖いに与り、罪が赦され、神の御国の祝福に入れられます。この神の御力と加護・愛が示されているからこそ、どれだけ辱めを受け、迫害を受けようとも、預言者は、主なる神への信仰を強くし、主の御言葉に聴き従う者とされます。

伝道といえば、「一人でも多く」との思いになりますが、一人ひとりに信仰が与えられ、その信仰が強く・堅固にされていくことが大切です。

最初は一人です。しかし次第に同志が与えられます。そのため、権力者に無批判に服従することなく、神の義・正しさを貫き、信仰の戦いをすることが求められます。「わたしの正しさを認める方は近くいます」と語り、主なる神が共に戦ってくださいます。最初は一人であっても、主は共に信仰を貫く仲間を与えてくださいます。そしてその結果、主が勝利をお与えくださいます。

統治者に逆うとき、同胞にさえも冷たい目で見られることがあります。しかし、私たちキリスト者は信仰を貫き、主に従って生きることが求められています。

主なる神は、主を信じ、主に従い行く者をお救いくださいます(9)。「救い」＝「神の義の獲得」は、主なる神を信じる者にのみ、キリストの十字架の贖いに与ることにより、与えられます。

また、神の民に救いをお与えくださる主なる神に、誰も敵対することはできません。そして主を信じることなく、主に逆らう者は、彼ら自身の行いの結果としての裁きを、誰も逃れることはできません。

最後に主なる神は、まだ主の御声に聴き従おうとしない者たちに改めて語りかけます。主に愛され、主を信じて、神の子と召されている霊のイスラエル以外の者たちは、誰一人、主なる神を畏れる者はいません。彼らは、御言葉から示される真理を道明かりとして歩むことはしません。自らの知恵や武力を拠り所として生きています。

しかし人間の知恵や武力によって、主なる神に勝利することはできません。主は、神の民イスラエル、現在に生きるキリスト者に、御言葉の光を照らし、勝利をもたらしてくださいます。御言葉であるキリストは、暗闇を照らす光としてクリスマスに来られました（ヨハネ1:1-5）。

預言者は「わたしに聞け」と繰り返し語ります(1,4,7,21)。

「正しさ」と訳されているところを他の訳は「義」です。ここは単なる相対的な正しさではなく、神の義が求められています。私たちは、生きて働く主の御前に立ち、主の御言葉に聴くことが求められています。

私たちが人の話しを聞くときでも同様ですが、原理・原則、あるいは歴史を遡って原点を理解しなければ、話しの全体像・確信を理解することはできません。神の義・真理を求めようとするとき、イスラエルの民の原点であるアブラハム、母サラに立ち戻ることが必要です。アブラハムがなぜ「イスラエルの父」と言われているのか、主がアブラハムをどのようにして召し、イスラエルとしての祝福に入れられたかを確認することが求められます（参照：創世記17:1～6)。

アブラハムに与えられた祝福の故に、主はイスラエルを祝福する責任を負われました。そのため、自らの罪の故にバビロン捕囚となるイスラエルの民ですが、なおも主は、「シオンを慰める」、「すべての廃墟を慰める」とお語りくださいます(3)。その結果、イスラエルに喜びと楽しみ、感謝の歌声が響きます(3)。ここでは未来のことですがすでに完了したこととして記されており、この約束は変わることがありません。

しかしイスラエルの置かれた現実は、捕囚前はアッシリアやバビロンによって、そして捕囚後はバビロンの人たちによって、嘲（あざけ）られ、ののしられます(7-8)。

しかし主なる神は、

「わたしの民よ、心してわたしに聞け。
　わたしの国よ、わたしに耳を向けよ。
　教えはわたしのもとから出る。
　わたしは瞬く間に　わたしの裁きを
　　すべての人の光として輝かす」(4)。

……と語られます。

主なる神が、近くにいてくださり、イスラエルに対する救いと解放、そして諸国に対する裁きを実現してくださいます(5-6)。

そして、３回目に「わたしに聞け　正しさを知り、わたしの教えを心におく民よ」(7)と語った上で、

「わたしの恵みの業はとこしえに続き
　わたしの救いは代々に永らえる」(8)と語ります。今の苦しみではなく、永遠に力を持っておられる主なる神の導きを信じることです。今に生きておられ、同時に永遠から永遠に支配し、また神の国を完成してくださる主なる神を覚える必要があります。

「奮い立て、奮い立て
　力をまとえ、主の御腕よ。
　奮い立て、代々とこしえに」(9)と預言者イザヤはイスラエルに対して語ります。

「ラハブ」(9)は海の怪獣を意味し、エジプトを象徴しています。出エジプトで主が勝利を遂げてくださったことを指し示しています。そして主は自然をも従わせます。

「主に贖われた人々は帰って来て
　喜びの歌をうたいながらシオンに入る。
　頭にとこしえの喜びをいただき
　喜びと楽しみを得
　嘆きと悲しみは消え去る」(11)と、イスラエルが、捕囚から解放され、勝利をもって喜びの凱旋を迎えることが約束されます。

サタンの裁きと勝利の凱旋は、終末における最後の審判と神の国の完成に通じます。このときサタンは滅ぼされ、もう嘆きも悲しみもありません。

「わたし、わたしこそ神、
　あなたたちを慰めるもの」(12)。

イザヤ書51章の特徴ですが、同じ言葉を繰り返し強調します。

しかしイスラエルの民は、現実には、目の前の敵を恐れています。苦痛が永遠に続くのではないかと思います。だからこそ恐れます。苦痛から逃げたいのです(12-13)。

だからこそ、主なる神が慰めてくださるお方として、いつも近くにいてくださることを忘れてしまいます。

しかし主はイスラエルを解放してくださいます(14-16)。「シオンよ、あなたはわたしの民」(16)と語り、主はアブラハムへの約束を忘れることはありません。

だからこそ、「目覚めよ、目覚めよ
立ち上がれ、エルサレム」と語られます(17)。

しかしイスラエルは主によって裁かれ、滅ぼされます(17-19)。イスラエルの民が、酒に酔っているごとく、自らに酔い、主の御声に聞こうとしないからです(21-22)。

それでも主はイスラエルを愛し、主の裁きが神の民に襲いかかることはなく、主は苦しみから解放し、恐怖を取り除き、救いと祝福の希望においてくださいます(22)。

主なる神は、バビロン捕囚として囚われの身であるイスラエルを、第二の出エジプトとして、救い出してくださいます。

しかしここでは、「イスラエル」を用いず、「シオン」を繰り返します。つまり「シオン」は肉におけるヤコブの子であるイスラエルのすべてではありません。イスラエルの残りの者、霊的なイスラエルである救われる民のことを指し示しています。

「奮い立て、奮い立て」(1：参照51:9)。バビロン捕囚・囚われの身ですが、主なる神が勝利を遂げ、シオンの民を解放することが決定しており、恐れる必要はありません。

「輝く衣をまとえ、聖なる都、
　エルサレムよ」(1)。

メシアによって贖い清められたイスラエルの姿が語られています。エルサレムへの帰還は、神の民としての勝利の行進です。だからこそ、割礼を受け、神の民とされたシオンに対して、無割礼の汚れた者が攻め込んで来ることは決してありません。

キリストは十字架の死と復活により、死・罪・サタンに勝利を遂げてくださいました。無割礼の者・神の刻印が押されていない者は、エルサレムに帰還するとき、最後の審判において滅びが宣言されます。そのために立ち上がるよう求められます(2)。

イスラエルは、捕囚の民とされていましたが、彼ら自身が代価を支払うわけでもなく、ただ神の恵みにより解放されます(3)。「無償の贖い」と言いますが、イスラエルや私たちが何か良いことをしたから、あるいは代価を払ったから救われたのではなく、主の一方的な御力・御恵みにより救われます。ですから実際にはキリストの十字架が代価であったのですが、イスラエルは何も代価を支払う必要はありません。

ヤコブとヨセフの時代にエジプトに下ったイスラエルは、次第に奴隷とされ過酷な労働が強いられました。また北イスラエルはアッシリアにより滅ぼされました。そしてバビロン捕囚です。イスラエルは、繰り返し虐げられ、苦しめられてきました(4)。

出エジプトを果たすとき、イスラエルの民は、モーセの働きにより、イスラエルを救う主なる神の存在を知りました。またバビロン捕囚においても、70年後の解放を主は約束してくださっています。バビロンがペルシャにより滅ぼされ、イスラエルが解放されることにより、シオンの民は主なる神を知るようになります(6)。

主なる神による救いに与り、主による平和を享受し、救いという良い知らせ（福音）を聞いた者は、主を讃美し、誉め歌を歌う者とされます(7-8)。

奴隷からの解放・捕囚からの解放が、どれだけ恵みに満ちたことであるかがはっきりと示されます。ここに弾けんばかりの喜びと主への讃美があります。

パウロはローマ10:15-17でここを引用します。しかし主による救いに与ったイスラエルの民が皆、主と出会い・主の恵みに満たされたわけではありません(ローマ10:16、イザヤ53:1)。救いに与った者の中でも、主なる神を知り、主の御業と受け止めた者が、喜びの歌を歌い、主を讃美します(10:17)。

主なる神と出会うと、エジプトや捕囚の期間の偶像や乱れた生活が露わになります。シオンの民には誘惑が一杯あります。だからこそ出エジプトにあって律法(十戒)が与えられました。何が義・聖であり、何が罪であるかが示されることにより、イスラエルは罪から離れることができたのです(11)。

そして出エジプトにおいて、主の約束の地が与えられていく一方(ヨシュア記)、罪に汚れた民の主による裁きと共に、主の一方的な救いが語られていきます（士師記)。

「主の祭具を担う」(11)とは、生け贄を行うことにより、罪の贖いを献げる働きが与えられました。主による一方的な贖い・救いが与えられたイスラエルは、なおも罪を犯すが、罪を悔い改め・信仰を新たにしつつ、歩むことが求められます。今に生きる私たちも、礼拝、特に主の晩餐の礼典において確認することが求められています。

主による救いに与るイスラエルであっても、日々信仰が試され、誘惑により信仰が弱められ、罪を犯します。しかし焦ったり脅えたりする必要もありません。主なる神が先頭に立って導いてくださり、また最後尾においても主が共にいてくださいます。

私たちは、今の教会の現状を顧みるとき、心配になります。そして焦ります。しかし、それでもなお、主なる神が共におられることを確認し、主に委ねた教会形成が求められています。

【祈祷会奨励】「背いた者のために執り成しをしたのはこの人であった」
イザヤ書52:13～53:12　ウェストミンスター信仰告白11:3（12/25）

52:11,12において、主なる神が、苦しみの中にある神の民を救い、前にも後ろにも主なる神が一緒にいてくださるからこそ、日々、安心して主なる神を信じて、委ねて歩めば良いことを語っていました。13節において､栄光に満ちた主が指し示されます。メシアであるキリスト預言です。

しかし､14節になると場面は一変します。

「彼の姿は損なわれ、人とは見えず
　もはや人の子の面影はない」(14)。

キリストは逮捕され、むち打たれ、十字架に架けられます。ここにはメシアとしての栄光の姿はまったくなく、敗北者・罪人として裁かれる様子が示されます。人々からは「十字架につけよ」と叫ばれ、ご自身の弟子たちすらも、離れていき、謂わば無視された状態に置かれていました。そして人々は十字架に架かるのは、敗北者であると思っていました(4)。

しかし預言者は、キリストの十字架の目的を語ります。

「彼が担ったのはわたしたちの病
　彼が負ったのは
　　わたしたちの痛みであったのに
　彼が刺し貫かれたのは
　わたしたちの背きのためであり
　彼が打ち砕かれたのは
　わたしたちの咎のためであった」(4-5)。

私たちの罪の身代わり、私たちの罪の贖いをキリストが担われました。

主の御前に立つ私たちは、生まれながらにして、また日々の生活の中で、行いにおいても、口から発する言葉においても、そして心の中でも、主に罪を犯しています。その罪の刑罰が、死であり、裁きです。キリストが十字架で苦しみを覚えたのは、私たちが背負うべき十字架です。

「彼の受けた懲らしめによって
　わたしたちに平和が与えられ
　彼の受けた傷によって、
　わたしたちはいやされた」(5)。

キリストを救い主として信じる私たちは、キリストの十字架の故に、罪の贖いが宣言され、神の子として神の御国に入ることが約束されています。そして私たちは、争いのない、互いに愛の交わりに生きる者とされます。そして私たちは、今までの苦しみ・悲しみ・心の痛みに対して、癒やしが与えられ、慰めが与えられます。

「わたしたちは羊の群れ　道を誤り、
　それぞれの方角に向かって行った」(6)。

私たち人間は、罪の故に、神の国へ向かうことができず、彷徨っていました。しかしキリストがその咎をすべて背負ってくださり、命の道が示されました(ヨハネ14:6-7)。

「彼は不法を働かず
　その口に偽りもなかったのに
　その墓は神に逆らう者と共にされ
　富める者と共に葬られた」(9)。

クリスマスの日にお生まれになってから、このときまで､罪を犯したことがない方が、罪人として数えられ、十字架に架けられ、そして苦しみ、死を遂げられました。

また主イエスは「金持ちが天の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」(マタイ19:24) と語られましたが、財を持つ者、成功した者が、神を信じることは少なく、むしろキリストと共に十字架に架かり、主の裁きを免れません。

キリストにより罪が贖われ、救いに入れられるのは、病に苦しむ者・人々に虐げられている者・自分では何もできないことを受け入れ主にすべてをより頼む者です(10)。

「彼は自らの苦しみの実りを見
　それを知って満足する。
　わたしの僕は、多くの人が正しい者と
　されるために彼らの罪を自ら負った」(11)。

キリストの十字架は、主なる神を信じ、そしてキリストの十字架の贖いを受け入れたすべての者の罪が贖われるためでした。すべての者が罪人です。肉の死・滅びに向かっていました。しかし主なる神は、信仰により、私たちを義と認め、神の子としてくださいました（ウ信仰告白11:3)。キリストはそのために、私たちの罪を背負って十字架にお架かりくださいました。

そしてキリストの十字架により、本来神の御子キリストに与えられる神の財産・神の栄光が、私たち神の民・キリスト者に相続として与えられます(12)。

キリストご自身が、罪の故に滅び行く私たちを覚えて、執り成して下さり、主なる神を信じ、キリストの十字架を受け入れるように祈り続けてくださっています。

53章でキリストによる罪の贖いが預言されていました。救い主である主イエスの十字架の罪の贖いにより救いに入れられる人々は喜び歌うわけですが、それが「不妊の女、子を産まなかった女」、「産みの苦しみをしたことのない女」だと語られます(1)。

旧約の世界では、子どもを産むことが、神の祝福の表れであると言われていました。それがないのは、主からの呪いに置かれた人々のことを指します。

ここで語られる女性たちは、直接的にはバビロンによって滅ぼされ捕囚の民とされたイスラエルの民です。主なる神による選びから切り離され、屈辱を味わいます。

またアブラハムの妻サラのことを思い浮かべて頂いても良いかと思います。主はアブラハムに子どもが生まれるという祝福を約束してくださいましたが、サラは90歳になるまで子どもが生まれませんでした。その間に女奴隷ハガルからイシュマエルが生まれ、屈辱を味わいました。

しかし主は、彼女たちの祝福を語ります。主の祝福が約束され(2-3)、祝福の宣言が語られます。「恐れるな、もはや恥を受けることはないから。うろたえるな、もはや辱められることはないから」(4)。

サラにイサクが与えられ、ヤコブから12部族の祝福が与えられていくように、捕囚の民も主による救いに与り、エルサレムの再建に携わることが許されます。ここにはもはや恥を受けることはなく、何も恐れるものはありません。

造り主・贖い主が、共にいてくださいます。そして約束を実行し、祝福に満たしてくださいます(5)。

主に捨てられ、希望がないときがありました。このときは希望がなく、神すら見えず、神の存在を疑う状況に置かれます。しかし主が力を振るい、サラに子どもを与え、また捕囚の民を救い出してくださいます。生きて働く主なる神が、ここにおられることがはっきりと示されます(6-8)。

ノアの時代の洪水において、箱船に入ったノアと家族以外の者はすべて滅ぼされました。しかし主は同じような裁きを行わないと誓ってくださいます(9)。だからこそ、サラにおいても、捕囚の民においても、逃れの道を用意してくださいました。それが苦しみの中にあっても生きながらえることであり、贖い・祝福に繋がります(10)。

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます」（Ⅰコリント10:13)。

主なる神による贖いに与った民は、主からの祝福で満たされます。

第一に、高価な宝石によって代表される、物質的な繁栄です(11-12)。究極的には神の国の完成において与えられる祝福ですが、主は不妊の女を、子を産まなかった女を救ってくださったように、その人を救いに導く過程でお与えくださいます。

物質的な祝福は、あくまで主なる神を誉め讃えられるために用いることが求められ、金の亡者になってはなりません。主がお与えくださる祝福を、主の働きのため、つまり、自分だけのためではなく、隣人のため、苦しみを覚えている人々のために用いることが求められています。

第二に、罪から離れ、信仰的な養い・守りが与えられます(13-14)。主は道徳律法としての十戒をお与えくださいました。私たちは律法を守ることができないことを認め、主に赦しを求める（信仰義認）と同時に、律法を守ることにより、こうした罪の誘惑を避けて、罪を犯すことから守られます。

そのために主は神の民を、礼拝に導き、御言葉の養いを与え続けてくださいます。

そして最後は平和です(15-17)。

今なお、世界において武器をもって戦う者があり、戦争・迫害が続いています。しかしキリストが再臨したとき、すべての罪が滅ぼされ、主に逆らい続ける者たちが滅ぼされます。

だからこそ、今なお、様々な艱難の中に生きる私たちですが、キリストの贖いはすでに完成しており、罪の滅びは約束されていることを忘れてはなりません。そして神の国の完成に希望をもって、日々、歩み続けていくことが求められています。

53章でキリストによる罪の贖いが預言された今、預言者の呼びかけは、捕囚の民イスラエルに限らず、普遍的になります。

預言者は、水や食料を得ることのできない貧しい民に対して、また金のない者たちに対して、訴えかけます(1)。

実際には、お金を払うことにより、水や穀物を買い、餓えを満たすことができます。そして水や食料が尽き果て無くなるとき、再び餓えの苦しみがやってきます。

しかし預言者は「わたしに聞き従えば良いものを食べることができる。あなたたちの魂はその豊かさを楽しむであろう」と語ります(2)。預言者の訴えは、肉による餓えを満たすことではなく、魂の餓えを満たすことを求めよということです。実際、飢えている人々に食べ物を与えることで、肉においては生き続けることができます。しかし、それは真に人間として生きていることではありません。預言者は、魂の餓えを満たすことによって救いを求め、人として生きよと、語ります。そのために必要なことが主の御言葉に聴き従うことです(2)。

主の御前に集まり、主の御声に聴き従うとき、主は魂に命を与え、救い・永遠の生命を約束してくださいます(3)。主なる神と出会い、主との交わりに生きるとき、人間は初めて魂において生きる者とされます。

人が真に生きるためには、私たち自身の持っている罪が取り除かれる必要があります。そのために、私たちに代わって、キリストが十字架において血を流され、肉の死を遂げてくださいました。このときに初めて私たちは、神との交わりを取り戻し、真に生きる者とされます。この人間として生きることを、主を信じる者に、永遠の契約として、主は約束してくださいます(3)。

これが恵みの契約であり、罪を犯したアダムに約束された原福音（創世記3:15）が、ノア・アブラハム・モーセにおいて更新され、ダビデにおいて約束されたものです。時代において形は変化していきますが、現在に生きる私たちにも、引き継がれています。

主は「彼」としてのキリストを立て、世界を統治してくださいます(4-5)。そして、旧約におけるイスラエルの民ばかりか、すべての国の民に対して、呼びかけておられます。そして主の御言葉に聴き、そして主の御許に馳せ参じる者たちに、主は救いを提供してくださいます。

主の御声に聞き、主の御前に集まる者の救いが示される一方(6)、主からの呼びかけがありながらも、神の御声に聴き従うことなく、逆らう者・その道を離れる者は、主の救いはなく、真に人間として生きることはできないことが宣告されます(7)。

そのため、「神に立ち帰れ」と繰り返し呼びかけられます(7)。だからこそ、教会・そして私たちキリスト者は、主の御言葉を携え、証しすることが求められています。

さて、イスラエルの民は、肉におけるイスラエル、イスラエルの12部族に属するものであれば神の民として救われると思っていました。しかし主の思いは異なります(8)。

ユダヤ人がイスラエルとなったのは、メシアであるキリストが指し示されるためであり、キリストが来臨したことにより、ユダヤ人がイスラエルであることの役割は終えます。ですから新約の教会において、主なる神を信じるキリスト者のことを、霊によるイスラエルであると語られています。

しかしユダヤ人たちの選民思想は、今にまで続いています。今のイスラエルとパレスチナの問題も、ユダヤ民族が、主なる神を思い知ることなく、「選民思想」を捨てないことに根本的な原因があります。

私たちは計り知ることのできない主の御計画を省みることが求められているのであって、主なる神の御業を私たちが頭の中に閉じ込めてはなりません。

主の貴い御計画は、主が御言葉を発するとき、石の心を持っていた者の石の心を砕き、肉の心を与えることにより、主を受け入れ、信じ、主の御言葉に聴き従う者へと変えてくださいます(11)。だからこそ私たちの福音宣教は、今の時代にあっても、空しくはありません。

主の御言葉に聴く者は、主によって与えられる救いに喜びが溢れます(12)。それは今、現実には苦しみの中にあったとしても、真の人間として主がお与えくださる神の国の祝福に満ちた世界が約束され、決定しているからです（参照：ウェストミンスター小教理1)。

だからこそ、私たちは信仰に希望をもって生き続けるのです。

主なる神は、「正義を守り、恵みの業を行え」と語ります(1)。主なる神の御言葉に聴き従い、主の御前に集まった人々に対する呼びかけです。そうすることにより、主による救いが実現し、主の恵み・神の御国の祝福を確認することができます。

ここだけを読むと、律法を守ることにより、主による救いを獲得し、神の国に入ることができると解釈することも可能かと思います。しかし主の御言葉に聴き、主の御前に集められ、主を信じる者に神による救いはすでに与えられ、神の国が約束されています。最初に、救われた者と道徳律法の関係を、ウェストミンスター大教理問97から確認したいと思います。

神を信じるとき、主の御前に立つ自らの罪が示されます。そして旧約のイスラエルの民に対しても、メシアが自分たちの罪の贖いを行ってくださることが宣言されました(53章)。新約に生きる私たちには、キリストが地上の生涯において罪を犯さないことにより律法を守り通し、さらに十字架で死を遂げることにより、私たちの罪の贖いは成就しています。つまり私たちの持っている罪の負債を支払うと共に、主が生命の契約において人に求められた律法を守ることをキリストは成し遂げてくださいました。だからこそ私たちは、救いへの感謝に生きることとなります。

主なる神が持っておられる義・聖・真実を、私たちはまっとうすることはできませんが、キリストによって与えられた罪の贖いの故に、罪から離れ、神の子に相応しい者としての道を歩み始めます。それが道徳律法を守るということであり、その結果、神の民は罪の誘惑から守られ、神の国への道を歩み続けることができます。

だからこそイザヤは「いかに幸いなことか、このように行う人」と語ります(2)。「いかに幸いなことか」は、詩編1:1を初め詩編で繰り返し表れる言葉であり、マタイ福音書５章では八福として語られます。

つまり神の恵みに生きる者は、第一に安息日を守り、神を汚さないようにし、第二に悪事に手をつけない者として生きます。

第一の「安息日を守る」とは、具体的には安息日を守ることであり、主を礼拝することです。旧約の時代は、安息日厳守が語られ、労働から離れることが厳しく戒められていました。

キリスト教会において、安息日厳守が語られてきています。特にピューリタンは、主の日一日を厳格に安息することを強調し、朝・夕に礼拝を守る伝統は、ここから来ています。教会で夕拝がなくても、地域の人々と共に聖書研究会が行われ、また家庭礼拝を行うことにより、一日、主の御前に礼拝を献げることを行いました。

現在では礼拝厳守が以前ほど強調されることはありません。私自身も「礼拝厳守」と語るとき、律法主義的になることに注意します。大切なことは、主の日に主なる神が、私たち一人ひとりを教会へとお招き下さっていることを覚えることであり、礼拝に出席することの喜びに満たされること、また礼拝に出席できないときに、主の御前に祈り、なおも主の恵みの内にあることを覚えることが大切です。そして、主の日の礼拝があるにも関わらず、平然と教会に来ないことこそが、主の名を汚す行為です。

第二に「悪事に手をつけないように自戒する」ことです。律法の第一の板（第一戒～第四戒）において、主なる神が私を愛して下さっているように、主なる神のみを愛し、偶像から離れることを覚えることであり、第二の板（第五戒～第十戒）において、自らの弱さ・罪の故に完全には守ることができないことを覚えつつ、律法を守ることにより罪の誘惑を避けることができ、神の恵みに歩み続けることを覚えることが大切です。

このように主を求め、神による救いの契約を受け入れる者であるならば、異邦人であったとしても、宦官であったとしても、主の恵み・救いに入れられ、そこから漏れることはなく、とこしえの名が神に刻まれ、消し去られることはありません(4～8)。

一方、選民と自負するイスラエルの民であっても、聖なる神を畏れることなく、御言葉から離れ、自分の欲に従い自分勝手な生活をするならば、神の恵みと祝福に与ることはできません(9～12)。

私たちは、主によって与えられた罪の贖いと神の子としての祝福に入れられていることに感謝し、主の御言葉に聴き従う歩みを行い続けることが求められています。

神を信じ、信仰に生きた者でも、悲惨な死を遂げていきます(1)。この時代、アッシリアやバビロンによって苦しめられ、滅ぼされていきます。多くの神の民も生命を落としました。そしてその死は、誰からも覚えられることなく、見捨てられたようです。「しかし、平和が訪れる。
真実に歩む人は横たわって憩う」(2)。
神の民が肉の死を遂げるとき、主により平和が与えられます。
主を信じる者は、死から解放され、天国における永遠の祝福が約束されていますが、キリストが再臨するまでは、肉の死を避けて通ることができません。なぜならば最初の人アダムにあって、主は「善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」(創世記2:17) と語られましたが、地上にあって罪を犯した者は、死を逃れることができなくなったからです。
しかし信者の死は、死のとげ・呪いから解放されます（ウェストミンスター大教理問85)。ルカ福音書には、金持ちとラザロについて語られています(16:19-31)。主を信じることなく死んだ金持ちは、炎の中でもだえ苦しんでいます(16:24)。一方、できものだらけの貧しい人ラザロは、アブラハムのそばに連れて行かれ、主による祝福に満たされていることが紹介されます(16:22)。
つまり、キリストの再臨を待つことなく、肉の死を遂げた神の民は、もう主からの祝福に生きる者とされているのです。
一方、肉におけるイスラエル人は自分たちは神に選ばれた民であると自負しつつ、偶像崇拝や姦淫の罪を繰り返しています。彼らは自らの姿を反省するどころか、誇らしげに振舞い，まじめに正しい生き方をしている同胞をあざけります(3-4)。主は、彼らを「偽りの子孫である」と断言します。
その後、不道徳な宗教的行為や偶像礼拝の儀式に参与する彼らの姿の罪が鋭く指摘され、責められていきます(5-9)。また、彼らは偶像であるメレク神にささげ物をするために遠くまで出かけ、死者の霊と交信するために霊媒を陰府（死者の世界）まで使者として送り出します (9、参照8：19)。
これらのことは、聖なるイスラエルの神の御旨に適わない忌み嫌われることであり、主から罪であることが指摘されています。
「誰におびえ、誰を恐れて、お前は欺くのか。
お前はわたしを心に留めず
心にかけることもしなかった」(11)。
彼らは口では主なる神を信じると語りながら、神を礼拝し生贄を献げることなく、武力に脅え、そしてメレク神を拝みます。アッシリアやバビロンによって滅ぼされようとしている中、目の前の武力に屈し、彼らの神に仕えようとしています。
イスラエルの民は、主なる神が何も語ることなく、沈黙している、死せる神であるごとくに思っていることを指摘します(11)。
その上で主なる神は、イスラエルが拝んでいる偶像には力がなく、何の役にも立たないこと、助けを求めて叫んでも救ってくれることがないことを指摘します。主なる神は、ひと息でそれらを吹き去らせ、滅ぼす力を有しています(11-13)。
その上で、主なる神を信じ、主により頼む者こそが、約束の地を受け継ぐことを約束してくださいます(13)。
そして、主なる神は預言者イザヤに対して、イスラエルの民が悔い改めて神に立ち返れるように呼びかけよと語られます(14)。
①罪を悔いて遜る者には神が味方となり、命をお与えくださる (15)。
②神はいつまでも罪を責め・怒りを燃やすことはなく、むしろ、神の元に帰って来て生きるようにと待っておられる (16)。
③神は罪を厳しく責められるが、人がご自分の元に帰って来るのを待っておられる。しかし人は自分勝手に行動している(17)。
④それでもなお神は、人に慰めを与え、祝福しようとしておられる (18)。
⑤主なる神はすべての者を創造し、生命をお与えくださっている。だからこそ、罪を悔い改め神に立ち返り、主の平和を求める者に、異邦人にも、イスラエルにも、生命をお与えくださる (19)。
今に生きるキリスト者も、様々な形で試練の中に置かれます。迫害・戦渦の下に置かれている人たちもいます。そして日本に生きる私たちも、教会が縮小しようとする問題を抱えています。キリスト者であること自体が、茨の道のようです。
しかしキリスト者が、苦しみの中、肉の死を遂げたとしても、主は神の栄光へと入れて下さり、安らぎをお与えくださいます。

イザヤ書58章は、冒頭から、預言者に対して、イスラエルの民に訴えるように叫べと語られます。

「喉をからして叫べ、黙すな
声をあげよ、角笛のように。
わたしの民に、その背きを
ヤコブの家に、その罪を告げよ」(1)。

それはなぜか？　イスラエルの民が主にこのように訴えるからです。

「何故あなたはわたしたちの断食を顧みず苦行しても認めてくださらなかったのか」(3)。

イスラエルの民は、断食を行っています。おそらく主によって定められた日に、定められたとおりに行っていたことでしょう。彼らは自分たちは主なる神を信じ、主を礼拝しているとの自負を持っています。しかし彼らの献げる断食に対して、主は何も応えてくださりません。なぜなのか？そのことに対する嘆きがここで語らえています。

主は彼らが行う断食の態度を見ておられます。彼らは断食の日に、「したい事をし、お前たちのために労する人々を追い使い」ます(3)。また断食しながら「争いといさかいを起こし、神に逆らって、こぶしを振る」います(4)。このような断食行為を主が聞かれることはありません(4)。

このような行為は、主が断食として受け入れてくださることはなく、主に喜ばれることはありません(5)。

では断食の日に求められることはなんでしょうか？　食事を抜けば良いでしょうか？　形を整えれば良いのでしょうか？

断食は、主なる神への礼拝行為です（参照：ウェストミンスター信仰告白21:5)。そのため、厳粛に、そして清く、経験な仕方で用いられることが求められます。

つまり、神を礼拝するときも同様ですが、断食を行うときには、日常の煩いから離れ、厳粛に主の御前に出なければなりません。そうであるならば、日々の生活、ましてや争いごとからは離れなければなりませんし、頭の中からも忘れなければなりません。

そして主が断食において求めていることをお語りになります。「悪による束縛を断ち、軛の結び目をほどいて、虐げられた人を解放し、軛をことごとく折ること。更に、飢えた人にあなたのパンを裂き与え、さまよう貧しい人を家に招き入れ、裸の人に会えば衣を着せかけ、同胞に助けを惜しまないこと」(6-7)。主の御前に断食を行うとき、自らに与えられている恵みに感謝することができます。このとき、苦しみ・虐げの中にある者、飢えた者・貧しい者を覚え、それらの人々に施しを行う者とされるのです。こうした行為は、主なる神との正しい関係を築いているからこそ可能となります。

しかし聖書がこのように語ると、断食を行い、貧しい者たちに施しを行えば良いとする人々も現れます。しかし、ここではそのようなことを求めているのではありません。繰り返しになりますが、主が求めておられるのは、断食を行うこと・断食により施しを行うこと、つまり「行為」を求めておられるのではありません。そこにあるあなたの心、主の御前に遜り、すべてを主に委ねることを求めています。

主はイスラエルの信仰を見ておられます。そして主に従う民に対して、祝福をお与えくださいます(8-12)。生きて働く主なる神を信じ、主の御前に立ち、純粋に主なる神に委ねて礼拝を献げるとき・生贄を献げるとき・断食を行うとき、主は、癒やしてくださり、祝福で満たしてくださいます。そして祈りを聞き届けてくださいます。

そして最後に、断食すること・神を礼拝することの本質が語られています(13-14)。断食の形式を整えることではありません。もしかすると、主を礼拝し、断食をすることにより、主からの祝福を勝ち取ろうと願う人たちもいるかもしれません。しかし、ここではそうした自己実現を否定します。

断食し、神を礼拝するときに求められることは、「安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日と呼び、これを尊びとすること……そのとき、あなたは主を喜びとする」ことです(13-14)。つまり、主なる神によって与えられる罪の赦し・救いを受け入れ、喜びをもって信仰生活を歩み、神を礼拝し、ときに断食を行うことです。

救いの感謝をもって、主の恵みにあることを喜びをもって生きるとき、主への礼拝・断食・献金・奉仕もまた、主に喜ばれるものとなります。まさにウェストミンスター小教理問１にありますように、神による救いに感謝しつつ、神の栄光を讃え、永遠に神を喜びとして生きることです。

主なる神との正常な関係を取り戻そうとすれば、見せかけの礼拝・断食は取り除き、主なる神の御前に自らの姿を省み、罪を悔い改めて頭を垂れ、神を礼拝・断食することが求められています(58章)。59章では、私たちに救いを阻害する罪について語ります。

人は自らの行いでは、神による救いを、自ら獲得することはできません。そのため、いくら良き行いを行ったとしても、人は神による救いに近づくことはできません(1)。

そのため改革派教会では、全的堕落と語ります。つまり私たち人間は、主の御前に立つとき、自らの力で救いを獲得することはできない罪人であり、全的に堕落しています（参照：ウェストミンスター大教理問181)。

「むしろお前たちの悪が
神とお前たちとの間を隔て
お前たちの罪が神の御顔を隠させ
お前たちに耳を傾けられるのを
妨げているのだ」(2)。

そして、主なる神はイスラエルの民の罪の現実を訴えます(3,4)。

「彼らは蝮の卵をかえし、くもの糸を織る」と語ります(5)。これは罪人が作り出すものはどのようなものであるかを物語っています。蝮の卵を食べると毒に死に、卵をつぶせば毒蛇が飛び出すと語ります。いずれにしても生きるためではなく、死に向かうものであることを語っています。くもの糸も、着物にすることはできず、むしろ獲物を捕らえ、そして死に追いやるものです。いずれにしても、罪人の考えることは、「破壊と崩壊」の道となります(7)。

「彼らは平和の道を知らず」(8)

「安全保障」と「平和」とは異なると、昨日の211集会において朝岡先生はお語りになりましたが、彼らは「安全保障」により平和を実現すると語りつつ、現実には、軍事力を身につけ、敵と見なす国を滅ぼす準備をしています。これは神が求める「平和」とは真逆であり、「安全保障」と「平和」は似て非なるものです。彼らによって、「平和」を実現することは不可能です。

つまり、彼らは神の正義を知らず、神から遠く離れており、神による恵みの業を追い求めることもなく、追いつくこともありません(9)。それは、光・輝きを追い求めているようであって、現実には闇に閉ざされ・暗黒の中を歩んでいるのです。

盲人が手引きをしても、光を目指すことはできず、暗闇の中をさまようだけです(10-11)。そのため、正義・救いを望んでも、まったく見いだすことはできません。

「御前に、わたしたちの背きの罪は重く…わたしたちは自分の咎を知っている」(12)。

主なる神を信じることなく、結果として闇の中、歩み続ける者は、自らの罪・咎を知っているのです。そのため、主を求めようとしないこと自体、罪の刑罰を受けることを避けることはできません(13～15a)。

こうした人の姿を、主なる神はつぶさに見ておられます(15)。

人は、主なる神からの御手が差し伸ばされなければ、救いを得ることなどできません。私たち自身が、神の御手をたぐり寄せることはまったくできないのです。そのため人が救われるためには、主なる神の恵みに委ねなければなりません(16b)。

「主の救いは主の御腕により
主を支えるのは主の恵みの御業」(16)。

さらに17節ではこのように語られます。

「主は恵みの御業を鎧としてまとい
救いを兜としてかぶり、
報復を衣としてまとい
熱情を上着として身を包まれた」。

主なる神による裁きが行われます。主なる神ご自身が、鎧・兜を身につけなければならないほど、主による罪人の裁きは凄まじいものがあることを物語る表現です。

その一方、自らの罪を悔い改め、主の御名を畏れ敬う者に対する救いが示される、つまり救いの民に対する、罪の贖い・主の裁きからの守りが宣言されます(19-20)。

神が、罪人である私たちと契約を結んで下さいます(21)。私たちは、ただただ自らの姿を省み、自らの罪を受け入れ、悔い改め、そして主によって指し示される恵みを受け入れるだけです。この私たちに対して、主なる神は、契約・恵みの契約を結び、永遠の生命を約束して下さいます。

だからこそ私たちは、この恵みの契約を、子孫・次の世代に伝えていく使命が与えられており、教会形成を行っていくことが大切なのです。

イザヤ書は、南ユダ王国と北イスラエル王国に分裂したイスラエルの民が、自らの罪の故に裁かれ滅ぼされていくこと、そしてユダの人々は、バビロンに捕囚の民とされることが預言されてきました。しかし主なる神は、イスラエルを裁いて終わりではなく、回復してくださることを約束しています。直接的には捕囚からの解放であり、都エルサレムとしてのシオンの回復であります。しかしこのことは同時に、すべての神の民に、主の栄光が現れるときであり、キリストの来臨と再臨、さらに神の国の完成を指し示しています。

「起きよ、光を放て。
　あなたを照らす光は昇り
　主の栄光はあなたの上に輝く」(1)。

この御言葉はヨハネ福音書の冒頭の言葉と共鳴します。「初めに言があった。…言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている」(1:1, 4-5)。しかしこのとき、「暗闇は光を理解しませんでした」(ヨハネ1:5b、イザヤ60:2)。

しかしイザヤは続けて語ります。

「しかし、あなたの上には主が輝き出て
　主の栄光があなたの上に現れる。
　国々はあなたを照らす光に向かい
　王たちは射し出でる
　　その輝きに向かって歩む」(2b-3)。

今まで闇の中、闇に向かって歩んできた者も、光である主なる神の方に向かい始めます。つまり別の言い方をすれば、闇が裁かれ、光に勝利がもたらされます。

これはどういうことかと言えば、私たちは、神の御子イエス・キリストの来臨と十字架の御業が成し遂げられた後の新約の時代に生きており、神の国の完成を待ち望んでいます。しかし旧約の時代に生きるイスラエルの民は、メシアの来臨を待ち望みつつ、その先にある神の国の完成を見ています。ですから私たちがここでキリストの来臨を確認するのですが、同時に、彼らはキリストの再臨、神の国の完成を見ています。

「目を上げて、見渡すがよい。
　みな集い、あなたのもとに来る」(4)。

ここで世界中の人々が、シオンの栄光に魅せられ、集うこととなります。つまり、旧約のイスラエルの民が、バビロン捕囚から解放され都エルサレムに帰還するだけではなく、異邦人とされていた世界中の人々が、主により集められることとなります。

これは信仰によるアブラハムの子孫、霊的なイスラエルのことを指し示しており、復活の主イエスは宣教命令を語られ、すべての民に宣教することを求めています（マタイ28章）が、この宣教によって集められた世界中の人々が主の御元に集まって来ます。

「海からの宝があなたに送られ
　国々の富はあなたのもとに集まる」(5)。

世界中の人々が、神の都に集うことが語られていきます(6～16)。

「シェバの人々は皆、黄金と乳香を携えてくる。こうして、主の栄誉が宣べ伝えられる」(6)。御子イエス・キリストの誕生において東方の博士たちが黄金・乳香・没薬を贈り物として持ってきます（マタイ2章）。

タルシシュは地中海貿易で栄えていた街です(9)。それらの人々が、主なる神に仕えるために集うこととなります。

ここで一つ注意しなければならないことは、万人救済、つまりこの時まで神に逆らっていた者であってもすべての者が救われているとは語られていないということです(12)。

14～16節は、直接的にはイスラエルを苦しめるアッシリアやバビロンのことが語られていますが、それは同時に、主イエスの生涯にわたる苦しみと十字架の御業と共に、キリストの死からの復活・主の勝利と主の栄光が指し示されています。

神の国の完成は、世界中の富が集められる物質的な祝福に留まらず、主は平和をお与えくださり、主の恵みの業が支配します(17-18)。つまり主に逆らう者たちはすべて滅ぼされ、主による勝利がもたらされ、誰とも闘う必要はなくなります。ここに真の平和が到来します。今なお戦渦の中にある人々、苦しみの中にある人々にとって、これほど慰めに富んだ言葉はありません。

太陽も月も、主なる神の被造物に過ぎません。主なる神ご自身が光を持っておられ、永遠に輝き続ける主なる神の光の下に私たちは輝きを得て、祝福に満たされます(19)。

旧約の時代に語られた主の預言は、新約に生きる私たちに黙示録において約束されています(黙示録21:1-4、21:23-26、22:5)。私たちは、ここに語られている主によって与えられる希望に満たされて、日々歩み続けます。

「主はわたしに油を注ぎ
　主なる神の霊がわたしをとらえた」(1)。
　主なる神は、預言者に対して油を注ぎ、預言者としての働きに召し出して下さいましたが、このことは同時にメシアであるキリストを指し示しています。
　旧約聖書は、直接的にはバビロン捕囚からの解放を預言していますが、同時に約束のメシア・キリストの御業により罪の贖いが成し遂げられること、キリストの再臨によってもたらされる神の国の完成を指し示しています。そして主イエスは、ご自身の到来により、この預言が実現したと語ります(ルカ4:17～21)。
　旧約における預言者・祭司・王は、主の働き人として、主から油が注がれました。そして新約の教会においては、牧師・長老・執事は、按手を授かることにより主からの働き人であることが宣言されます。主から遣わされた働き人は、自分の力でその働きを行うのではなく、「主なる神の霊」が包み込んで下さいます。つまり主なる神の働きを行うのであり、常に、主からの御言葉の養いを受け、祈りをもって主に頭を垂れ、主からの召しに従いつつ、その働きに就くことが求められます。
　そしてメシアの働きが３つ語られます。
　第一に、良い知らせである主の福音・救いは、貧しい人に届けられます。自分の力で稼ぐ者・人を支配して生きようとする者・自分の成功のために生きる者ではなく、主の御前に自らの貧しさを知り、主の御前に頭を垂れる者に、救いが示されます。
　第二に、打ち砕かれた心、つまり、虐げられ、苦しみの中、悲しみの中に生きる者を、主が包み込んで下さり、主による救い・主による生命が与えられます。
　そして最後に、捕らわれ人・つながれている人に、自由・解放が告知されます。主による正義を貫いて生きるとき、時に囚われの身とされます。バビロン捕囚の中にもダニエルのように、主に従う故に虐げを受けていた者たちがいました。パウロを初めとする使徒たちも、信仰の故に捕られました。そして殉教の死を遂げていきました。
　そして報復される日、つまり復活のキリストが再臨し最後の審判を行う日、神の国の完成の日が到来して、嘆いている人々を慰め、解放して下さいます。暗い心に代えて賛美の衣、主の輝きが与えられます(3)。
　４節では、イスラエルが捕囚から解放され、都エルサレムを復興して主の祝福に入れられることが語られつつ、同時に、神の国の完成が指し示されます。それは単にイスラエルの民がエルサレムに帰還するのではなく、キリストの来臨と異邦人宣教に導く、すべての民がエルサレムに集められる神の国の完成が指し示されています(5)。
　「あなたたちは主の祭司と呼ばれ」(6)
　イスラエルが主の祭司と呼ばれることは、まさにキリストこそが真の祭司としての十字架による神の民の罪の贖いの御業を成し遂げる方であることを指し示しており、主の栄光が､キリストによって与えられます。
　その結果、イスラエル、そして新約のキリスト者は、信仰の故に恥を受け、嘲られてきたとしても、それにも勝る祝福・永遠の喜びが与えられていきます。
「まことをもって彼らの労苦に報い
　とこしえの契約を彼らと結ぶ」(8)。
　キリストにあって与えられる救いは、永遠の喜びであると同時に、神から与えられるとこしえの契約であると語られます（参照：ウェストミンスター小教理問１)。
　そして主なる神によって与えられる祝福だからこそ、この契約は確実に与えられるものであり、苦しみの中にある神の民にとっては慰めであり、平安でもあります。
　旧約の時代は、イスラエルが神の民とされてきたのですが、イスラエルが選ばれたのは、まさにキリストが指し示されるためであり、キリストにあってイスラエルは祝福されます(9)。キリストの十字架の御業があるからこそ、主なる神を信じるすべての民は、罪が贖われ、神によるとこしえの救いの契約に入れられます。
　キリストによって救いに導かれ、永遠の生命の喜びに入れられているからこそ、主によって喜び楽しみ、神にあって喜び躍ることとなります(10)。
　そして神の国において与えられる神の民の祝福は、あたかも王子・王女として迎えられる如く、晴れやかな姿です(10)。
　それは、主なる神から与えられる恵みと栄誉が、主なる神によって与えられる大地の草花の生命のようです(11)。

イザヤは、イスラエルはバビロンによって滅ぼされ、捕囚の民とされることを預言してきましたが、同時に捕囚の民の救いを語ります。

繰り返し確認してきていることですが、イザヤの時代に、主による救いを語るとき、直接的には捕囚からの解放と都エルサレムへの帰還です。このことは同時に、約束のメシアである主イエスの十字架の死と復活の御業により、罪の贖いと救いが成し遂げられること、さらにキリストの再臨における神の国の完成が指し示されています。

新約の時代に生きる私たちからすれば、捕囚からの解放、さらにキリストの十字架の御業はすでに成就し、キリストの再臨における神の御国の完成を待ちわびています。

今日は61:10からお読みしました。神の御国において花婿によって花嫁が迎え入れられることが語られています(61:10-11、62:4-5)。花婿と花嫁、夫と妻の関係は、新約聖書においても繰り返し取り上げられ、神の御国における神の御子キリストと教会、あるいはキリストとキリスト者の関係において語られます。

まず挙げられるのが10人のおとめのたとえです（マタイ25:1～13)。結婚式を迎え、10人のおとめが花婿を待っています。キリストである花婿の到着は遅れ、予備の油を準備していた５名のおとめのみが、婚宴の席に着くことができました。これはまさに、キリストの再臨を待つ教会（キリスト者）の姿を表しています。

またエフェソ書５章の妻と夫について語られ(5:21-28)、最後に黙示録21:1-5では花嫁のために、新天新地が約束されています。

これらの新約聖書を確認した上で、イザヤ書62:4-5を読むとき、花嫁である神の民が、花婿であるメシアにより喜びに満たされることを理解することができます。

「シオンのために、
　　わたしは決して口を閉ざさず
エルサレムのために、
　　わたしは決して黙さない」(1)。

ここで「シオンのため」、「エルサレムのため」と語られます。シオンは、元々エスラレムの中に一地名でしたが、エルサレムと同義語として用いられているようになります。そしてシオンとエルサレムが重ねて語られるとき、シオンは、神によって完成された神の国を指し示します。

またその直後で「彼女」と語られるのは、シオン・エルサレムと言った地名はヘブライ語では女性名詞だからであり、「彼女の」と訳されているところは「シオンの」、あるいは「エルサレムの」と訳した方が、日本語では分かりやすいかと思います。

主なる神は、イスラエルに帰還を許し、都エルサレムを再建してくださいます。そして光輝く都として、それはキリストの来臨によって神の救いが明らかになり、キリストの再臨によってもたらされる神の国によって完成へと導かれます(1節後半～3節)。

このとき、諸国の民も、つまり世界中の民が、キリスト者・教会を通して、主なる神を知り、神の栄光へと導かれます(2)。

神の都エルサレムが回復することにより、キリストが再臨し、神の国が完成するまで、神の都エルサレム、これは霊的なイスラエルとしてのキリスト教会は、昼も夜も、主なる神により守られており、御言葉を語り続けること、つまり福音宣教を継続することが求められます(6-7)。

それが、主が再建してくださるとき、神の国の完成のときまで続きます。

「主は、御自分の右の手にかけて
　力ある御腕にかけて、誓われた」(8)。

「主の右の手」・「御腕」と語るとき、主の御力、主なる神がすべての責任をもって、誓いを立てられることを物語っています。

それは、主が勝利を遂げ、イスラエルの民をお守りくださることです(9-10)。

「見よ、あなたの救いが進んで来る。
　見よ、主のかち得られたものは
　　御もとに従い
　主の働きの実りは御前を進む。
　彼らは聖なる民、主に贖われた者、
　　と呼ばれ
　あなたは尋ね求められる女
　捨てられることのない都と呼ばれる」
　　(11-12)。

キリストによる十字架の贖いと勝利により、神の御国が完成します。ここに旧約のイスラエルの民も、新約に生きる私たちも、救いの喜びに生きることができます。救いの喜び、主による勝利に希望を持って、日々歩み続けていただきたいと思います。

エドム、ボツラという地名が記されています。エドムはエサウの子孫の土地であり、ボツラはエドムの主要な要塞都市です。ヤコブは兄エサウと和解しましたが、その後、主なる神はヤコブにイスラエルという名をお与えくださり、エドムはイスラエルと敵対する町となります。ボツラに対してエルサレム、シオンが対応しています。エドムに対する裁きは、イザヤ34:5でも語られていました。

つまりエドム・ボツラは、黙示録における大バビロン同様、主に逆らい・滅び行く人々の象徴として挙げられています。

エドムから赤い衣をまとっている者が来ますが、主なる神がエドムに勝利を遂げ、イスラエルに勝利がもたらされます(1)。

しかし衣が赤いのは、ただ主の栄光に満ちた姿であるだけでなく、血を浴びた結果です。主が勝利を遂げますが、サタンが最後まで抵抗して滅んでいきます。

主に救いを求める者がいても、自らの力でサタンに勝利して、救いを獲得できる者はいません。そのため、主なる神ご自身、御子による裁きの日が定められ、達成されます。それは御子キリストが来臨し十字架の御業を成し遂げること、さらにキリストが再臨し最後の審判を成し遂げることにより、完成します。主による裁きは、サタン・罪に対する主なる神の怒りの表れです。

エドムに代表されるサタンに勝利を遂げ、成し遂げられるとき、神の国が完成します。そのとき、キリストの贖いにより罪が赦され、神の子とされたわたしたちが、主の恵みにより神の御国に入れられ、主の慈しみと主の栄誉を賜ります。

神の御国の完成は、主なる神により成し遂げられますが、救いに入れられる神の民に対する主なる神の愛の表れです(7)。

預言者は、「彼ら」と語ります(8-9)。６節まででではエドムの民のことを「彼ら」と語り、彼らは主により裁かれ滅ぼされます。

しかし８節では、「彼らはわたしの民、偽りのない子らである」、と、言われます。主なる神は、彼らが異邦人・エドムだから裁くのではありません。主は彼らに対して、御子イエス・キリストをお与えくださり、キリストを十字架の死に渡し、罪を贖ってくださいました。「しかし、彼らは背き、主の聖なる霊を苦しめた」故に、彼らは主により裁かれます。彼らの裁きは、彼に、主による救いが示されたにも関わらず、自らでその救いを拒否し、主に抵抗して戦いを挑んだ結果です。

主による救いの御業を、神の民イスラエルは、モーセの時代に与えられたエジプトにおける奴隷の解放とエジプトからの脱出により回顧します(11-14)。主なる神は、主なる神を信じ、主による救いに委ねる者に救いをもたらしてくださるばかりか、常に守り導いてくださいます。だからこそ神の民とされた私たちキリスト者は、主の御力を信じ、主に委ねて歩み続けるのです。

しかし同時に、預言者は今の現実を見ています。バビロン捕囚の前後、イスラエルの民は苦しみの中に置かれていました。本当に主の勝利がもたらされ、神の国が完成して祝福に満たされるのか、という状況の中に置かれています(15)。

「あなたの熱情と力強い御業は。
　あなたのたぎる思いと憐れみは
　抑えられていて、わたしに示されません」。

神による救いが決定していても、誘惑の最中、苦しみの中に生きる神の民が不安に陥るのは当たり前のことです。これは信仰が弱いからではありません。サタンの支配の下、苦しみ・艱難の下に生きる神の民にも、信仰が揺さぶられるのです。

しかし預言者の信仰は揺らいでいません。

「主よ、あなたはわたしたちの父です。
　『わたしたちの贖い主』
　これは永遠の昔からあなたの御名です」。

だからこそ私たちキリスト者は、主なる神による支配と救いを否定するのではなく、今のサタンの支配を取り除き、主なる神による勝利のとき、神の国の完成の時を信じて、主に祈り続けます。

「どうか、天を裂いて降ってください。
　御前に山々が揺れ動くように」(19)。

この祈りは、ヨハネ黙示録の最後に記された主の再臨の約束と祈りに相通じるものがあり、これこそが私たちの祈りでもあります。

「以上すべてを証しする方が、言われる。
　『然り、わたしはすぐに来る。』
　アーメン、主イエスよ、来てください」。

（ヨハネ黙示録22:20）

「柴が火に燃えれば、湯が煮えたつように
　あなたの御名が敵に示されれば
　国々は御前に震える」(1)と語られています。「柴」という言葉に注目します。「柴」で有名なのが出エジプト記３章です。神の山ホレブに来たモーセの前に、「柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた」。そして「柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない」状況を目にします(3:2)。そして神が語られます。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから」(5)。「柴」は主の臨在の場、聖なる土地として語られています。

また申命記33章では、ヤコブからヨセフが祝福を受ける場面において、柴が登場します（申命記33:13～17)。

また詩編58編では、主の裁きが速やかに来ることを次のように語ります。

「鍋が柴の炎に焼けるよりも速く
　生きながら、
　怒りの炎に巻き込まれるがよい」(58:10)。

このように旧約聖書において「柴」が登場するとき、主が臨在する場として語られています。そしてイザヤ書においても、主の裁きがもたらされる場として「柴」が語られています。

主の裁きに遭う者たちにとって、主の裁きは恐ろしさのあまり震えんばかりのことであり、山々が揺れ動くごとくです。

それは救いに導かれる神の民にとって、「期待もしなかった（想像を超えた）恐るべき業」(2)です。苦しみの中にある民は、神による救いを求めつつも、半ば諦めに近い思いもあるからです。しかし神による救いを待つ者を、主は喜んで迎え入れてくださいます。主なる神以外に、このように、主に逆らう者を裁き、主の民を救いに導いてくださるお方はありません。

しかし４節は次のように語ります。

「あなたは憤られました
　　わたしたちが罪を犯したからです」。

主は、主を信じる民を救い、とこしえの生命・神の御国を約束してくださいます。しかし同時に主による救いの民は、罪を犯し、神の憤りに値する者なのだと語ります。

主を信じる者に、主からの救いが与えられる確信を覚えつつも、同時に、主の御前に自らの罪の姿を省みることが求められます。そのため預言者イザヤは自らのことを省みます(5-6)。そしてイスラエルの民は、国が敗れ、捕囚の民とされることにより、自分たちの罪が指し示されます。

私たちキリスト者はどうでしょうか？
主の御前に立つとき、行い・言葉・心の中、主の御前に私たちは何も隠すことはできず、私たちは、義・聖・真実なる主なる神の御前に、罪を告白せざるを得ません。

私たちは主の御前に立つことが求められます。主なる神は、私たち人間を創造してくださいました。主の御前に、私たちは粘土で作られた被造物に過ぎません(7)。そして私たちは、自らの良き行いで救われることなどありません。主による裁きに遭うことを避けて通ることができません。

それでもなお、主なる神は私たちを愛していてくださいます。主が私たちを憐れんでくださいます。それゆえに、「主はいつまでも悪に心を留められることなく、あなたの民であるわたしたちすべてに、目を留めてくださいます」(8)。

そして主は、私たちの罪を赦し贖ってくださるために、イエス・キリストを遣わしてくださいました。私たちはキリストの十字架の御業の故に罪が贖われ、神の子として生命を持つことが許されています。

問59　だれが、キリストによる贖いにあずかる者とされるのですか。

答　贖いは、その人たちのためにキリストがそれを買い取られた人々すべてに、確実に適用され、有効に分かち与えられます。その人たちは、時いたって、聖霊により、福音に従ってキリストを信ずることができるようにされます。

最初に、モーセが主なる神と出会い、召命を受けた出エジプト記３章をお読みしました。モーセは主の臨在が示され、主なる神を信じ、主の御言葉に聴き従う者とされました。

今に生きる私たちも、主の御前に集められています。主の臨在の場に、畏れをもって集うことが求められます。そのため自らの罪を悔い改め、主に従うと同時に、キリストによって与えられた罪の赦しに心から感謝しつつ、神の御国の約束に希望をもって、歩むことが求められています。

「わたしに尋ねようとしない者にも」、
「わたしを求めようとしない者にも」、
「わたしの名を呼ばない民にも」(1)。

選びの民ユダ・イスラエルばかりか、すべての民に主なる神は問いかけられます。この主の呼びかけに応える者に主による救いが示されます。主の呼びかけに応える者と共に主はいてくださり、主の加護・救いが与えられています。

主の呼びかけは、「反逆の民、思いのままに良くない道を歩く民に」に対しても、絶え間なくなされてきたのです(2)。しかし神による裁きに遭い・滅び行く民たちは、主の御言葉に聞くことなく、偶像崇拝を繰り返し、主の御名を汚してきました。その結果主なる神は、彼らの罪をすべて明らかにして、裁かれます(7)。

つまり主の御前にあって裁きに遭うのは、イスラエルか否かが問題ではなく、主が呼びかけてくださる救いの言葉に耳を傾け、主を信じ、主の御声に聴き従うのか、否かの問題です。

８節の御言葉は、ヨハネ福音書15章で語られている「わたしはまことのぶどうの木」の話しを思い浮かべることができます。ぶどうは、主なる神からの恵みが与えられることの象徴として語れています。

ですから、主なる神から離れているような者であったとしても、主の御声、主による救いがわずかでも示されているならば、それにすがりつき依り頼むことにより、主は祝福をお与えくださり、滅ぼされることはないことを約束してくださいます。

これは今に生きるキリスト者に対しても訴える言葉ではないでしょうか。自らの不信仰を嘆く人がいます。救われることなく、滅ぼされるのではないかと思う方もいます。しかし主は、僅かでも信仰を持ち、主を信じ、主による救いにすがりついている者に、救いを約束してくださっています。

罪の赦しと救いは、主なる神が私たちを選んでくださったからであり、私たち自身の努力・良き業によるものではありません。

シャロン(10)は、神による祝福を象徴する場ですが、アコルはそうではなく、罪によって災いの地でした。主はこの災いの地を祝福に変えてくださいます。

しかし、主を捨て、主なる神の聖なる山・聖なる礼拝を忘れ、偶像崇拝を行う者に対して、主は剣に渡し、滅ぼされます(11)。その理由は、彼らは「呼んでも答えず、語りかけても聞かず、わたしの目に悪とされることを行い、わたしの喜ばないことを選んだ」からです(12)。

主なる神の民イスラエル・ユダであったとしても、主を信じることがなく、主の御声に聴き従わなければ、主による救いに与ることなく、主の裁きに遭います(13-15)。

そして主なる神を信じ、主の御声に聴き従う人にこそ救いが与えられます(16)。

「この地で祝福される人は
真実の神によって祝福され
この地で誓う人は真実の神によって誓う。
初めからの苦しみは忘れられる。
わたしの目から隠されるからである」。

そして主なる神による救いに与る者に、主は新天新地を約束してくださいます。これが再創造です（17、参照：黙示録21:1～4）。

「代々とこしえに喜び楽しみ、喜び躍れ。
わたしは創造する。
見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして　その民を喜び楽しむものとして、創造する」(18)。

神の国は「代々とこしえ」永遠の場所です。また神の国は、喜び楽しむ場所であり、ここに苦しみも悲しみも憎しみもありません。永遠の生命・神からの祝福の場です。

ウェストミンスター小教理問答

問１　人間の主要な目的は何ですか。

答　　人間の主要な目的は、神の栄光をたたえ、永遠に神を喜ぶことです。

私たちキリスト者は、主による救いに与り、今のとき、主の栄光をたたえ、信仰の証しの生活が求められます。そして救いの喜びに満たされて生きているわけですが、この救いの喜びは、「永遠」に続きます。

これこそが私たちにも約束された新天新地としての神の国の姿です(17-25)。私たちは、聖餐式において、神の国の祝福を覚えて信仰生活を歩んでいます。

主によって与えられる救いとは、まさにこのような神の国であります。この世における信仰生活は、なおも罪の中、虐げる者たちの支配の下にいます。希望を失いかけます。しかし主なる神は、私たちに永遠に続く神の国の希望をお与えくださいます。

主なる神はすべてを支配しておられます。そして創造において天地万物を創造されましたが、主は天に御臨在されています。神は私たちの目には見えない霊であられます。無限・永遠・不変の霊である主なる神に対して、私たち人間は、場所的・時間的・そして変化する体を持った存在です。

そのため、私たち人間が主なる神のために神殿を準備することなど必要ありません。別の言い方をすれば、人間の手により像・礼拝の場を作らなければならないのは偶像であり、そこに主なる神はおられません。

そしてこの主なる神が、天地万物を創造されました。主なる神によらずにこの世に存在するものは何ひとつありません。そして私たち人間も、主なる神により創造されました。そして私たちもまた、主の御支配の下、主の創造に与っています。そして日々の生活においても、主は私たちの必要を満たして下さるお方です。

また神はこのようにお語りになります。

「わたしが顧みるのは
苦しむ人、霊の砕かれた人
わたしの言葉におののく人」(2)。

「顧みる」とは、主なる神の恵みにあり、主による救いにある者、天国における永遠の生命が与えられた者です。つまり救いとは、私たちの側で神を求め信じることで獲得することができるものではなく、主が私たちに恵みとしてお与えくださるものです。

第一に、苦しむ人を主は顧みてくださいます。肉体的・貧しさの中苦しんでいる者、迫害されている者、マイノリティー（少数者）……。第二に霊の砕かれた人です。主なる神により石の心が砕かれ、肉の心・主の恵みが示されたキリスト者一人ひとりのことを指しています。最後に主の御言葉におののく者、つまり主の御言葉を畏れをもって受け入れ、聴き従う者です。

これらは、山上の説教の八福に繋がるのではないでしょうか(マタイ5:4～12)。

一方、形だけの神礼拝・生贄を献げる者・偶像に仕える者・人を虐げる者は、彼ら自身が主なる神を拒否し、主に忌むべきことを行ったが故に、主の裁きを免れることができません。主が求めるには、形ではなく、心・本質が問題となります。

改めて「御言葉におののく人々よ、主の言葉に聞け」と語られます(5)。主の御言葉に聴き従うことなく、主の民を憎み、追い払う者たちの行く末が語られていきます。彼らには主による裁きが行われます(6)。

一方、主による救いに与る者は、産婦にたとえを用いつつ、シオンの民はあっという間に増えて祝福されることが語られていきます(7-9)。ここはエジプトにおいて、イスラエルの民が主の祝福のうちにあり、人口が増えていったことと重ね合わせることができるかと思います。

主の御言葉に聴き従い、主なる神を信じる神の民に対して、「喜び祝え」、「喜び踊れ」、「喜び楽しみ」(10)、「喜びを得よ」(11)、「あなたたちの心は喜び楽しむ」(14)と、繰り返し「喜べ」と語られます。主から与えられる神の御国の恵みと祝福の素晴らしさが、ここで示されています。

同時に、主なる神からの慰めが豊かであることが語られていきます(13)。主なる神は、神の御国において祝福してくださり、喜びで満たしてくださいますが、同時に、この世における苦しみを忘れておられるお方ではなく、今の苦しみに対しては慰め、包み込んでくださいます。

それに対して、主に逆らい行く者たちは、火をもって主の裁きが徹底的に行われます(15-17)。神の御国の完成するとき、主の恵み・祝福に与るキリスト者と、主に逆らい滅びに至る者があることを聖書は語ります。

主はすべての神の民をお集めくださいます。ここで語られるタルシシュ、プル、ルド、トバル、ヤワンと言った地は、イスラエルに属さない異邦人の地であり、滅びることを定められていました(18-21)。しかし、そうした国々・遠い島々にまで、神の栄光が示されていきます。このことが主イエスの宣教命令に繋がります(マタイ28:18-20)。そして主により集められるすべての民が、聖なる山エルサレム、神の御国に集います。

「わたしは彼らのうちからも祭司とレビ人を立てる」(21)。神の御前で主を礼拝し、祝福に満たされることが宣言されます。

主がお与えくださる新天新地（神の国）は永遠に続き、神の民は、もう死も滅びも苦しみも悲しみもありません(22)。私たちはこの救いの約束に希望を持ち、喜びをもって日々歩むことが求められています。